

第IV章 遺 物

内裏地区の遺物は瓦・埴・土器・木製品などである。とくに瓦は内裏地区全域にわたり多量かつ多くの種類がある。土器の出土量は発掘面積の割には少なく、平城宮廃絶時以後、平安時代前期の資料が多い。木製品は井戸 S E 7900 出土遺物が主である。

1 瓦 塩 類

6 A A P・6 A A Q区(内裏)においては、8次にわたる発掘調査(3次、6次、9次、12次、36次、73次、78次南、78次北)によって、多量の瓦塩類が出土した。最も数量が多いのは丸・平瓦であり、軒瓦は49型式94種2115点に及ぶ(別表3・4)。この他に若干の隅木蓋瓦・鬼瓦・面戸瓦などの道具瓦があり、また刻印のある丸・平瓦や塩がある。熨斗瓦と確定できるものは少ないが、平瓦を焼成後に半截して熨斗瓦に転用したと推定できるものはかなりの量になる。

瓦塩類の大半は遺物包含層から出土したが、建物の柱掘形や抜取穴、あるいは井戸・溝などの遺構に伴うものも少なくない。とくに集中して出土したのは、櫻風建物 S B 7600の北側雨落溝、東面築地回廊 S C 156 の西側雨落溝、内裏東北部の S D 7870・7872 などである。なお、平安時代以降の軒瓦が少量出土しているが、これらについては最後にまとめてとりあつかう。

A 軒 丸 瓦 (PL. 70~78・82, Fig. 31~34)

軒丸瓦は985点あり、25型式53種に及ぶ。これらは瓦当文様によって、重圏文軒丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、複弁蓮華文軒丸瓦に大別できる。内訳は重圏文軒丸瓦が1型式1種、単弁蓮華文軒丸瓦が3型式7種、複弁蓮華文軒丸瓦が21型式45種である。

i 重圏文軒丸瓦

6018は4重圏文である。A～Cの3種があり、Cが出土した。Cは第1圏が幅広く、中房状にやや突出する。また第2圏が細く、しかも第2圏と第3圏との間隔が狭い。外縁は上面が丸味をもった傾斜縁で、内面が内反りとなる。CaとCbとがある。Cbは中心の凹みを彫り直して平坦にする。今回の出土例はCbである。Cbは瓦当部と丸瓦部を別々につくって接合する(以下、接合式と呼ぶ)。丸瓦の接合位置はやや低く、接合粘土は内外ともやや多い。接合線は円弧状である。

ii 単弁蓮華文軒丸瓦

6131は外区に珠文と凸鋸歯文をめぐらす。A・Bの2種がある。単弁16弁で中房は突出し、蓮子1+8。弁端が丸味をもち、外区の内・外縁を分つ圏線はない。Aが出土。Aは間弁のある点がBと異なる。範傷のため珠文の一部は内・外区を分つ圏線に接する。成形方法は接合式で、瓦当裏面を一定の高さまでつくったのち、丸瓦を比較的高い位置に押し付けて内外に接合粘土

瓦の出土量

出土状況

6018型式

をあてる。瓦当裏面に円弧状の接合用の溝（以下、接合溝と呼ぶ）のあるものとないものがある。外面接合粘土は瓦当裏面の高さで一度指オサエする。接合線は円弧状。瓦当裏面はわずかに凹むものが多いが、平坦なものもある。接合部内面から瓦当裏面までを縦方向にヘラケズリし、瓦当裏面の下端を横方向にヘラケズリする。丸瓦側面の瓦当近く（以下、側面接合部と呼ぶ）は縦方向にヘラケズリし瓦当裏面に対してほぼ直角に仕上げる。丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

6133 型式 6133は外区外縁が素文で、外区内縁に珠文をめぐらす。また、間弁がなく弁と弁とが接するのが特徴である。A～D、I～Qの13種がある。蓮弁・蓮子・珠文は数にばらつきがあり、蓮弁や外縁の形状も一定でない。A～D・Kの5種が出土した。

Aは12弁で、蓮子1+5。弁端が尖り気味で、中房はわずかに凹む。珠文12。外縁は厚く、内面は直線的に傾斜する。Aaと範の磨耗後に弁を彫り直したAbとがあり、Aaが出土。外区外縁の一部に範傷のあるものがある。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝をつくり、丸瓦を絞り気味にして接合する。接合線は円弧状。丸瓦端面は斜めにヘラケズリする。瓦当裏面は浅く凹む。丸瓦部凹面の瓦当寄りと瓦当裏面を縦方向にナデ、瓦当裏面の下端を横方向にヘラケズリする。側面接合部は縦方向にヘラケズリしてほぼ直角に仕上げる。

BはAに似るが、弁がやや細く、蓮子1+6、珠文15。外縁は厚く、内面が直線的に傾斜する。成形方法は接合式で、接合線は円弧状。瓦当裏面はやや凹み、側面接合部は縦方向にヘラケズリしてほぼ直角に仕上げる。

CもAに似るが、13弁で中房径がやや大きく、蓮子1+6、珠文18。外縁が厚目で、内面も直線的に傾斜する。丸瓦は先端部を絞り気味にして瓦当と接合する（PL. 82—5）。接合線は円弧状。瓦当裏面は平坦で下方に向ってやや傾斜するものと、若干凹むものとがある。瓦当側面に深さ約0.9cmの範端痕が残る。

Dは16弁で弁端が丸く、珠文が24と比較的密である。中房は凹み、蓮子1+6。外縁は厚目で内面が直線的に傾斜する。外区の内・外縁を分つ圓線がない点はL～N・Pと共通する。Daと、中房を彫り直して高く突出させたDbが出土。Daは丸瓦の先端部を絞り気味にして瓦当と接合する。接合線は円弧状。瓦当裏面はわずかに凹み、側面接合部はほぼ直角に仕上げる。Dbは瓦当裏面がかなり凹む。瓦当裏面は縦方向にヘラケズリし、瓦当裏面の下端と側面は横方向にヘラケズリする。

KはDに似て16弁で弁端が丸いが、弁が盛り上る。また、中房は凹むが、蓮子1+5、珠文は27で内外に圓線がある。外縁は比較的薄手で、上面を平坦にヘラケズリし、内面が内反りになる。珠文と珠文の間に小珠を置く部分がある。範傷のないものと、中房が磨耗し圓線が不明瞭になったものとがある。中房磨耗後に彫り直して圓線を太く高くしたKbがあるが、今回は出土していない。いずれも丸瓦を接合した痕跡がなく、瓦当面から丸瓦部にかけて一連の粘土合面が3層ほど残る。一本造りである。¹⁾ 瓦当・丸瓦部ともに厚い。瓦当裏面は平坦で、接合部内面から瓦当裏面及び側面は横方向にナデ、丸瓦部凹面は全体に縦方向にヘラケズリ、凸面は縦方向にナデして仕上げる。側面接合部は縦方向にヘラケズリしてほぼ直角に仕上げる。

6135 型式 6135は外区線に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす。また、楔状の間弁をもつのが特徴で

1) 成型台一本造りである。本報告 p. 270～276参照。

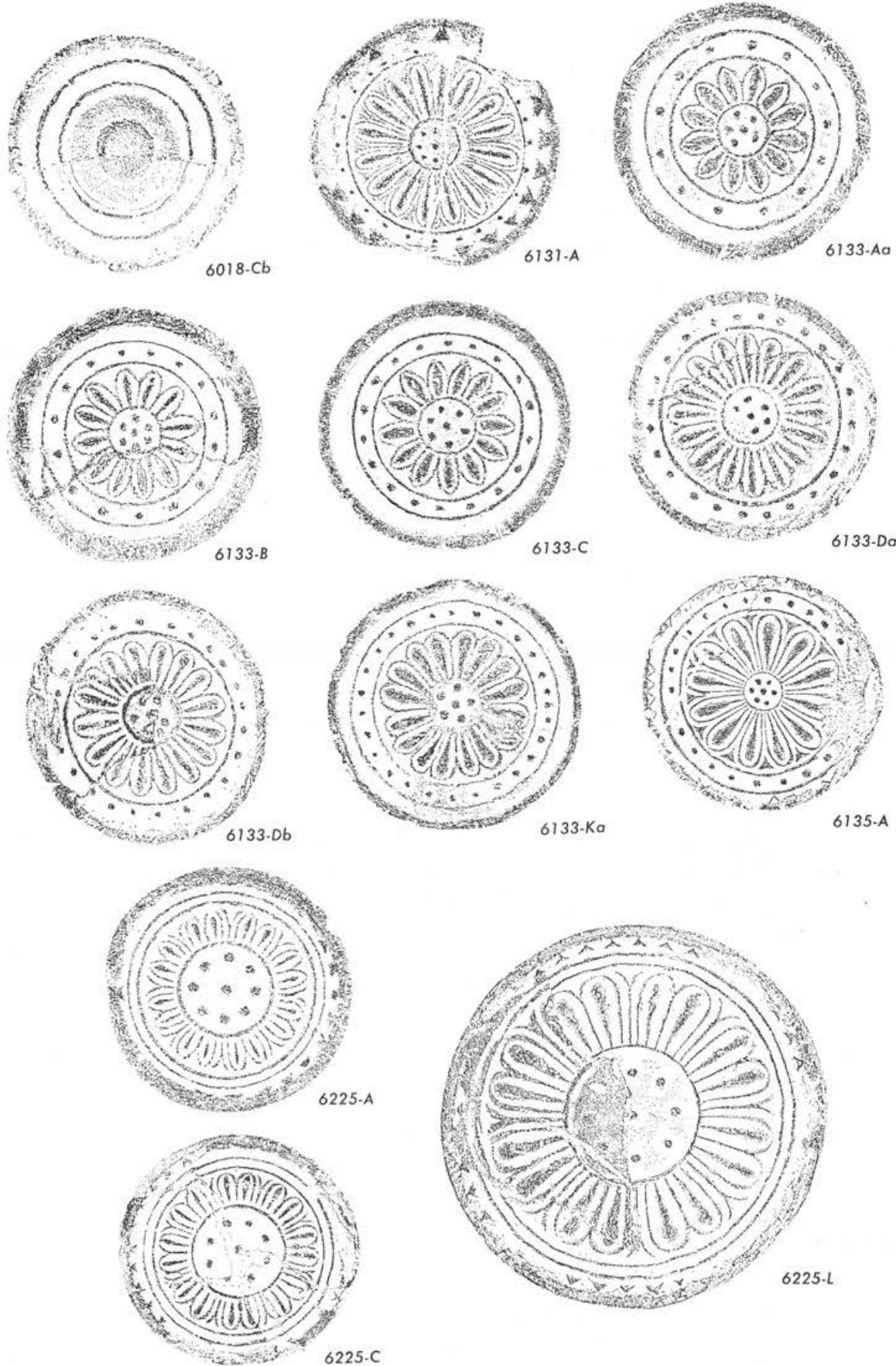


Fig. 31 軒丸瓦拓影 1

ある。鋸歯文は細かい。A～C・Eの4種がある。旧Dは複弁と判明したので6288Aに変更。外縁はA～Cが三角縁、Eが厚みのある傾斜縁である。Aが出土。Aは12弁で、弁端が丸い。中房は半球状に盛り上り、蓮子1+6。中房には蓮子をつなぐ範傷がある。瓦当は薄づくりで、接合溝に丸瓦を押し込んでいる。丸瓦部の端部には加工を施さない。接合位置は高く、内外とも接合粘土は少ない。接合線は円弧状。瓦当裏面は平坦である。接合部内面は横方向にナデ、瓦当裏面と側面は横方向にヘラケズリ、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。側面接合部は縦方向にヘラケズリしてほぼ直角に仕上げるものと、曲線をなすものとがある。瓦当側面には深さ0.3cmの範端痕が残る。

iii 複弁蓮華文軒丸瓦

6225型式 6225は外区外縁に凸鋸歯文、外区内縁に圓線文をめぐらす複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁の形状は単弁を2個接合したような形状をとる。間弁はそれが独立し（以下、間弁A系統と呼ぶ）、Y字形を呈する。中房の径は大きく、蓮子は1+8。外縁は上面を幅広にヘラケズリする傾斜縁で、内面は直線的に傾斜する。A～E・Lの6種がある。Eのみは内区が平板であるが、他は内区が盛り上る。A・C・Lの3種が出土した。

Aは弁端の尖る点がBに類似するが、Bより瓦当径が小さい。範の傷みを示すものはほとんどない。丸瓦の接合痕があるものではなく、瓦当面から丸瓦部にかけて一連の接合面が2～3層残る。一本造りである。瓦当裏面は平坦なものと凹むものとがある。その比率はほぼ3：1である。前者は瓦当裏面を横方向にナデ、後者は丸瓦部の凹面にかけて縦方向にヘラケズリする。側面接合部は瓦当裏面に対してほぼ直角。内面接合部には調整に用いる凸台のたありが半円形に残る。丸瓦部は部厚く、凸面を縦方向にナデ、凹面を玉縁近くまでナデないしヘラケズリ調整する。

Cは弁端が丸く、蓮子がA・Bに比して小さい。瓦当裏面に深い接合溝をつくって丸瓦を押し込む接合式と、接合痕のない一本造りとがある。瓦当裏面はともにやや凹み、接合式のものは横方向にナデ、一本造りのものは丸瓦部にかけて縦方向にヘラケズリする。後者は側面接合部が曲線に近い。

Lは超大型である。弁端は円い。瓦当部に丸瓦を接合しているが、調整手法などは不明。瓦当裏面は凹む。

6233型式 6233は外区外縁が素文で、外区内縁に珠文をめぐらす複弁8弁の藤原宮式軒丸瓦である。間弁A系統。中房の径は大きく、蓮子1+4+8。A・Bの2種があり、Aが出土。Aは蓮子を間弁の延長線上に配置する。中房の周縁が立ち上がらないAa、中房の周縁に凸線をめぐらせるAb、中心の蓮子と一重目の蓮子を十文字の凸線でつなぐAcとがあり、Abが出土。接合式で、瓦当裏面は縦方向にヘラケズリする。

6273型式 6273は外区外縁に凸鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす複弁8弁の藤原宮式軒丸瓦である。蓮弁は比較的立体感があり、間弁はA系統。中房は大きく、蓮子を二重にめぐらす。A～Eの5種がある。A～Cはともに蓮子1+5+9、珠文40、凸鋸歯文46である。外縁は三角縁で、内面がわずかに外反りになる。Bが出土した。BはAに比べると弁の盛り上りに欠けるが、弁端で強く反り上る。中房はやや突出する。成形方法は接合式で丸瓦の接合位置は比較的高い。丸

瓦端部の凹面側を斜めにヘラケズリし、端部から凹面にかけて平行線のキザミをつける。瓦当裏面は縦方向にナデ、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

6275は外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす複弁8弁の藤原宮式軒丸瓦である。**6275型式**
弁は短く平板で、弁端がわずかに反り上る。間弁A系統。中房は突出し、蓮子は二重にめぐらす。珠文は密だが、鋸歯文はやや粗い。A～E・G～K・Mの11種がある。蓮子・珠文・鋸歯文の数はかなりばらつきがあり、外縁も三角縁と傾斜縁とがある。今回はBが出土。Bは弁が線的な表現に近く、弁端の反りもほとんどない。蓮子1+4+8。外縁は上面を平坦にヘラケズリする傾斜縁で、内面は反りがなく直線的。成形方法は接合式である。

6278は6275と同様に外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす複弁8弁の藤原宮式軒丸瓦であるが、弁が長くしかも平板である点で異なる。間弁はA系統。中房が大きく、蓮子を二重にめぐらす。A～Gの7種がある。蓮子・珠文・鋸歯文は数にばらつきがあり、外縁も三角縁と傾斜縁とがある。Bが出土。Bは蓮弁の先端が大きく二股に分れ、弁端の反り上りがほとんどない。中房は突出し、蓮子1+5+10。鋸歯文は52と最も密である。外縁は三角縁で、内面が直線的である。外区内縁に範傷がある。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝がある。接合位置は瓦当部の上端近くで、接合粘土は内外とも少ない。接合線は円弧状。丸瓦端部の凹面側を斜めにヘラケズリし、端面の中央を入柄状に切り欠く。瓦当裏面は平坦で、全体を横方向にナデて仕上げる。

6281は外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす複弁8弁の藤原宮式軒丸瓦であるが、**6281型式**唯一間弁が蓮弁のまわりを界線状にめぐる(以下、間弁B系統)。弁は線的な表現に近い。中房は大きく、蓮子を二重にめぐらす。A～Cの3種があり、Bが出土。Bは中房が高く突出し、蓮子1+8+8。弁はAに比して長い。外縁は上面に丸味のある薄手の傾斜縁で、内面がわずかに内反りとなる。

6282は6281と同様に間弁がB系統で、外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす複弁8弁蓮華文軒丸瓦であるが、中房が小さく蓮子も1重である。瓦当径も小さい。蓮弁は総じて盛り上りがなく、凸線で表現する。A・B・D～I・Lの9種がある。Aを除くと、中心の蓮子が大きい。また、A・F以外は外区の内・外縁を分つ圓線が太く、D・E以外は子葉をかこむ弁と弁が分離する。外縁は上面が丸味のある傾斜縁で、内面がA・F・G・Iでは内反り、B・D・E・Hでは直線的になる。A・B・D～Iが出土。

Aは中房が大きく、しかも突出する。蓮子は1+8。外縁は薄手で、内面が内反りになる。瓦当裏面は平坦で、接合溝をつくって丸瓦を押し込んでいる。接合粘土は内外とも少ない。

Bは内区が平板で、中房が比較的大きくて、弁が短い。中房を画す圓線が明瞭なBaと、この圓線がなく、弁を一部彫り直したBbとがあり、両者が出土。Baの段階で、中房の一部にすでに範傷が生じており、この段階以降のものが大半を占める。外縁はAと異っていずれも厚い。成形方法は接合式で、瓦当をかなりの高さまでつくったのち、接合溝をつくらず直接丸瓦を押しつけ、内外に多量の接合粘土をあてる。丸瓦の先端に加工は施していない。外面接合粘土は瓦当裏面の高さで一度指オサエするものがある。内面接合粘土は円棒状のもので叩きしめたのち、瓦当寄りを横方向にヘラケズリする。接合線は台形を呈するものがほとんどであるが、Baには浅い円弧を呈するものもある。いずれも側面接合部は縦方向にヘラケズリし、瓦

当裏面に対して直角に仕上げる。丸瓦部凸面及び瓦当側面の下半部は縦方向にヘラケズリ調整する。

Dは瓦当径が最小で、内区全体が突出する。1個所だけ子葉をかこむ弁と弁とが分離する。中房は圈線の内側が溝状に凹み、内・外区を分つ圈線も太い。外縁は厚い。Da・Db・Dcがあり、Daが出土。範の傷みを示すものはない。瓦当側面に深さ0.4cmの範端痕が残る。成形方法はBと同様の接合式で、内外ともに多量の接合粘土を用いるが、接合線はヘラケズリによって台形を呈するものと、ヘラケズリを施さず浅い円弧を呈するものがある。側面接合部はともにヘラケズリするが、前者では瓦当裏面に対して直角に、後者では曲線に仕上げる。丸瓦部凸面と瓦当側面は縦方向にヘラケズリする。

Eは弁形や中房の特徴などがDに似るが、瓦当径が大きい。範傷はそれほど顕著でない。外縁は厚く、上面が平坦である。瓦当側面に深さ0.7cmの範端痕が残る。成形方法はBと同様の接合式であるが、接合部内面はヘラケズリを施さず、円棒状のもので叩きしめたままである。接合線は円弧状。側面接合部は曲線をなす。瓦当裏面は横方向に粗くナデ、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

Fは中房がわずかに突出し、弁が長い。FaとFbとがあり、両者が出土。Fbは彫り直しによって子葉をかこむ弁と弁とが半数近く接するようになり、子葉も細くなる。弁の基部や中房の圈線を高くするため中房が凹み、外縁の線鋸歯文も線が太くなる。また、外縁はFaでは薄いが、Fbでは範端を外に彫り広げるため厚くなる。ともに瓦当側面に深さ0.5cmほどの範端が残る。Faの段階で、すでに中房の一部に範傷が生じている。成形方法はいずれも接合式であるが、中房に範傷が生じた段階で作り方が変化する。すなわち、丸瓦の接合位置が高く、内外の接合粘土が比較的少ないものから、丸瓦の接合位置が低く、内外の接合粘土が多いものへと変わる。前者は瓦当裏面が平坦で、瓦当が3.5cm前後と薄く、接合部内面と瓦当裏面及び側面を横方向にナデて仕上げするのに対して、後者は瓦当裏面が下端に向って傾斜し、瓦当が4~4.5cmと厚手であり、接合部内面を円棒状のもので叩きしめたままで、瓦当裏面の下半部のみをナデ仕上げする。また、側面接合部は前者ではヘラケズリによって瓦当裏面に対して直角に仕上げるものが主であるが、後者ではすべてヘラケズリによって曲線に仕上げる。丸瓦の接合に際してはともに接合溝をつくらず、丸瓦端部の加工も施していない。丸瓦部凸面はいずれも縦方向にヘラケズリする。なお、Faには焼成以前に中房に直径1.3cmの円孔を穿ったものが1点ある。

GはBに似るが、内区が中心に向って高くなり弁が長い。中房圈線の内側は溝状に凹む。範傷を示すものはない。外縁は厚い。瓦当の成形にあたっては、まず厚さ2.5cmほどの粘土を範に詰め、瓦当裏面の下半部を一定の高さまでつくったのち、丸瓦を接合する。接合溝はなく、丸瓦端部の加工も施さない。接合粘土は内外ともに多量で、外面接合粘土は瓦当裏面の高さで一度指オサエし、接合部内面は円棒状のもので叩きしめたのち、横方向にヘラケズリする。接合線は浅い円弧を呈する。側面接合部はヘラケズリによって瓦当裏面に対して直角に仕上げ、瓦当裏面も横方向のヘラケズリで仕上げる。丸瓦凸面は縦方向にヘラケズリする。

HはGと同様に内区が中心に向って高くなるが、瓦当径が大きく、中房が平坦で、弁もやや長い。8弁のうち1弁は子葉や子葉をかこむ弁の輪郭線の一部を欠く。外縁は厚い。HaとHb

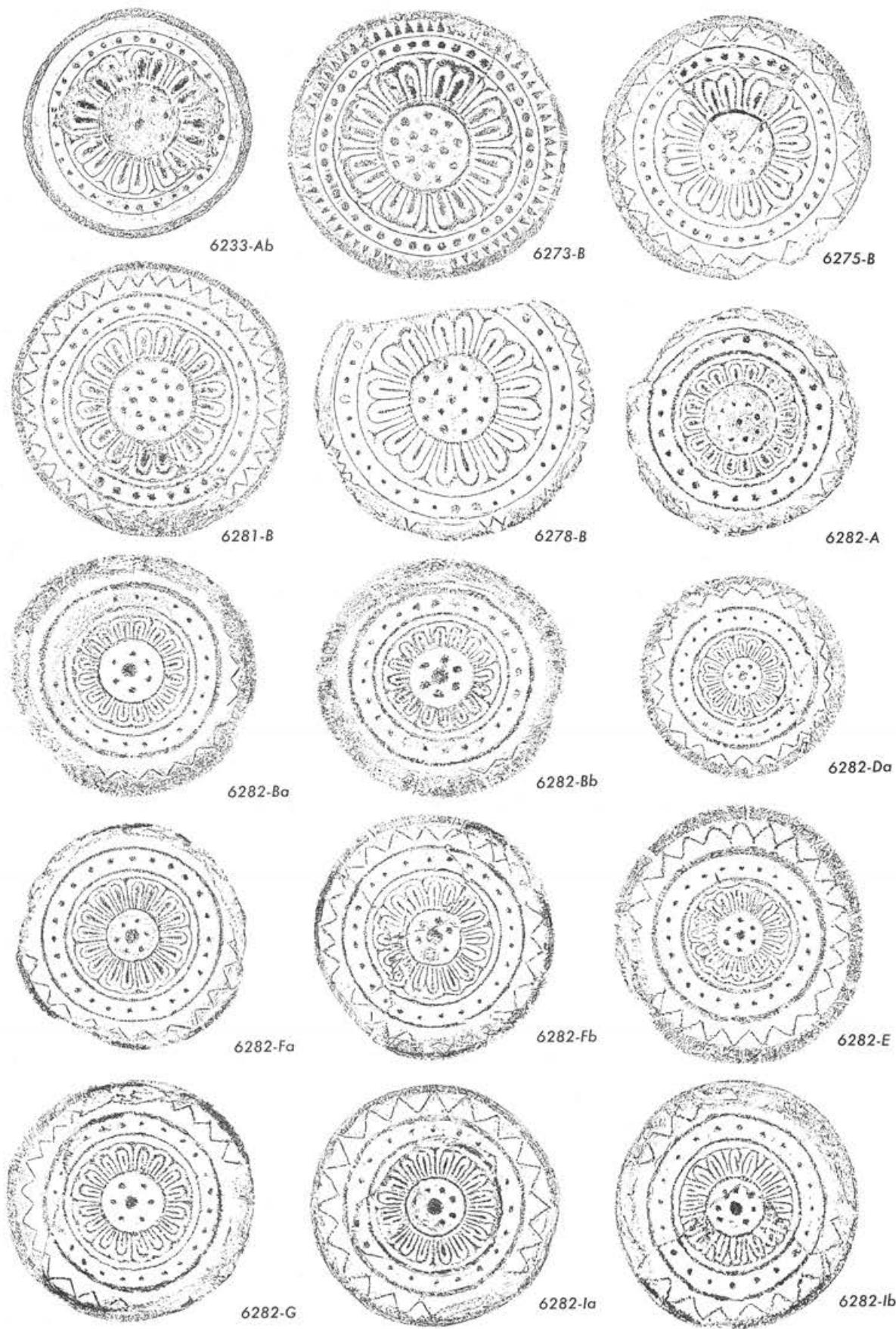


Fig. 32 軒丸瓦拓影 2

とがあり、Ha が出土。破片のため不明な点が多いが、瓦当裏面は平坦で、比較的高い位置に丸瓦を押しつけて接合している。接合溝はなく、内面接合粘土も多くはない。

I は 6282 のうちでは弁の盛り上りが最も強く、弁端が間弁に接する点で他と異なる。蓮子も 1+8。中房はわずかに突出する。外縁は比較的薄手である。Ia と Ib とがあり、両者が出土。Ib は蓮弁・間弁を全体的に彫り直し、中房周線も太く高くするため、中房が凹むようになる。Ia の段階で、外縁に範傷が生じている。成形方法は接合式であるが、Ia と Ib とは作り方が異なる。Ia は丸瓦の接合位置が高く、接合粘土の量が内外とも比較的少ない。接合部内面は縦方向にナデ。瓦当寄りを軽く円弧状にヘラケズリする。側面接合部は縦方向にヘラケズリし、瓦当裏面に対してほぼ直角に仕上げる。瓦当裏面は平坦で、瓦当裏面及び側面を横方向にナデ、丸瓦凸面は縦方向にヘラケズリする。瓦当は 3.2cm 前後と薄い。瓦当側面には深さ 0.6cm に範端痕と、^{かせ 1)}範と枷型の合わせ目を示す甲張り状の粘土凸帯が一部に残る。Ib は丸瓦の接合位置が低く、接合粘土が内外とも多い。内面接合部は円棒状のもので叩きしめたままで、側面接合部は縦方向にヘラケズリして曲線に仕上げる。瓦当裏面はやや下方に向って傾斜し、指オサエののち一部ナデ仕上げし、丸瓦凸面は縦方向にヘラケズリする。瓦当は 4.8cm 前後と厚い。Ia・Ib ともに接合溝はなく、丸瓦端部の加工も施していない。

6284 型式 6284 は 6282 と同様に間弁 B 系統で、外区外縁に線鋸歯文・外区内縁に珠文をめぐらす複弁 8 弁華文軒丸瓦であるが、弁が長く、中央の蓮子も大きくない。蓮子 1+6。外縁は上面をナデて丸くする薄手の傾斜縁で、内面が内反りとなる。A・C～G・L の 7 種があり、A・C の 2 種が出土。

A は D と同様に弁が比較的高く盛り上り、中房もわずかに突出するが、珠文・鋸歯文が密である。成形方法は接合式で厚さ 1cm 前後の粘土をまず範に詰め、次に瓦当裏面の下半部を中心で一定の高さまで粘土を補足したのち、接合溝をつくって丸瓦を押し込む。丸瓦の接合位置は比較的高く、接合粘土は内外とも少ない。接合線は深い円弧。瓦当裏面は平坦なものが多いが、若干凹むものもある。

C は E に似て弁の盛り上りが弱いが、中房は弁の基部とほぼ同じ高さである。珠文は 24 で A・E と同じだが、鋸歯文は 16 と A・E より粗い。外区内縁の一部に範傷が生じている。成形方法は接合式で A と大差ないが、瓦当裏面は平坦で、横方向に丁寧にナデて仕上げる。接合線は深い円弧。瓦当側面も横方向にナデ、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

6285 型式 6285 は 6284 に似る間弁 B 系統の複弁 8 弁華文軒丸瓦であるが、弁の盛り上りが強い。また、6284 に比して弁が長く、中房が小さい。中房は凸レンズ状にわずかに突出する。蓮子 1+6。外縁は上面が丸味をもった薄手の傾斜で、内面が内反りとなる。A・B の 2 種があり、B が出土。B は A に比して弁の盛り上りがやや弱い。珠文は比較的小粒で、A と同じく 23 である。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝をつくって丸瓦を押し込む。接合位置は高く、接合粘土は内外とも少ない。瓦当裏面はわずかに凹む。瓦当裏面を縦方向にヘラケズリしたのち接合部内面を横方向にナデ、瓦当裏面の下端を横方向にヘラケズリする。側面接合部は縦方向

1) 枷型は瓦当の側面にあてた 2 ないし 3 枚からなる木枠であり、藤原宮や平城宮のかなりの軒丸瓦にその痕跡が認められる。枷型については、毛利光俊彦「軒丸瓦の製作技法に関する一考察——瓦当範と枷型」(『畿内と東国の瓦』京都国立博物館特別展覧会図録、1990) を参照されたい。

にヘラケズリして曲線に仕上げる。瓦当側面の下半部と丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

6291は外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす間弁がB系統の複弁8弁蓮華文軒丸 瓦であるが、蓮弁の形状が立体的で間弁A系統の6308に似る。A～Cの3種があり、A・Bは間弁の先端に楔状の飾りがつくが、Cはこれがない。Aが出土。Aは内区全体が盛り上り、中房が弁の基部よりわずかに突出する。蓮子1+6。外縁の上面が幅広く、1条の細凸線をめぐらす点は6308A・Bに似るが、内面が外反りになる点は6314A・Eに近い。AaとAbとがあり、Aaが出土。Aaは間弁の先端が内外とも蓮弁の形状にそって凹むが、Abはこれを彫り直して間弁の先端の外側が直線的になる。また、対称位置にある2箇所の間弁は楔状の飾りと一体になる。範傷を示すものはない。いずれも丸瓦を接合した痕跡がなく、瓦当面からの丸瓦部にかけて一連の粘土接合面が残る。一本造りであろう。瓦当部、丸瓦部はともに厚い。瓦当裏面は平坦なものと丸瓦部に向ってやや凹むものとがある。

6296は外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす間弁のない複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は菊花形を呈し、子葉が幅広で長く、弁と弁とが接する。A・Bの2種があり、両者が出土。外縁は上面をナデる傾斜縁。

Aは弁端が尖り気味で、弁端が内外区を分つ圈線につく。中房は凹み、蓮子1+8。珠文16で、内外に圈線がある。外縁は比較的高く、内面がわずかに内反りとなる。外区内縁や内区にいくつかの範傷がある。成形方法は接合式で、瓦当裏面を一定の高さまでつくったのち、丸瓦を比較的高い位置に押し付け、内外に接合粘土を補足する。接合溝はないようで、丸瓦端部には加工を施さない。接合線は円弧状。瓦当裏面は凹む。調整は丸瓦部凹面の瓦当寄りから瓦当裏面までと丸瓦部凸面を縦方向にヘラケズリし、瓦当裏面の下端と側面を横方向にヘラケズリする。側面接合部も縦方向にヘラケズリし、瓦当裏面に対してほぼ直角につくる。瓦当側面には深さ約1.0cmの範端痕が残る。なお、丸瓦は玉縁部の側縁を斜めに深くヘラケズリし、凸面側に面取りを施す。

Bは弁端が丸く、弁端が内外区を分つ圈線につかない。中房はわずかに突出し、蓮子は1+8。珠文16で、内・外縁を分つ圈線がなく。外縁は低く、内面は直線的に急角度に傾斜する。外区と弁端の一部に範傷がある。成形方法は不明だが、瓦当は厚手で、瓦当裏面がわずかに凹む。丸瓦部凹面の瓦当寄りから瓦当裏面までを縦方向にヘラケズリし、瓦当裏面の下端を横方向にヘラケズリする。側面接合部は縦方向にヘラケズリして、瓦当裏面に対してほぼ直角に仕上げる。丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

6301はいわゆる興福寺式の軒丸瓦である。外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす間弁A系統の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房が大きく、蓮子を2重にめぐらす点は藤原宮式の6274・6275・6276・6278に似るが、瓦当径は小さく、珠文や鋸歯文は粗い。いずれも弁は盛り上りが強く、弁端で反り上る。中房は突出する。外縁は内面が内反りとなる傾斜縁で、上面に1条の凹線をめぐらす。A～F・Iの7種がある。平城宮ではこれまでにB・Cが出土しており、今回もBが出土。

Bは瓦当径がAとCの中間で、弁端の反りがやや弱く、蓮子が1+5+9。範傷を示すものはない。成形方法は接合式で、丸瓦を高い位置におき、内外に少量の接合粘土をあてる。接合線は深い円弧。瓦当裏面の下半部には接合以前に押圧した布目痕が残る。丸瓦部凹面の瓦当寄り

を縦方向にナデたのち、接合部内面から瓦当裏面の上半部を横方向にナデ、以下は不調整とする。側面接合部はナデによって曲線に仕上げる。瓦当側面は横方向にヘラケズリするが、一部に深さ 0.8cm の範端痕が残る。丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

6303 型式 6303 は 6284・6304 に似る間弁B系統の複弁 8 弁蓮華文軒丸瓦であるが、標式である 6303A は内区全体がきわめて強く盛り上り、中房が高く突出する点に特徴がある。ただし、別の 1 種である B は弁の盛り上りが A ほど強くなく、中房もわずかに突出する点で 6303A よりもむしろ 6284D や 6304D に近い。6284D と比較すると 6303B は中房が低く、6304D と比較すると 6303B は蓮子・珠文が小粒である。外縁は上面に丸味がある薄手の傾斜縁で、内面が内反りとなる。今回は B が出土した。破片であるが弁端に範傷がある。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝をつくって丸瓦を押し込む。瓦当裏面はわずかに凹む。調整は瓦当裏面を縦方向にヘラケズリし、下端を横方向にヘラケズリする。

6304 型式 6304 は 6284・6303 に似る間弁B系統の複弁 8 弁蓮華文軒丸瓦であるが、中房が高く突出し、弁が長く尖り気味である。蓮子 1+6。外縁は上面が丸味のある薄手の傾斜縁で、内面が内反りとなる。A～E・G・L・N の 8 種があり、A～C の 3 種が出土。

A は弁が特に長いが、珠文は 17、鋸歯文は 16 と粗い。外区の内・外縁に範傷が生じている。成形方法は接合式。瓦当裏面は平坦で、瓦当裏面と側面を横方向に丁寧にナデて仕上げる。

B は A に酷似するが、弁がやや短く、珠文は 20 とやや密である。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝をつくって丸瓦を押し込む。接合位置は高く、接合粘土は外面が少なく、内面がやや多い。内面接合粘土は瓦当裏面よりやや高い位置で一度指オサエしている。接合線は深い円弧。瓦当裏面は丸瓦部に向ってやや傾斜する。

C は弁が最も短くしかも強く盛り上り、弁端が丸味をもつ。珠文 19。間弁端に範傷がある。成形方法は接合式で、接合溝をつくって丸瓦を押し込む。瓦当裏面はほぼ平坦で、縦方向にヘラケズリし、瓦当側面の下半部は横方向にナデて仕上げる。

6307 型式 6307 は外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす間弁のない複弁蓮華文軒丸瓦である。複弁どうしが独立し、弁の中央に凸線があるものを標式とする。弁数は 7～9 弁、蓮子数 1+4、1+6、1+8 とばらつきがあり、外縁の形状も一定でない。A～I・L の 10 種があり、このうち G・L は外区外縁が素文である。A が出土。A は複弁 8 弁であり、原則的には蓮弁と蓮弁とが接しないが、割付が乱れて单弁と 3 弁とになった部分がある。蓮弁は盛り上りが強く、中房は突出する。蓮子 1+6。外縁は上面に丸味がある傾斜縁で、内面が内反りとなる。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝をつくって丸瓦を押し込む。接合位置は高く、接合粘土は外面が少なく、内面がやや多い。接合線は円弧状。瓦当裏面は丸瓦部に向って傾斜する。

6308 型式 6308 は外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす間弁 A 系統の複弁 8 弁蓮華文軒丸瓦である。6279 の系譜をひき蓮弁が立体的に表現されるが、中房が小さく蓮子を一重にめぐらす。また、外区の珠文・線鋸歯文も粗い。中房はわずかに突出する。内区は内外区を分つ圈線からわずかに内側に入ったところで一段高くつくるのが特徴である。外縁は上面の広い傾斜縁で、大部分は内面が内反りとなるが、C のみは内面が直線的になる。A～D・H～L・N の 10 種がある。A・B・I は蓮弁の先端に楔状の飾りがつき、C は蓮弁と間弁の先端に楔状の飾りがつくが、D・L・N は楔状の飾りがない。A・B・D・L・N の 5 種が出土した。

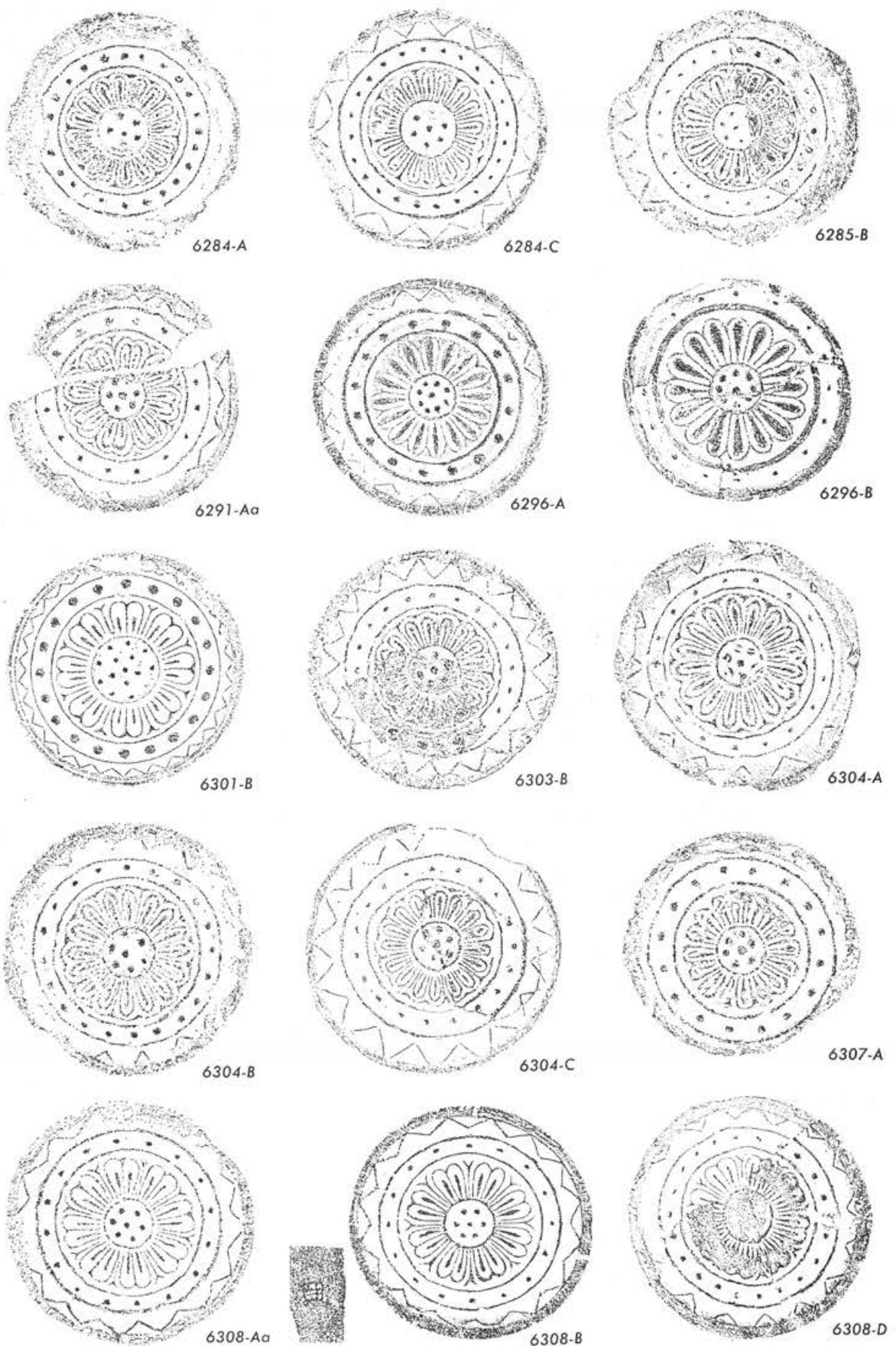


Fig. 33 軒丸瓦拓影 3

Aは蓮弁の輪郭がシャープに立ち上り、弁端のみがわずかに垂れ下る。外縁の上面がやや丸味をもち、1条の凸線をめぐらす点はBと共通する。範傷のないもの、中房の圈線近くで範を横断する傷があるもの、この部分が割れたことを示すものなどがある。範割れを示すものには中房圈線を太く彫り直したAbがあるが、今回の出土例がAbにあたるか否かは不明。いずれも丸瓦と接合した痕跡がなく、瓦当面から丸瓦部にかけて一連の粘土接合面が3～4層残る(PL. 82-2)。一本造りである。瓦当は4.5～5.5cmと厚く、瓦当裏面は大部分が平坦で、一部に丸瓦部に向って傾斜するものがある。側面接合部は瓦当裏面に対してほぼ直角に仕上げるものが多い。丸瓦部凹面は縦方向にヘラケズリし、丸瓦部凹面の瓦当近くと瓦当裏面及び側面は横方向にナデ、丸瓦部凸面は縦方向にナデて仕上げる。外縁の上面をヘラケズリするものが少量ある。また、焼成前に玉縁部の隅を半月状に切り落した例がある(PL. 82-3)。

BはAに酷似するが、弁の輪郭が凸線に表わされ、弁端も反り上る。範傷を示すものはない。製作技法には2種類がある。1種は丸瓦の接合痕がなく(PL. 82-1)、瓦当面から丸瓦部にかけて一連の粘土接合面が残る一本造り例である。瓦当は5cm前後と厚く、瓦当裏面は平坦である。瓦当側面の左下に刻印「北」a種を押捺するものがある。他の1種は接合式で、接合溝に丸瓦を押し込む。数は少ない。瓦当は約4cmと薄い。丸瓦の接合位置は比較的高く、丸瓦端部は凹面側を軽くヘラケズリする。丸瓦部凹面の瓦当近くは横方向にナデ、瓦当裏面の下半部は横方向にヘラケズリする。

DはAに似るが、中房が大きく、しかも高く突出し、珠文も密である。外縁は上面をヘラケズリする。丸瓦を接合した痕跡がなく、瓦当面から丸瓦部にかけて一連の粘土接合面が残る。一本造りである。瓦当裏面は平坦である。

Lは超大型品である。破片のため詳細は不明だが、成形方法は接合式である。外縁は上面をヘラケズリする。

Nは瓦当径がHに次いで小型であり、弁が細長く、珠文・線鋸歯文を最も密にめぐらす。外区内縁に範傷がある。外縁は上面をヘラケズリする。丸瓦を接合した痕跡がなく、瓦当面から丸瓦部にかけて一連の粘土接合面が3～4層残る。また、丸瓦部凹面の瓦当裏面近くには、補強粘土の下に、ほぼ直角に折れ曲る一連の布目圧痕の残るものがある。一本造りで製作したのち、内面に粘土を補足し、その後瓦当裏面を削り下げたものと考えられる。瓦当は4.5～5.1cmと厚い。瓦当裏面は平坦なものが多いが、若干凹むものもある。丸瓦部凹面は全体を縦方向にナデたのち、瓦当近くと瓦当裏面を横方向にナデて仕上げる。瓦当側面の下半部は横方向にヘラケズリし、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

6311型式 6311は6308に似る間弁A系統の複弁8弁蓮華文軒丸瓦であるが、中房が凹む点で異なる。外縁は上面が丸味をもった傾斜縁で、内面が内反りになる。A～Hの8種があり、A・B・Fが出土。

Aは蓮弁の盛り上りが強く、弁端が高く反り上る。珠文・鋸歯文は密である。範傷のないものと、範傷によって蓮弁と間弁の区別が一部不明瞭になったものとが半々を占める。Aaと範を彫り直したAbとが出土。Abは蓮弁の輪郭線と子葉を太い凸線で表現する。また、間弁が中房に達せず、楔状を呈する。製作技法は範傷の進行によっても変化がない。成形方法は接合式で、まず厚さ1～1.5cmの粘土を周辺がやや高くなるように範詰めし、次いで瓦当裏面の主

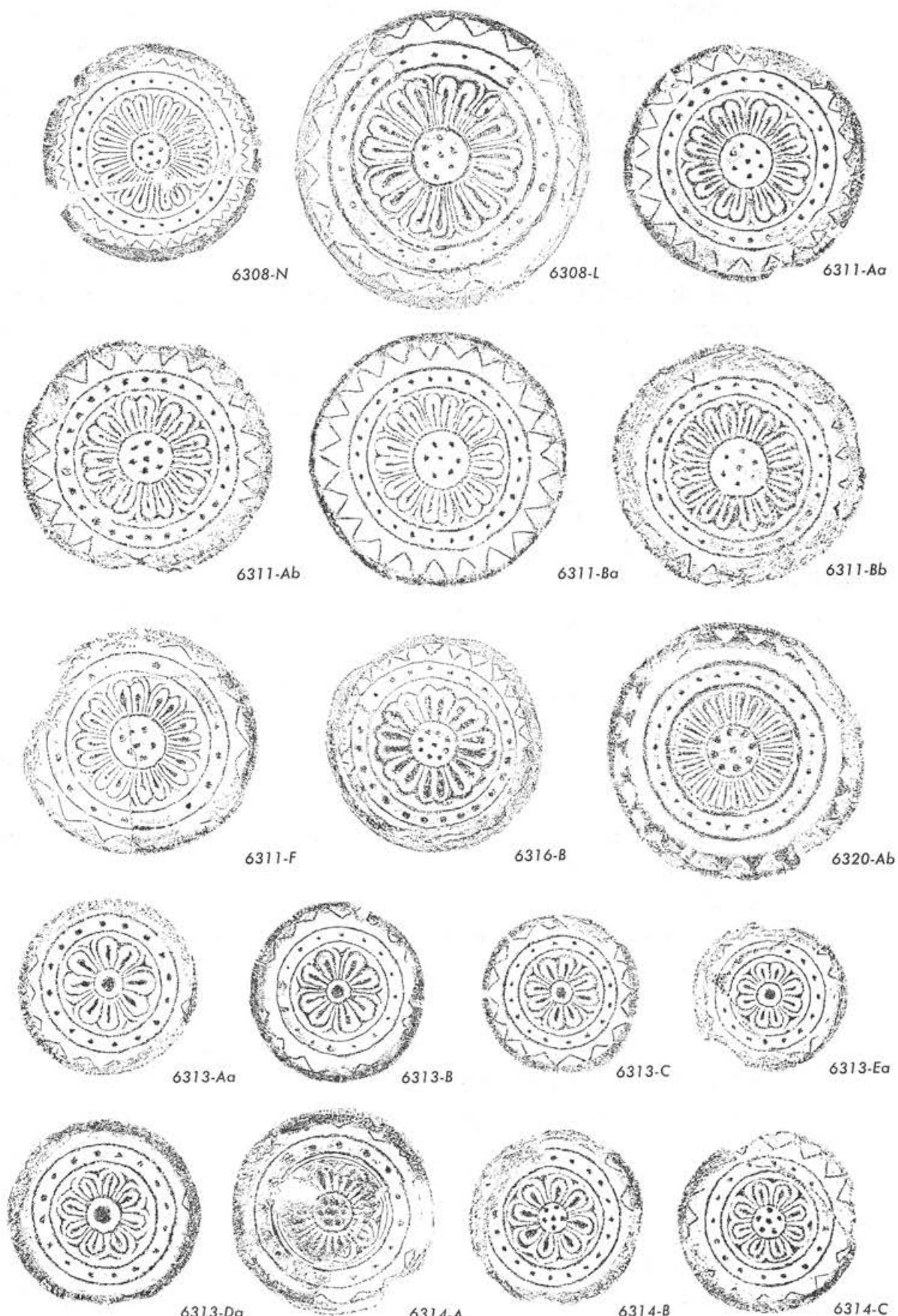


Fig. 34 軒丸瓦拓影 4

として下半部に一定の高さまで粘土を積む。接合は瓦当裏面に接合溝を作り丸瓦を押し付け、内外に接合粘土を補足する（PL. 82-4）。丸瓦部の端部には接合のための加工はない。外面接合粘土はやや多く、瓦当裏面の高さあるいはそれよりやや高い位置で一度指オサエする。内面接合粘土はごく少量で、接合線は円弧をなす。瓦当裏面は平坦なものが主で、丸瓦部に向って若干傾斜するものがある。側面接合部はいずれも瓦当裏面に対してほぼ直角に仕上げる。丸瓦部凹面の瓦当寄りは縦方向にナデたのちヨコナデ、瓦当裏面と瓦当側面の下半部はヨコナデ、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

BはAに酷似するが、弁端が反り上らずに垂れ下る。範傷のないものと、範傷によって蓮弁と間弁の区別が一部不明瞭になったものがある。Baと範を彫り直したBbとが出土。Bbは蓮弁の輪郭線と子葉を太い凸線で表わす。また、間弁の一部が中房に達せず楔状になる。成形方法は接合式で、Aと同様に厚さ1~1.5cmの粘土を周辺がやや高くなるように範詰めする（PL. 82-7）。調整手法もAと大差はない。側面接合部はナデたままで、瓦当裏面に対して曲線をなすものが一部にある。瓦当側面に深さ約1.2cmの範端痕の残るものがある。

Fは蓮弁の盛り上りが弱く、蓮子・鋸歯文が粗い。丸瓦を接合した痕跡がなく、瓦当面から丸瓦部にかけて一連の粘土台面が残る。一本造りである。調整は不明。瓦当裏面は丸瓦部に向って若干傾斜する。

6313型式 6313は外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす複弁4弁蓮華文軒丸瓦であり、中房に大粒の蓮子を1個置くのが特徴。瓦当径は10~12cmと小型である。外縁は上面が丸味をもった傾斜縁。A~Gの7種がある。A~C・E・Gは間弁がA系統、D・Fは間弁がB系統である。なお、Gのみは外区外縁が素文である。A~Eの5種が出土した。

Aは間弁A系統のうちで瓦当径が最大であり、内区全体が盛り上り、中房がわずかに凹むAaと、量は少ないが、中房と弁の基部を彫り直して高くしたAbとがあり、両者が出土。Aaの段階で、外区内縁に一部範傷がある。成形方法は接合式で、6311と同様にまず厚さ2cmほどの粘土を周囲が高くなるように範詰し（PL. 82-6），次いで瓦当裏面をある程度の高さまでつくったのに、丸瓦を接合したものと推測できる。接合にあたっては、瓦当裏面に接合溝をつくり、これに丸瓦を押し込んだのち、内区に接合粘土をあてる。外面接合粘土は瓦当裏面の高さで一度指オサエする。瓦当面と丸瓦の角度が鈍角であるため、外面接合粘土は比較的多い。内面接合粘土は少なく、接合線は深い円弧を呈する。丸瓦の端面には接合のための加工は施していない。瓦当裏面は大部分が平坦であるが、丸瓦部に向って若干傾斜するものが少量ある。側面接合部は瓦当裏面に対してほぼ直角である。調整は、瓦当裏面と丸瓦部凹面の瓦当寄りをナデて仕上げ、丸瓦部凸面を縦方向にヘラケズリする。

Bは瓦当径がAに近いが、内区がAに比して平板である。範の傷みは少なく、外区内縁の一部に範傷を示すものが若干ある。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝があり、丸瓦も瓦当に対して鈍角をなすものが多い。また、外面接合粘土は瓦当裏面の高さで1度指オサエしたものがある。接合線は深い円弧。瓦当は5cm前後の厚いものが主である。瓦当裏面は平坦なものと若干凹むものとが半々を占める。側面接合部は大部分が瓦当裏面に対してほぼ直角になるが、後者には曲線になるものがある。調整手法はAと大差ない。なお、瓦当側面に深さ約0.9cmの範端痕の残るものがある。

Cは瓦当径がEに次いで小さく、内区がBに似てやや平板である。外区内縁の一部に範傷のあるものが少量ある。成形方法は接合式で、調整方法もA・Bと大差ない。瓦当裏面は平坦なものが主であるが、丸瓦部に向って傾斜するものが少量ある。側面接合部は瓦当裏面に対してほぼ直角である。

DはFとともに間弁がB系統に属するが、Fに比して内区が盛り上り、瓦当径も幾分小さい。範傷のないものと、中央で範の割れたことを示すものとがある。成形方法は接合式で、接合線は円弧をなす。瓦当裏面はほぼ平坦で、側面接合部は瓦当裏面に対してほぼ直角になる。瓦当裏面と丸瓦部凹面の全体をナデて仕上げ、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。なお、丸瓦部がとくに厚いものがある。

Eは瓦当径が最小でCに似るが、Cより中房が大きく、弁が短い。中房が弁の基部より低いCaと、中房を彫り直して高くしたCbとがあり、両者が出土。成形方法はともに接合式で、瓦当裏面に接合溝がある。丸瓦は瓦当に対して鈍角にとりつけるため、外面接合粘土が比較的多い。また、外面接合粘土は瓦当裏面の高さで一度指オサエしている。接合線は円弧。側面接合部は瓦当裏面に対してほぼ直角。瓦当裏面は平坦なものとやや凹むものとがある。

6314は6313に似る小型の複弁4弁蓮華文軒丸瓦であるが、蓮子を中心に1個、周囲に5~6個めぐらす点で異なる。外縁は傾斜縁である。A~Eの5種があり、Eのみは間弁がA系統、他はB系統である。A~Cの3種が出土。

Aは瓦当径が最大で、蓮弁の盛り上りが強く、弁端が尖る。蓮子1+6。内外区を分ける圈線と弁の間に細い凸線をめぐらす点や外縁が厚手で内面が外反りとなり、上面に細凸線をめぐらす点はA・Eに共通する。瓦当裏面は丸瓦部に向って強く傾斜する。

Bは内区の盛り上りが弱く、蓮弁が幅広で弁端が丸味をもつ。蓮子1+5。中房に範傷があり、外縁は次のCと同様に上面が丸味をもった傾斜縁で、内面がAとは逆に内反りとなる。成形方法は接合式で、瓦当裏面に接合溝がある。接合粘土は内外とも比較的少なく、外面接合粘土は瓦当裏面の高さで一度指オサエしている。接合線は深い円弧。瓦当裏面は平坦で、側面接合部は瓦当裏面に対してほぼ直角に仕上げる。

CはBと酷似するが、中房が大きく、蓮弁が短い。また、珠文が16と粗い。蓮子1+5。内外区を分ける圈線と弁端との間が広い範囲にわたって範傷のためにつぶれている。成形方法は接合式で、接合線は深い円弧を呈する。瓦当裏面は平坦にナデて仕上げる。

6316は6307に似る間弁のない複弁蓮華文軒丸瓦であるが、蓮弁の中央に凸線がなく、子葉2本を輪郭線で囲む形をとる。6307と同様に、弁数・蓮子数にはばらつきがあり、蓮弁や外縁の形状も一定でない。A~K・M・Nの13種があり、Bが出土。Bは複弁8弁で、蓮弁と蓮弁が接する。中房は凹み、蓮子1+8。外縁は上面を平坦にヘラケズリする直立縁で、外区内縁に珠文、外区外縁に線鋸歯文を最も密にめぐらす。弁端の一部に範傷がある。成形方法は接合式であるが、接合溝はないようである。接合位置は中房近くと低く、接合粘土も内外ともに多い。瓦当裏面は平坦で、横方向にナデて仕上げる。

6320は外区外縁に凸鋸歯文、外区内縁に珠文をめぐらす間弁のない複弁12弁蓮華文軒丸瓦で、6320型式弁が細かいのが特徴である。中房は突出し、蓮子1+8。珠文は小珠で、内・外縁を分つ圈線が太い。外縁は比較的厚手で、内面が直線的に傾斜する。Aaと外区外縁の線鋸歯文を彫り直し

て凸鋸歯文にした Ab とがあり、Ab が出土。中房には蓮子をつなぐ範傷がある。成形方法は接合式で、瓦当裏面を一定の高さまでつくったのち丸瓦を押し付け、内外から一度指オサエしたのち接合粘土をあてている。接合溝のあるものとないものとがある。瓦当裏面は横方向にヘラケズリしてほぼ平坦に仕上げる。瓦当側面の下半部は横方向にナデ、丸瓦部凹面は縦方向にナデ、凸面は縦方向にヘラケズリする。側面接合部は縦方向にヘラケズリし、瓦当裏面に対してほぼ直角に仕上げる。

釘孔のある 軒丸瓦

なお、瓦当部は欠損するが、焼成後に径 7mm 前後の釘孔を凹凸両面から穿った丸瓦部の瓦当寄りの破片が 3 点出土している。

B 軒 平 瓦 (PL. 79~82, Fig. 35~37)

軒平瓦は 1130 点あり、24 型式 41 種に及ぶ。これらは瓦当文様によって、偏行唐草文軒平瓦と均整唐草文軒平瓦に大別できる。内訳は偏行唐草平瓦が 2 型式 2 種、均整唐草文軒平瓦が 22 型式 39 種である。なお、この中には隅軒平瓦が 7 点ある。

i 偏行唐草文軒平瓦

6641 型式 6641 は藤原宮式軒平瓦である。内区に左から右に偏行する唐草文を配し、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文をめぐらす。A・C・E～N の 12 種があり、C が出土。C は茎の起点が反転せず、遊離した 2 支葉を置く。また、茎の末端は反転するが、支葉は付さない。段顎。

6643 型式 6643 は藤原宮式軒平瓦である。内区に右から左に偏行する唐草文を配し、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A～E の 5 種があり、A が出土。A は唐草が小振りで、支葉基部がすべて茎から離れる。また、上・下外区と脇区の境は凸線で画す。Aa と Ab とがある。Ab は支葉の基部が茎に接する。今回出土したものは小片のため Aa か Ab か明らかでない。段顎。

6647 型式 6647 も藤原宮式軒平瓦である。内区に右から左に偏行する変形忍冬唐草文を配し、上外区に珠文、下外区に線鋸歯をおく。A～G の 7 種があり、C が出土。C は F とともに 6647 の中では渦巻形萼・蕾・花弁すべてが原形をよく残し、忍冬文の祖形に近い。F とは細部でわずかに異なる。段顎で、顎幅は約 6.5cm と深い。顎は平瓦部凸面に 7～8 条の太いキザミをつけたのち粘土板を貼り付けて成形する。

ii 均整唐草文軒平瓦

6663 型式 6663 は花頭形の中心飾りをもつ 3 回反転の均整唐草文軒平瓦で、内区と外・脇区の境に二重の圈線をめぐらすのが特徴である。花頭基部は複線であらわし、基部の端が上外区界線に接する。A～F・H～N の 13 種があり、A～C の 3 種が出土。

A は唐草の各单位が長く、基部が上・下外区界線から流れるように派生する。唐草第 3 単位主葉と第 1 支葉の先端は脇区界線に接する。範傷のあるものとないものとがある。外縁は上面を幅広くヘラケズリし、2 段まで残る。顎はいずれもややカーブする直線顎。平瓦部凸面には繩叩き目が残る。宮内からは横位繩叩き目も少量出土しているが、今回出土したものはいずれも縦位。3cm あたり約 8 本のもの 5 点と、3cm あたり 11～12 本のもの 3 点とがある。前者には唐草左第 2 単位から左脇区にかけて範傷のあるものが、後者には認められない。成形方法は

不明。調整は両者とも平瓦部凸面の瓦当から約6cmほどの範囲を横方向にナデ、平瓦部凹面を全面的に横方向にヘラケズリする。このほか凹凸面ともに調整して叩き目、布目が残らないものが少量ある。なお、宮・京内では側面に「北」「井」の刻印を押捺するものが出土しているが、今回の出土例は破片が多く確認できない。

BはAに酷似するが、唐草がやや横長で第2・3単位間近くに各1個の珠文をおく。外縁は上面を幅広くヘラケズリし、2段まで残る。顎はややカーブする直線顎1点と、平瓦部凸面に3cmあたり8~9本の縦位の繩叩き目、後者は比較的粗い横位の繩叩き目がわずかに残る。調整はともに平瓦部凸面の瓦当から7cm前後の範囲を横方向にナデ、凹面の瓦当近くを横方向にヘラケズリする。

Cは唐草の基部が上、下位区界線に接しない。唐草第3単位主葉の先端は脇区界線に接するが、左第3単位第1支葉の先端は巻き込み、右第3単位第1支葉は欠く。また、左第2単位第1支葉は通常とは逆に巻き込む。範傷はないものもあるが、あるものが多い。外縁は上面を幅広くヘラケズリし、2段まで残る。顎はいずれも曲線顎。平瓦部の凹凸面とも広範囲に調整するものと平瓦部凸面に縦位の繩叩き目が残るものがある。繩叩き目は3cmあたり約8本のもの10点と、3cmあたり約11本のもの4点とがある。両者とも外区に2~3個所の範傷がある。顎部の成形方法は不明。調整はともに平瓦部凸面の瓦当面から8~10cm範囲を横方向にナデ、凹面の瓦当寄りを幅広く横方向にヘラケズリする。¹⁾凹面には布目(3cmあたり約27本×24本)が広範囲に残るが、模骨痕はない。なお、凹面の側縁にそって布端と考えられる溝状の凹みが残るものがある(PL. 82-9)。

6664は6663に似て花頭形の中に中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒丸瓦であるが、上 6664型式・下外区と脇区に珠文をめぐらす。唐草は基部が内・外区を画す界線から流れるように派生し、唐草第3単位主葉の先端が脇区界線に接する。顎は段顎。A~D・F~Pの15種がある。D・F・I・N・Oは中心飾りの花頭基部が上外区界線に接するが、他は接しない。B~D・F・Kの5種が出土。

Bは中心飾りの花頭基部が大きく開き、唐草第3単位主葉と第1支葉の先端がともに脇区界線に接する。唐草は線が細く彫りも浅い。また、上・下外区と脇区の境は凸線で画す。珠文は小粒である。外縁は2段。顎は7.4cmと深い。成形方法及び叩き目は不明。調整は平瓦部凸面の瓦当近くと顎部を横方向にナデ、丸瓦部凹面を横方向にヘラケズリ、平瓦部側面を縦方向にヘラケズリする。

Cは中心飾りの花頭基部が細くしかも上端で開き、唐草第3単位第1支葉の先端が巻き込む。唐草は各単位が横長で、線が細く彫りも浅い。上・下外区と脇区との境は凸線で画す。珠文は比較的大粒である。外縁は2段。顎は7.0~7.3cmと深い。平瓦部凸面には繩叩き目が残る。いずれも繩叩き目は横位で、3cmあたり7~8本の比較的粗いもの2点と3cmあたり約11本と細かいものの1点とがある。顎部は断面三角形の粘土を貼り付けて形成するものがある。調整はともに平瓦部凸面の瓦当近くと顎部を横方向にナデ、平瓦部凹面をほぼ全面的に横方向にヘラケズリする。側面は縦方向にナデで仕上げる。

Dは中心飾りの花頭基部が平行線のまま上端で開かず上外区界線に接する。唐草は線が太く、

1) 布目は(端縁に平行する糸の数)×(側縁に平行する糸の数)。

彫りも深い。また、第3単位第1支葉の先端が巻き込み、下外区と脇区との境には杏仁形の珠文をおく。大部分のものに範傷がある。外縁は上面をヘラケズリする2段のものと、不調整で3段まで残るものとがある。第3段は幅が一定でなくしかも凹凸がある。第2段目との境が範端であろう。平瓦部凸面はいずれも繩叩き目が残る。横位と縦位の2種がある。横位の繩叩き目は3cmあたり10本と比較的細かい。2点。縦位の繩叩き目は3cmあたり12本。10点。前者は粘土板を貼り付けて、頸部を形成するようである。後者の頸の成形方法は不明だが、頸の後端をヘラで切り整える。また、瓦当面が厚さ0.7cmほどで剝離するものがある。いずれも唐草右第2単位主葉と第3単位第2支葉との間及び左脇区に範傷がある。頸の幅も6cm前後と大差はない。調整は両種ともに平瓦部の瓦当近くと頸部を横方向にヘラケズリのうち横方向にナデる。平瓦部凹面は全体的に横方向にヘラケズリするものが多いが、ケズリが一部で布目(3cmあたりほぼ28本×28本)の残るものもある。模骨痕はない。側面は横方向のカキ目。

FはDに酷似するが、上外区の珠文がやや密である。大部分のものに範傷がある。外縁は2段と3段があるが、第2段と第3段の境が範端のようである。平瓦部凸面はいずれも繩叩き目が残る。横位と縦位とがある。横位繩叩き目は3cmあたり8~9本とやや粗い。7点。頸部は粘土板を貼り付け(P.L. 82—11)、ヘラケズリしたのち、横方向にナデて仕上げる。頸幅6.2cm前後、平瓦部凹面は全面的にナデ調整するものと、ナデが部分的で布目(3cmあたり21本×18本)がかなり残るものとがある。模骨痕はない。側面はヘラケズリのうち縦方向にナデて仕上げる。縦位繩叩き目は3cmあたり5~6本の粗いもの9点と、3cmあたり12~13本の細かいもの15点とがある。繩叩き目の粗いものは粘土板を貼り付けて頸部を成形する。瓦当面が全面にわたって厚さ1cm前後で剝離するものがある。剝離の状態から、平瓦部に頸部を貼り付けたのち、瓦当面にのみ別粘土を貼り付けたものと推測できる。頸幅は5.7cm前後。平瓦部凸面の瓦当近くと頸部は横方向にナデ、平瓦部凹面は瓦当近くを横方向にヘラケズリするが、以下は不調整で布目(3cmあたり約25本×約20本)が残る。布の合わせ目及び模骨痕はない。側面は横方向のナデ仕上げ。繩叩き目の細かいものは、頸幅6cm前後のものが多いが、頸幅5.3~5.0cmのものが少量ある。頸部は粘土板を貼り付けて頸部を成形するようである。以上の3種にはいずれも両脇区、上外区左端及び下外区右端に小さな範傷がある。ただし、中心飾の花頭基部の珠文に生じた範傷は、横位繩叩きの場合にはないものがあるが、縦位繩叩きの場合にはいずれにもあり、若干の時間差を知りうる。調整はともに平瓦部の瓦当近くと頸部を横方向にナデ、平瓦部凹面を横方向にヘラケズリする。

6665型式 6665は6664に似る3回反転の均整唐草文軒平瓦であるが、唐草第3単位の主葉が脇区界線につかず巻き込む。A~Cの3種があり、Aが出土。Aは中心飾りの花頭基部が上外区界線につかず、上端でわずかに開く。唐草は基部が上・下外区界線からやや離れて流れるように派生する。また、上・下外区と脇区の境は凸線で画す。外縁は2段まで残る。段頸で、頸幅は約7cmと深い。平瓦部凸面には横位の繩叩き目が残る。繩叩き目は3cmあたり9~10本。平瓦部凸面の瓦当近くと頸部は横方向にナデ、凹面の瓦当寄りを横方向にヘラケズリする。

6666型式 6666は6664に似る花頭形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦である。小型で、唐草の基部が内・外区を分つ界線から立上るようにして派生する。花頭基部は上外区界線に接し、珠文は小粒である。また、脇区の下端には珠文をおく。範傷のないものとあるものとがあ

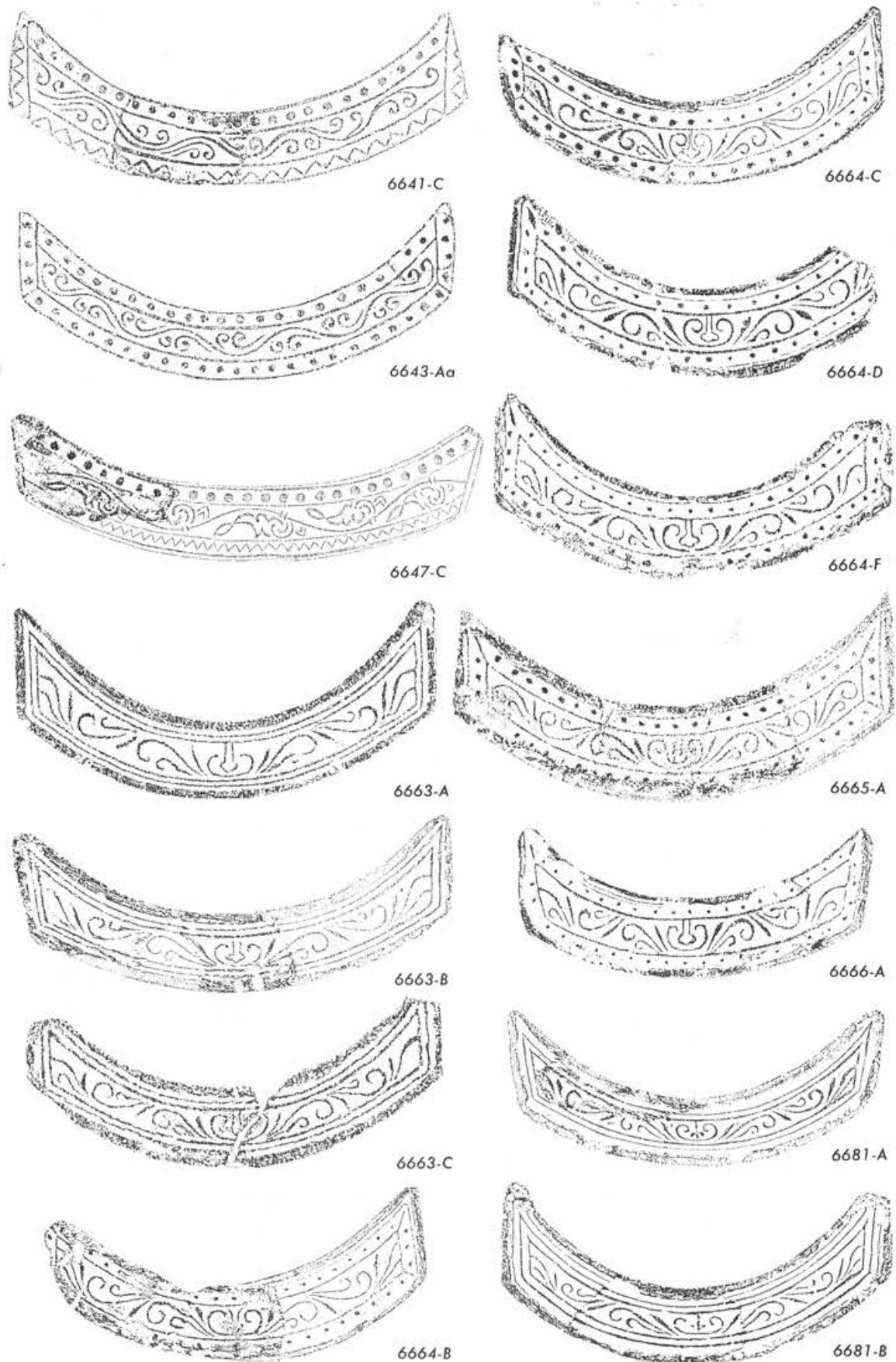


Fig. 35 軒平瓦拓影 1

る。外縁は3段で、第2段と第3段の境が範傷になろう。段顎。平瓦部凸面には繩叩き目が残る。横位と縦位がある。横位繩叩き目は3cmあたり約11本。3点。縦位繩叩き目は3cmあたり7本の比較的粗いもの3点と、3cmあたり11本の細かいもの7点とがある。後者は粘土板を貼り付けて顎部を形成するが、瓦当面が厚さ1cm前後で剥離する。剥離の状態から顎部形成後に瓦当面に別粘土を貼り付けたことがわかる。横位・縦位繩叩きとも右脇区などに範傷がある。調整はいずれも平瓦部凸面の瓦当近くと顎部を横方向にナデ、平瓦部凹面を横方向にヘラケズリしたのち一部縦方向にナデて仕上げる。側面は横方向にナデて仕上げる。

6181型式 6681は逆十字形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦で、内区と外・脇区との境に2重の界線をめぐらす。唐草は基部が上・下外区界から流れるように派生する。A～G・Sの9種があり、A・B・C・Eの4種が出土。

Aは6681の中では小振りの瓦で、唐草の各単位も小さい。B・Eとともに唐草第3単位の主葉と第1支葉先端が脇区界線に接する。外縁は2段。顎は欠損するが、曲線顎のようである。平瓦部凸面は瓦当近くを縦方向にヘラケズリする。

BはAに似るが、唐草の各単位が細長い。外縁は2段である。顎はややカーブする直線顎。調整は不明。胎土に少量の砂粒を含み、軟質で黒褐色を呈する。

Cは中心飾の小支葉と中心葉とが連続する。外縁は2段で、顎は曲線顎である。

EはAに酷似するが、唐草の巻きが比較的小さい。外縁は2段。顎はややカーブする直線顎である。平瓦部凸面の一部に横位の繩叩き目が残る。調整は平瓦部凸面の瓦当寄りを縦方向にヘラケズリし、凹面の瓦当寄りを横方向にヘラケズリする。

6682型式 6682は6681に似る逆十字形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦であるが、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。唐草は上・下外区界線から流れるように派生し、第3単位主葉の先端が脇区界線に接する。A～Eの5種があるが、文様は酷似する。Aが出土。

Aは唐草の線が太く、下外区と脇区との境に杏仁形の珠文をおく。外縁は上面をヘラケズリするが、3段まで残るものがある。第2段と第3段の境が範端であろう。顎は大部分が曲線顎であるが、1点だけ段顎がある。段顎では範傷がないが、曲線顎では瓦当面の全体に範型の木目痕が浮き出る。段顎では、平瓦部凸面に縦位の繩叩き目が残る。繩叩き目は3cmあたり10本前後。平瓦部凸面の瓦当近くと顎部を横方向にナデ、凹面の瓦当近くを横方向、以下を縦方向にヘラケズリする。曲線顎も平瓦部凸面に繩叩き目が残るが、3cmあたり12～13本と細かい。繩叩き目は平瓦部の狭端から施し、先端を瓦当面から6～7cmのところでそろえている。調整は平瓦部凸面の瓦当寄りを縦方向にヘラケズリしたのち、顎部付近を横方向にナデ、平瓦部凹面の瓦当寄りを横方向にヘラケズリする。凹面には布目(3cmあたりほぼ21本×21本)と糸切り痕が残る。布の合わせ目や模骨痕はなく、側縁にそって布端が残ることから一枚づくりと考えられる(P.L. 82-12)。顎部は粘土の剥離状態から繩叩きを施す前に別粘土を貼り付けたことがわかる。なお、1例だが、平瓦部凸面の全体を縦方向にヘラケズリし、凹面の大部分を横方向にヘラケズリするものがある。

6685型式 6685は6682に似る3回反転の均整唐草文軒平瓦であり、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。6682と異なる点は、瓦当幅が19.3～23.0cmと小型で、唐草第3単位第1支葉の先端が巻き込まず脇区界線に接する点である。段顎と曲線顎とがある。外縁は3段で、第2段と第3段

の境が範端になる。A～Fの6種がある。脇区の下端には、A・C・Dでは杏仁形の珠文、Bでは円珠文をおく。A～Dの4種が出土。

Aは6685の中では瓦当幅が最大で、唐草文・珠文がともに大きく、下外区と脇区の境に杏仁形の珠文をおく。範傷のあるものとないものとがある。ほとんどが段顎であるが、ややカーブする直線顎が1点ある。いずれも平瓦部凸面は繩叩き目が残る。段顎の場合、繩叩き目は横位と縦位がある。横位の繩叩き目は3cmあたり8～9本とやや粗い。顎幅4.5cm前後。2点。縦位の繩叩き目は3cmあたり11本と比較的細かい。顎幅5.2cm前後。18点。顎部は平瓦部先端を楔状に薄くし、これに断面三角形に近い瓦当粘土を補足したのち後端をヘラで切り整える(PL. 82-8)。ヘラで切り整えず段がなだらかになったものもある。調整は横位・縦位とも平瓦部の瓦当近くと顎部を横方向にナデ、平瓦部凹面を全面的に横方向にヘラケズリする。側面は縦方向のカキ目ののち縦方向にナデて仕上げる。なお、側面と凹面との境が溝状に凹むものがある(PL. 82-10)。布端かもしれない。直線顎の場合、平瓦部凸面は縦位の比較的細かな繩叩きののち、瓦当寄りを縦方向にヘラケズリし、平瓦部凹面は横方向にヘラケズリする。範傷は横位繩叩きではないが、縦位繩叩きでは左脇区にあり、製作上の時間差が知れる。

Bは6685の中では最も小型である。下外区と脇区の境界線は珠文であり、両脇区に珠文各1をおく。顎はすべて段顎で、平瓦部凸面には繩叩き目が残る。繩叩き目には横位と縦位とがある。横位繩叩き目は3cmあたり約11本。顎幅4.5～4.7cm。18点。縦位繩叩き目は3cmあたり7～8本のやや粗いもの4点と、3cmあたり10本の比較的細かいもの16点とがある。前者は顎幅3.8cm前後。後者は顎幅3.3～4.0cmで、粘土板を貼り付けて顎部を成形する。調整は構位・縦位とも大差なく、平瓦部凸面の瓦当近くと顎部を横方向にナデ、平瓦部凹面を全面的に横方向にヘラケズリする。側面は横方向にナデて仕上げる。大部分は右脇区と下外区との境などに範傷があるが、横位繩叩きの場合にはないものもあり、横位から縦位への変化を知ることができる。

Cは瓦当幅がAに近いが、唐草の各単位が細長く、珠文も小粒である。下外区と脇区との境には杏仁形の珠文をおく。下外区の右端近くに範傷がある。いずれもややカーブする直線顎。平瓦部凸面には3cmあたり約18本の縦位の繩叩き目が残る。調整は平瓦部凸面の瓦当寄りを縦方向にヘラケズリし、凹面は横方向にヘラケズリする。

DはBに似るが、中心葉の右側の巻きが大きく、上外区の珠文が粗い。下外区と脇区の境の珠文は杏仁形。いずれも段顎。顎幅4.6～51cm。平瓦部凸面には3cmあたり12本の細かい横位の繩叩き目が残る。

6688は逆T字形ないし十字形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。唐草は細い凸線であらわし、基部が上・下外区界線から立上るように派生する。唐草第3単位主葉の先端が脇区界線に接する。A・Bの2種があり、とともに唐草第1単位は巻きが逆で、脇区の外側にさらにもう1本の界線がある。Aが出土。

AはBに比してやや小振りで、逆十字形の中心飾りをもつ。外縁は2段。AaとAbとがあり、両者が出土。Abは唐草を太く、珠文をやや大きく彫り直す。顎はAa・Abともに段顎と直線顎とがある。今回出土したAaは顎部と平瓦部の境を指で強く横方向にナデつけて段顎としたものである。顎幅約5.6cm。平瓦部凸面と顎部には格子叩き目がわずかに残る。また、今

回出土した Ab には段顎と直線顎とがある。段顎例は平瓦部と顎部との境及び顎部を横方向、平瓦部凹面の瓦当近くを横方向にそれぞれヘラケズリする。凹面の瓦当面から 2~3cm の位置に布端がある。模骨痕はない。直線顎例は平瓦部凸面を縦方向、凹面の瓦当近くを横方向にヘラケズリする。

6691 型式 6691は花頭形の中心飾りをもつ 4 回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。6667に似るが、花頭形基部が単線である点で異なる。A~D・F の 5 種がある。瓦当幅は A・C が大きく、B・D が小さい。A が出土。

A は中心飾りの花頭基部先端が二股にわずかに開き、唐草の各単位が長い。上・下外区と脇区との境は凸線で画す。外縁は 2 段であるが、最上段は幅が一定せず凹凸もあるので、範端は第 1 段と第 2 段の境になろう。曲線顎。平瓦部凸面には縦位の繩叩き目が残る。繩叩き目は平瓦部の狭端側から施し、先端を瓦当面から 12cm 前後の位置にそろえる。繩叩き目は 3cm あたり 12 本のものが主で、他に 3cm あたり 7 本のものが少量ある。調整は両者とも大差なく、平瓦部凸面の瓦当寄りを縦方向にヘラケズリしたのち、顎部付近を横方向にナデ、平瓦部凹面の瓦当寄りを横方向にヘラケズリする。凹面のヘラケズリは範囲の狭いものと広いものがある。凹面の布目は広範囲に残るが、模骨痕・糸切り痕はない。布目は 3cm あたり 27 本×21 木のものと、経糸・緯糸とも 18 本のものがある。平城宮や法隆寺では凹面の両側縁にそって布端のある一枚づくり例があるが、今回の出土品では確認できない。

6694 型式 6694は 5 葉形の中心飾りをもつ 3 回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A 1 種のみである。唐草は上・下外区界線から立ち上り、先端が玉状になる。脇区下端には珠文をおく。外縁は 3 段であるが、範端は第 2 段と第 3 段の境であろう。段顎。段幅は 6.4cm 前後。平瓦部凸面には繩叩きが残る。これまでの平城宮出土例には横位と縦位があるが、今回は横位が 2 点出土。繩叩き目は 3cm あたり 12~13 本と細かい。この例では下外区の一部に範傷がある。顎部の成形方法は不明だが、後端をヘラ切り調整したのち、顎部とその後端付近を横方向にナデて仕上げる。平瓦部凹面は瓦当から広い範囲にわたって横方向にヘラケズリし、側面にはカキ目を施す。

6710 型式 6710は逆 V 字形の中心飾りをもつ 3 回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A・C・D の 3 種があり、A が出土。A は唐草が上・下外区界線からのびやかに派生し、上・下外区の珠文の間に X 文を各 4 配する。直線顎。平瓦部凸面は縦方向、凹面の瓦当近くは横方向にそれぞれヘラケズリする。

6711 型式 6711 は 2~3 本の短線を中心飾りとする 3~4 回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A・B の 2 種があり、A が出土。A は中心飾りが左に寄り、唐草は左が 3 回反転、右が 4 回反転である。上・下外区と脇区の境は凸線で画す。外縁は 2 段であるが、第 1 段と第 2 段の境が範端である。脇区では範端の外側に幅広の外縁が残る。直線顎で、平瓦部凸面は縦方向、凹面は横方向にヘラケズリする。また、側面は凸面側に幅広く面取りを施す。

6719 型式 6719 は小字形の中心飾りをもつ 5 回反転の均整唐草文軒平瓦で、外・脇区は素文である。唐草は上・下外区界線から流れるように派生するが、基部が接しない。範端は外縁の上面外端に及ぶが、側面にまで及ぶか否かは不明。直線顎。平瓦部凸面は縦位の繩叩き目を瓦当面近くまで施す。繩叩き目は 3cm あたり約 10 本。平瓦部の凸・凹面とも瓦当近くを横方向にヘラケズ

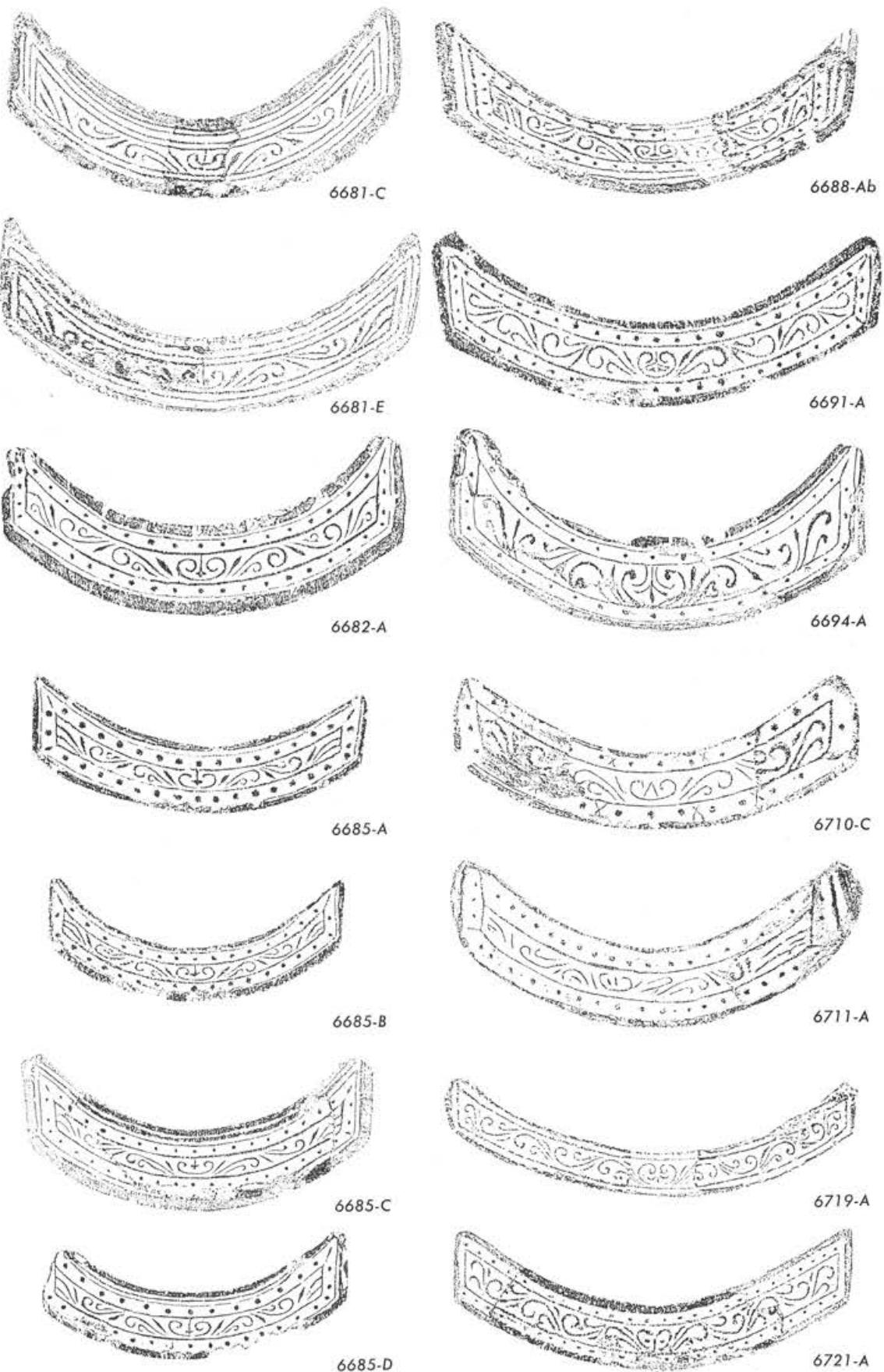


Fig. 36 軒平瓦拓影 2

りするが、以下は不調整。凹面には細かい布目と縦方向の糸切痕が残るが、模骨痕はない。なお、一部には凹面の側縁に布端の残るものがある。一枚づくりである。

6721 型式 6721 は 6719 に似る小字形の中心飾りをもつ 5 回反転の均整唐草文軒平瓦であるが、上・下外区に小粒の珠文をめぐらす点で異なる。唐草は各単位とも巻きが弱い。外縁は 1 段である。A・C～K の 10 種があるが、文様は酷似する。G のみは上・下外区及び脇区の外側にも界線があり、H のみは脇区にも珠文がある。A・C・E・G・H・I の 6 種が出土。

A は中心飾りの両支葉がほぼ水平で、中央葉が上外区の珠文のほぼ中央に位置する。上外区珠文 26、下外区珠文 27。外縁の側面には深さ約 0.3cm の範端痕がある。曲線顎。平瓦部凸面には斜位の繩叩き目が残る。調整は平瓦部凸面の前半部を横方向にナデ、平瓦部凹面の瓦当近くを横方向にヘラケズリする。布目は広範囲に残るが、模骨痕はない。

C は中心飾りの両支葉が逆八字形に大きく開く。上外区珠文 26、下外区珠文 32。外縁の側面には深さ約 0.4cm の範端痕がある。曲線顎。平瓦部凸面には斜位の繩叩き目が残る。3cm あたり 7～8 本のものと約 10 本のものとが各 2 点ある。範傷の進行状況は不明。調整は平瓦部凸面の前半部を縦方向、前端部を横方向にそれぞれヘラケズリしたのち、一部は瓦当寄りを横方向にナデで仕上げる。平瓦部凹面は前半部あるいは一部では瓦当近くを横方向にヘラケズリするが、以下は不調整で布目 (3cm あたり 22 本 × 20 本) が残る。模骨痕がなく、側縁に布端痕が残ることから一枚づくりと考えられる。

E は中心飾りが A に似るが、唐草の第 2 支葉が太く表わされる点で異なる。上外区珠文 31。下外区珠文 35。曲線顎。外縁の側面に深さ約 0.3cm の範端痕がある。

G は中心飾りの両支葉が半月形を呈し、中央葉が上・下外区の珠文を結んだ線上に位置する。また、唐草右第 5 単位の第 2 支葉がなく、珠文は上外区 34、下外区 35 と最も密である。Ga と Gb とがあり、両者が出土。Ga は外・脇区の内・外縁を分つ界線があるが、Gb ではこの界線と外縁とを一体につくる。範端は他種のように外縁の外側に及ばず Ga では外縁の内側まで、Gb では外縁の上面外端までである。顎の形態も大部分とは異なり、直線顎が主であるが、Gb にはややカーブする直線顎と曲線顎も少量ある。平瓦部凸面には斜位の繩叩き目が残る。繩叩き目は Ga では 3cm あたり約 9 本が 2 点、約 11 本が 7 点あり、ともに平瓦部凸面の前半部を縦方向にヘラケズリ、凹面の前半部あるいは瓦当近くを横方向にヘラケズリするが、以下は布目 (3cm あたりほぼ 26 本 × 26 本) が残る。模骨痕はない。Gb のややカーブする直線顎は繩叩き目が 3cm あたり約 9 本で、調整方法は Ga と大差はない。この例では凹面の側端に布端痕があり一枚づくりであることがわかる。凹面の瓦当近くをのぞくと布目 (3cm あたりほぼ 18 本 × 18 本) が残る。模骨痕はない。Gb の曲線顎では平瓦部凸面の前半部を縦方向にヘラケズリし、さらに先端部を横方向にヘラケズリする。

H は中心飾りが A に似るが、唐草の第 1 支葉は基部が短かくコ字形に近くなる。上外区珠文 33、下外区珠文 34。Ha と Hb があり、両者が出土。Ha は脇区の珠文 3 であるが、Hb は左右とも上端に珠文各 1 を加える。また、Hb では中心飾りを彫り直し、中心葉の巻きを強く、両支葉を八字形にする。Ha の段階で唐草の左第 2・3 単位間に範傷があり、Hb のある段階で左第 3 単位第 1 支葉が範傷によってつぶれる。Ha と Hb と考えられるものとが出土。Ha は直線顎、Hb と考えられるものは曲線顎。

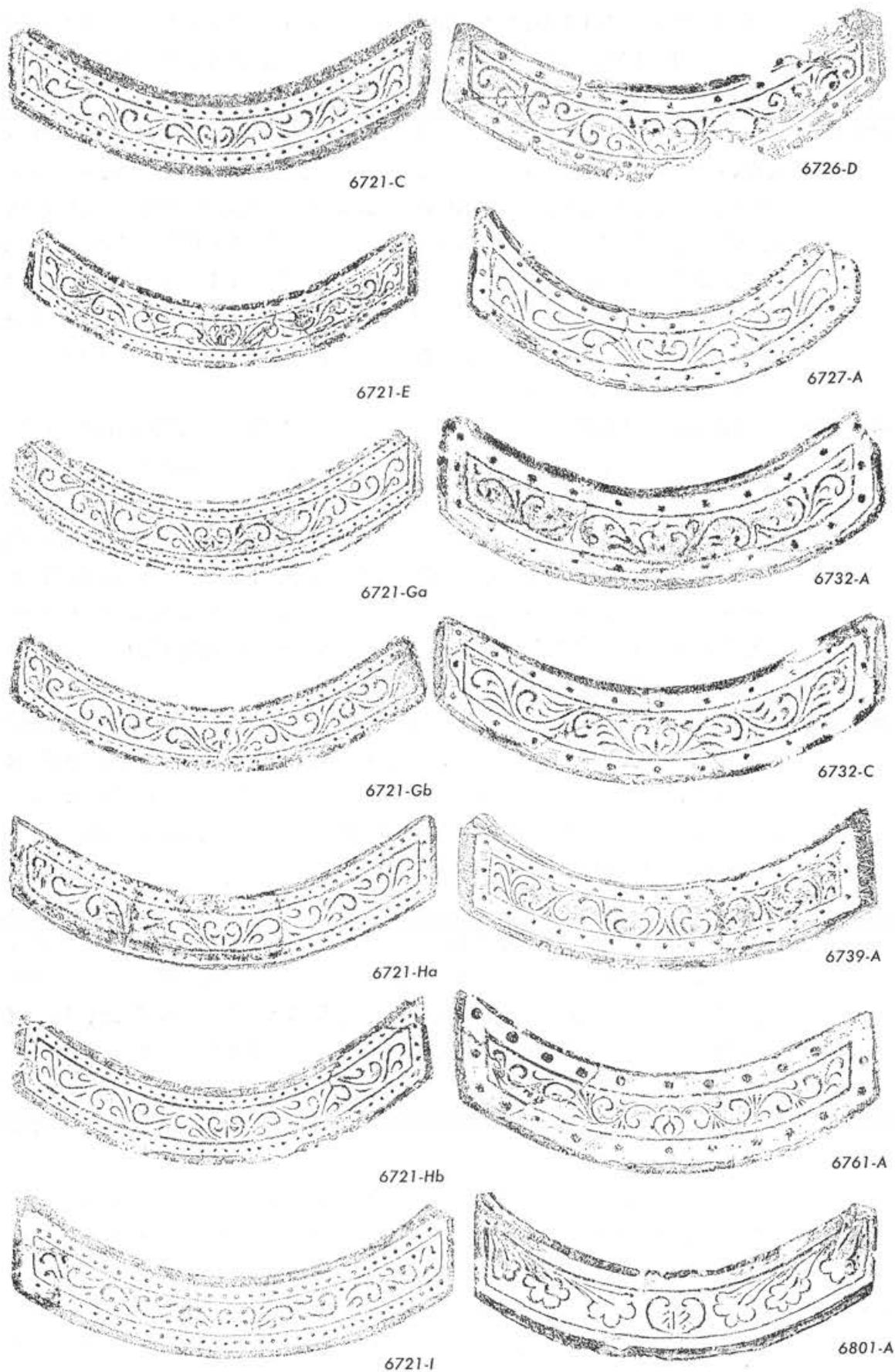


Fig. 37 轩平瓦拓影 3

Iは唐草の主葉と第1支葉の先端が玉状になり、中心飾りの3葉及び唐草第2支葉が珠文状になる。上外区珠文33、下外区珠文36。曲線顎で、平瓦部凸面の瓦当寄りを縦方向、先端部を横方向にそれぞれヘラケズリする。凹面の瓦当寄りは横方向にヘラケズリする。

6726型式 6726は逆小字形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A・B・D～Fの5種があるが、唐草の各単位は3～5葉と一定でない。また、唐草第3単位の主葉、第1支葉は先端が脇区界線につかず巻き込む。Dが出土。Dは比較的大振りでしかも唐草が3葉構成である点でEに似るが、唐草基部が上・下外区界線につかず、内区両端に遊離した小支葉をおく点で異なる。珠文は比較的粗い。外縁は2段。曲線顎。平瓦部凹面の瓦当近くを横方向にヘラケズリするが、以下は不調整で布目(3cmあたり24本×20本)が残る。模骨痕はない。平城京内出土例には範型が左端近くで割れたことを示すものがあるが、本例がそれにあたるか否かは不明。

6727型式 6727は矢印形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A・Bの2種があり、ともに唐草は上・下外区界線から立ち上るように派生する。また、第3単位の主葉と第1支葉の先端は脇区界線につかず巻き込む。Aが出土。Aは中心飾り、唐草とも大きく、珠文もBより密である。外縁は1段であるが、上面にわずかに範端が残る。外・脇区の珠文には範傷がある。段顎と曲線顎があるが、今回出土したものは曲線顎。平瓦部凸面には縦位の繩叩き目が残る。繩叩き目は3cmあたり8～9本。平瓦部凸面の瓦当寄りを横方向にナデ、凹面の瓦当寄りを横方向に深くヘラケズリする。凹面の布目(3cmあたり18本×23本)は広範囲に残るが、模骨痕・糸切り痕はない。

6732型式 6732はいわゆる東大寺軒平瓦である。中心飾りは逆小字形の3葉を中心葉で囲み、その上に松葉状の対葉花文を飾る。唐草は左右各3回反転で、支葉の数が多く、上・下外区と脇区に珠文を粗くめぐらす。外縁は1段で、顎は直線顎と曲線顎とがある。A・C～Q・V・Wの18種がある。これらの大部分は東大寺・西大寺などから出土するもので、平城宮ではこれまでにA・Cの2種が出土している。今回もこの2種が出土。

Aは中心飾りの対葉花文が分離し、唐草の支葉の巻きも比較的強い。また、唐草第2支葉は二股になる。曲線顎。顎は粘土の剥離状態から貼り付けた可能性が強い。平瓦部凸面は縦位の繩叩きのうち、瓦当面から9cm前後の位置で幅約6.5cmの範囲に横位の繩叩きを施す。繩叩き目は3cmあたり約7本と粗い。凸面の瓦当近くは横方向にナデ、凹面の瓦当近くは横方向にヘラケズリする。凹面の布目(3cmあたり22本×17本)は広範囲に残り、側面にまで連続するものがある。模骨痕のないこととあわせて一枚づくりであることを知りうる。また、平瓦部凹面の布目は瓦当面から約3cmほどで急に高くなる。一枚づくりの凸型台が先端部で1段低くなっていたのであろう。

CはAに似るが中心飾りの対葉花文先端部の開きが弱く、唐草の支葉の巻きも弱い。また、珠文もやや小粒。曲線顎。平瓦部凸面にはAと同様に縦位の繩叩き目が残るが、繩叩き目は3cmあたり約12本と細かい。横位繩叩き目の幅は約3.6cm。

6739型式 6739は中心飾りが3葉の唐草を背中あわせにした形状を呈する4回反転の均整唐草文軒平瓦で、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A・Bの2種があり、Aが出土。Aは支葉の数が多い。外縁は1段のようである。曲線顎。平瓦部凸面寄りを縦方向、顎の先端及び凹面の瓦当寄

りを横方向にそれぞれヘラケズリする。凹面には布目と糸切り痕が残る。

6761は桃実状の中心飾りをもつ5回反転の均整唐草文軒平瓦である。A種のみがある。Aは唐草第2～第4単位の第2支葉を3葉につくるのが特徴。珠文は大粒で粗い。内・外区とも範型の木目痕が浮き出る。外縁は1段。曲線顎。平瓦部凸面は瓦当寄りを縦方向にヘラケズリし、凹面は瓦当近くを横方向にヘラケズリするが、以下は布目(3cmあたり22本×18本)が残る。模骨痕はない。

6801は中心に文字「佟」(修)を飾る飛雲文軒平瓦で、外・脇区は素文である。A種のみがある。Aは飛雲文が左右とも3単位。外縁は1段で、上面にわずかに範端が残る。脇区外縁はあるものとないものとがあるが、今回出土したものはいずれも外縁がない。曲線顎。平瓦部凸面には繩叩き目が残る。繩叩き目は3cmあたり16～17本ととくに細かい。平瓦部凸面の瓦当寄りと顎部を丁寧に横方向にナデ、凹面の瓦当近くを横方向、側面を縦方向にそれぞれヘラケズリする。凹面には布目(3cmあたり20本×19本)と糸切り痕が残り、凹面の瓦当近くと側縁には布端痕がある。一枚づくりである。凸面には繩叩きに用いた離れ砂が多く付着する。

新種の軒平瓦が1点ある。中心飾りを欠き型式を決めがたいが、珠文をめぐらす均整唐草文の右端部と推定される。右端の主葉は脇区界線につき、その左の単位では太い第1支葉を主葉が大きく巻き込む。顎は剝離していて形態が明らかでない。

隅軒平瓦と推定できるものは7点ある。うち1点(P.L. 82-13)は焼成前に平瓦部の右隅を大きく切り落したものである。瓦当部を欠くが、凸面に横位の繩叩き目が残るので、6664型式と推定できる。S E7900の石敷上出土。残りの6点はいずれも焼成後に平瓦の隅を凹凸両面から大きく打ち欠く。6666Aは平瓦部の左隅を打ち欠く。1点。6 A A P区のM B30付近出土。6685A(P.L. 82-16)は平瓦部の右隅を打ち欠く。1点。6 A A P区のK A18付近出土。6691A(P.L. 82-17)は平瓦部の右隅を打ち欠く。1点。S A 4761の柱抜取穴出土。6721A(P.L. 82-14)と6721Gb(P.L. 81-32, 82-15)は平瓦部の左隅を打ち欠く。各1点。6 A A P区のK S 19・O Q34付近出土。6801A(P.L. 81-38, 82-18)は平瓦部の右隅を凹凸両面から打ち欠く。1点。S E7900出土。

C 丸・平瓦と刻印瓦 (PL. 83～86・88, Fig. 38)

丸・平瓦は第3・6・9・12次分が未整理である。これを除くと、総量で整理平箱(72cm×43cm×11cm)に約1390箱分が出土した。大部分は破片で、完形に近いものは丸瓦が27個体、平瓦が23個体である。総点数をつかむために完形品を含めて隅数を数えると、丸瓦は3096点、約774個体分、平瓦は3805点、約951個体分になる。ただし、丸瓦と軒平瓦の丸瓦狭端部の破片とは区別できないものがかなりある。軒丸瓦の丸瓦部の混入を考えれば、丸瓦の数は $\frac{2}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ になる可能性がある。平瓦の場合は、軒平瓦の平瓦部が概して部厚いため比較的容易に区別できる。これらとは別に、平瓦を焼成後に割って熨斗瓦に転用したと判断したものが約555個体分あるが、上記の平瓦にも熨斗瓦に転用したものが相当数あると推測できる。なお、他に刻印のある丸・平瓦が21点、隅丸・平瓦が10点ある。丸・平瓦の総括的な分類は後日に委ね、以下では完形品を中心にそれぞれの特徴を記す。

6761型式

6801型式

新種の軒丸瓦

隅軒平瓦

i 丸 瓦 (PL. 83)

丸瓦は完形品がほとんどないが、破片から判断するとすべて玉縁丸瓦で、行基丸瓦は1片もない。また、藤原宮からの搬入瓦が少量あるが、粘土紐を巻き付けたものは見当らず、ほとんどは粘土板を巻き付けたものと推測できる。繩叩き目丸瓦と格子叩き目丸瓦とがあるが、後者はごく少ない。

藤原宮から搬入した丸瓦

玉縁部凸面にカキ目調整を施した小片や、凸面を丁寧に横方向にナデ調整し、玉縁部凹面の縁を面取りした大型品の破片などが出土している。いずれも焼成は比較的堅緻で青灰色ないしは暗灰色を呈する。

繩叩き目丸瓦

第 1 類

繩叩き目はいずれも縦位で、調整手法などから大きくは4類に区分できる。第1類(1)は凸面の全体を横方向に回転を利用して丁寧にナデ調整し、凹面の側・端縁を幅広く面取りし、側面も丁寧にヘラケズリする。凹面の広端側の面取りはとくに広く、3~6cmに及ぶ。凹面は中央部を一部縦方向にナデるだけで、布目(3cmあたり25本×32本)と糸切り痕が残る。また、凹面の玉縁部には布の絞り目が残り、一部に丸味をもった棒状の圧痕のあるものがあるが性格は不明。なお、玉縁部凸面には一条の細い沈線のめぐるものがある。完形品に近いものは3点ある。いずれも全長が40cm前後と大型で厚手である。1点(1)は全長39.9cm(筒部長35.6cm)、復原径15.8cm、厚さ2.0cm。他の1点は全長41.4cm(筒部長36.5cm)、径16.0cm、厚さ1.9cm。残りの1点は筒部長38.6cm、広端径17.2cm、厚さ1.6cm。この一群の丸瓦は恭仁宮所用の丸瓦¹⁾bと特徴が一致する。

第 2 類

第2類(2)も凸面を横方向に回転を利用してナデ調整するが、凹面の側縁には面取りを施さず玉縁凹面の端縁のみ軽くヘラケズリする。側面は丁寧にヘラケズリする。凹面は不調整で布目と糸切り痕が残る。布は末端をかがるが、とじあわせない。布目は3cmあたり25×20本。全長31.9cm(筒部長27.7cm)、復原広端径14.4cm、狭端径12.8cm、厚さ1.3cm。

第 3 類

第3類(3)は第2類に似るが、側面は不調整で分割破面を残す。比較的薄手の中型品と小型品とがある。中型品は凹面の広端縁をヘラケズリする。完形品は2点あり、1点(3)は布目が3cmあたり29本×26本。筒部長30.1cm、径14.9cm、厚さ約1.2cm。他の1点は布目が3cmあたり約30本×約38本と密である。筒部長32.1cm、広端径14.4cm、狭端径13.1cm、厚さ約1.2cm。小型品は小片である。

第 4 類

第4類(4・5)は凸面を縦方向にナデ調整するが、側面は不調整で、凹面の広端縁のみヘラケズリする。凹面はごく一部をタテナデするものもあるが、全体に布目と糸切り痕が残るやや厚手の中型品と、薄手の小型品とがある。中型品は完形に近いものが3点ある。1点(4)は凹面に粘土板の合わせ目が残る。布目は3cmあたり経糸・緯糸とも24本前後。筒部長28.0cm、広端径14.8cm、狭端径14.1cm、厚さ約2.2cm。他の1点も凹面に粘土板の合わせ目(接合Z)²⁾が残る。布目は前者と大差ない。全長33.7cm(筒部長29.3cm)、広端径14.7cm、厚さ約2.0cm。残りの1点は布目がより細かい。全長34.3cm(筒部長30.2cm)、広端径15.6cm、狭端径14.2cm、

1) 京都府教育委員会『恭仁宮跡発掘調査報告瓦編』1984, p. 83.

2) 粘土板の接合は、玉縁方向からみた形状によって、左まわりに巻きつけるS、右まわりに巻きつけるZとに区別。

厚さ約 2.2cm。なお、このタイプの丸瓦には広端径 16.9cm、厚さ約 2.5cm の大型で厚手のも 小型品 のもある。小型品は完形に近いものが 5 点ある。いずれも玉縁を欠く。うち 4 点(5)は筒部長が 26.1~26.4cm、広端径約 11.0cm、厚さ 1.1~1.2cm。布目は 3cm あたり経糸・縦糸とも 26 本前後。残る 1 点は筒部長 31.1cm、厚さ 1.0cm。

第 5 類(6)は凸面をナデ調整し、側面はヘラケズリして凹面の側縁に面取りを施す。また、玉縁部は側面を斜めに強くヘラケズリし、凸面の側縁に深い面取りを施す。凹面は不調整でやや粗い布目が残る。なお、凸面の段部は剝離し、剝離面には糸切り痕が残る。厚さ約 1.9cm。

格子叩き目丸瓦は小片で詳細が明らかでないが、凸面は一部横方向にナデ調整し、凹面は不調整で布目と布端を縫い合わせた痕跡が残る。側面はヘラケズリ。叩き目は斜格子で、キザミ目の間隔は 4mm ほどと、後述する平瓦の場合より細かい。厚さ 1.6cm。

玉縁部の凸面に水切り用と推測される凸帯あるいは凹溝をめぐらす丸瓦がそれぞれ 9 点と 5 点出土した。切込みや突出部を設けた板状の工具で玉縁部をナデて仕上げたのであろう。凸帯は 2 条のものと 1 条のものとがある。

2 条のもの(8)は凸帯の幅 3mm、高さ約 1mm、凸帯間の幅 5mm である。凸帯は玉縁端から約 1.8cm、筒部から 1.6cm に位置する。丸瓦は凸面を丁寧にナデ調整し、側面をヘラケズリする。厚さ約 1.4cm。縦位繩叩き目丸瓦の第 2 類にあたる。S B4712 の掘形から出土。

1 条の凸帯を設けたものは 3 種に区分できる。第 1 種は凸帯の幅 6mm、高さ約 3mm のもので 4 点ある。筒部からの距離が 3.1cm のもの(9)と 2.1cm のもの各 1 点と、玉縁端からの距離が 1.9cm のものと 1.5cm のものとがある。凸面はいずれもナデ調整するが、一部に縦位の繩叩き目が残る。凹面は不調整で布目が残る。側面が遺存するものは 1 点ある。ヘラケズリし、凹面側に面取りを施す。厚さは 1.3~1.5cm。縦位繩叩き目丸瓦の第 1 類にあたるようである。なお、前述したように II - 1 期の軒丸瓦 6225C には玉縁凸面にこれと酷似する凸帯がある。第 2 種は凸帯の幅 4mm、高さ約 1.5mm のもので 2 点ある。筒部と玉縁端からの距離は 1.8cm と 2.7cm(10)、3.3cm と 0.9cm とである。丸瓦の凸面はナデ調整、凹面は不調整。側面はヘラケズリするが面取りは施さない。縦位繩叩き目丸瓦の第 2 類にあたる。厚さ約 1.9cm。第 3 種は凸帯の幅 3mm、高さ約 1.5mm のもので玉縁部の小片が 2 点ある。1 点は筒部と玉縁端からの距離が 1.7cm と 2.7cm のもの(11)。玉縁凹面の側・端縁に面取りを施す。他の 1 点は筒部と玉縁端からの距離が 2.1cm と 2.6cm のもの(12)。側面はヘラケズリし、玉縁凸面の側縁に面取りを施す。

凹溝は太いもの 3 点と細いもの 3 点とがある。太い凹溝(13)は幅約 9mm、深さ約 3mm で、筒部と玉縁端部からの距離は 3.1cm と 1.9cm である。うち 2 点は 3 期の築地回廊 S C 156 の西雨落溝から出土。他に玉縁端部からの距離が 2.3cm のものもある。側面はヘラケズリするが、面取りは施さない。厚さは 2.2cm と部厚い。細い凹溝(14)は幅 2mm、深さ 2mm で、筒部と玉縁端部からの距離は 3.1 と 2.0cm。筒部からの距離が 2.8cm のものもある。遺存状態が悪く調整は不明。なお、既述した縦位繩叩き目丸瓦の第 1 類も玉縁凸面に凹溝をめぐらすが、幅が 1mm と細い(1)。筒部と玉縁端部からの距離は 1.1cm と 3.5cm。

丸瓦の狭端部を凹凸両面から斜めに折ち欠いた隅丸瓦(7)が 1 点ある。縦位繩叩き目丸瓦の第 1 類を転用したものである。全長 28.5cm、幅 15.3cm。東棟 S B 7600 の北雨落溝出土。

格子叩き目
丸瓦

凸帶をめぐ
らす玉縁

凹溝をめぐ
らす玉縁

隅丸瓦

ii 平 瓦 (P.L. 84~86)

平瓦は凹面に模骨痕のあるものと、模骨痕のないものとに大別できる。また、痕跡の残るものはいずれも粘土板を使用し、粘土紐を巻き付けたものは見当らない。凸面の叩き目は大部分が繩叩き目で、他に少量の格子叩き目、平行叩き目がある。なお、焼成後に平瓦を割って熨斗瓦に転用したと考えられる割熨斗瓦もここで一括してとりあげる。

模骨痕のある平瓦

凹面に模骨痕のある平瓦は、格子叩き目のものが1点だけあるが、他はいずれも凸面に繩叩き目を施す。縦位が主で、横位はごく少量である。

縦位繩叩き目平瓦

模骨痕のある平瓦で縦位繩叩き目を施すものは2類7種に区分できる。量的には第1類c・d種、第2類c・d種が目立つ。この多くは割って熨斗瓦に転用したものである。

第1類 第1類は凸面が不調整のものであり、凹面の調整によってa～dの4種に細分できる。

a(1)は凹面が不調整のもの。小片で、詳細が不明だが、凹面の側縁と端縁に面取りを施す。厚さ約2.6cmの厚手の平瓦。布や粘土の合わせ目は確認できないが、側面が凹凸面に対してほぼ直角になることから桶巻作りと推測される。繩叩き目は3cmあたり約11本。布目は3cmあたり28本×24本前後。模骨幅2.8～3.0cm。

b(2)は凹面の側面寄りを比較的幅広く縦方向にナデるもの。割って熨斗瓦に転用。凹面の狭端縁に面取りを施し、側面はヘラケズリのちナデて丸く仕上げる。粘土や布の合わせ目は不明で、桶巻作りか細板を並べた凸型台を用いた一枚づくりかは明らかでない。側面は凹面に対して鋭角になる。凸面に離れ砂が付着。離れ砂は後述するように一枚づくりに顕著であり、bも一枚づくりである可能性が高い。布目は3cmあたり19本×19本。模骨幅約2.2cm。凸面の繩叩き目は3cmあたり約13本で、側面近くに調整用の凹型台のあたりが残る。全長34.5cm、厚さ2.2cm。なお、bには、厚さが約1.6cmと薄手で、凸面の繩叩き目が3cmあたり約9本と粗いものもある(3)。布目は3cmあたり22本×21本。模骨幅2.2～2.9cm。

c(4)は凹面の狭端側約1/2を板状工具で横方向にナデ調整するもの。凹面の四辺は軽くヘラケズリし、側面と端面もヘラケズリする。側面は凹面に対して鋭角になる。凹面には糸切り痕が残るが布や粘土の合わせ目がなく、桶巻作りであるのか、あるいは細板を並べた凸型台を用いた一枚作りであるのか断定できない。布目は3cmあたり30本×32本。模骨幅は2.2～2.4cm。繩叩き目は3cmあたり10～11本で、狭端から広端まで通る。全体的に押しつぶされているので、凹面の調整に凹型台が使用されたと推測できる。なお、凹面には調整の前に無文の板状工具で叩きしめた痕が数ヶ所残るものがある。これは平瓦を凹台になじませるとともに平瓦の曲率を整えたものと考えられる。狭端面は凹面に直角にならず鈍角になるのが特徴である。完形に近いものが1点ある(4)。全長35.9cm、広端幅29.3cm、復原狭端幅24.2cm、厚さ2.3cm、重さ4.36kg。

d(5)は凹面の全体を横方向にナデ調整するもの。凹面にわずかに布目と模骨痕及び糸切り痕が残るが粘土と布の合わせ目は不明。側面は凹面に対して鋭角につくる。側縁と両端縁は軽く面取りするようである。凸面の繩叩き目は3cmあたり約12本で、狭端から広端まで通る。狭端面は凹凸面に対してほぼ直角である。全長36.7cm、厚さ約2.2cm。

第2類 第2類は凸面をヘラケズリないしナデ調整するもの。今回出土したものは、いずれも狭端側

$\frac{1}{3} \sim \frac{1}{2}$ を板状工具で横方向にナデ調整する。凹面の調整によって a・c・d の 3 種に区分できる。

a は破片で詳細が不明だが、凹面が不調整のもの。側面は凹凸面に対してほぼ直角につくる。おそらく桶巻き作りであろう。凹面の端面と側面寄りに深い面取りを施す。繩叩き目は 3cm あたり 11~12 本、布目は 3cm あたり 25 本 × 24 本。模骨幅約 4.6cm、厚さ 1.7cm。

c (6) は凹面の狭端側約 $\frac{1}{2}$ を板状工具で横方向にナデ調整するもの。凸面は横方向にナデたのち、部分的に縦方向のナデを加えるものもある。側面は凹面に対して鋭角につくる。割って熨斗瓦に転用。凹面の側縁と狭端縁をヘラケズリし、側面と端面もヘラケズリする。凹面には糸切り痕が残るが布や粘土の合わせ目がなく桶巻き作りと断定できない。布目は 3cm あたり 24 本 × 26 本。模骨幅 2.2cm 前後。繩叩き目は 3cm あたり約 11 本で、狭端から広端まで通るようである。凸面の側縁近くに調整に使用した凹型台のあたりがあり、繩叩き目も部分的につぶれている。厚さは 2.6~2.8cm のものと、1.7cm 前後のものとがある。

d (7・8) は凹面の全体をナデ調整するもの。側面は凹面に対して鋭角につくる。凹面の四辺を軽くヘラケズリし、側面と両端面もヘラケズリする。凹面には布目と糸切り痕及び模骨痕が部分的に残るものもある。布の合わせ目や粘土の合わせ目は不明で桶巻き作りと断定できない。模骨幅は 2.2cm 前後。凸面の繩叩き目は 3cm あたり 11~12 本で、繩叩き目が部分的につぶれ、凸面の側縁近くに台のあたりがあることから、調整に凹型台の使われたことがわかる。厚さは 1.8~2.9cm まで幅があるが、2.2cm 前後のものが多い。後述するように割って熨斗瓦に転用したと推測できるものが多数ある。長さの判明するものは 35.6~38.2cm。完形品が 1 点ある(7)。全長 33.6cm、広端幅 25.6cm、狭端幅 23.0cm、厚さ 2.3cm、重さ 3.66kg。他の 1 点は一部を欠く。全長 33.2cm、広端幅 26.4cm、復原狭端幅 23.4cm、厚さ 2.4cm。重さ 3.62kg。他に全長の判明するものが 4 点ある。33.9~37.1cm。c・d の両種は、後述する刻印「出雲」などを押捺した平瓦と同類であり、¹⁾ c と d がそれぞれ恭仁宮出土平瓦の BI 型式と BII 型式にあたる。

模骨痕のある横位繩叩き目平瓦は小片である。凹面はナデ調整する。繩叩き目は 3cm あたり約 7 本と粗い。厚さは 2.2cm あり、軒平瓦の平瓦部になる可能性もある。

格子叩き目平瓦は出土総量が少なく、しかもそのほとんどが模骨痕のない平瓦であるが、1 格子叩き点のみにはわずかに模骨痕が残る。この平瓦の格子叩き目は斜格子で、格子の大きさは一辺が 5~6mm、格子を画す凸線の太さは約 3mm である。凸面は一部ナデ、凹面は不調整で細かい布目と模骨痕が残り、端面近くをやや広く面取りする。厚さは 2.7cm あり、軒平瓦の平瓦部の可能性もある。

凹面に模骨状圧痕のない平瓦は、大部分が繩叩き目であるが、他に平行叩き目、格子叩き目が少量ある。

模骨痕のない繩叩き目平瓦には叩き目が横位と縦位とあるが、横位はごく少ない。縦位繩叩き目平瓦は 2 類 4 種に区分できる。

第 1 類は凸面が不調整のもので、凹面の調整によって a・d 両種に区分できる。a は凹面が不調整のもの。a₁~a₄ のパラエティーがある。

a₁ (9) は凹面の布目が両側面と広端面から一部凸面にまで及ぶ一枚作りのもの。凸型台は側縁が立上がったものが想定できる。凸面の繩叩き目は狭端から広端まで通るが、处处に指圧痕

1) 京都府教育委員会『恭仁宮跡発掘調査報告瓦編』1984, pp. 51, 52.

が残る。繩叩き目は3cmあたり12本。凹面には糸切り痕が残る。布目は3cmあたり経糸、緯糸とも30~32本と細かい。凸面の狭端近くの中央部を横方向にヘラケズリし、側縁に面取りを施す。また、凹面の狭端と側縁、凸面の両側縁をヘラケズリする。全長33.4cm、広端幅25.4cm、復原狭端幅22.8cm、厚さ1.6cm、重さ2.48kg。なお、この種のものには、繩叩き目が3cmあたり7~8本と粗く、布目が3cmあたり17本×23本のものもある。また、側面が不調整で凸型台の縁と布目が残るものがある。いずれも破片であるが、厚さは1.4~1.8cmと概して薄い。

a₂(10)は完形品がないが、凹面の四辺にそって布端痕が残る一枚作りのもの。割って熨斗瓦に転用したものであろう。凹面の側縁と端縁は浅くヘラケズリする。凸面には处处に指圧痕が残る。繩叩き目は3cmあたり11本であるが、9本前後のものもある。後者は側面のケズリが浅く、凸型台のあたりが残る。凸型台はa₁と同じものが想定できる。凹面には糸切り痕が残る。布目は3cmあたり経糸、緯糸とも27~30本。厚さ1.5~1.7cm。

a₃(11)はa₂に似て凹面の側縁に布端状の圧痕が残る一枚作りの可能性が強いもの。この布圧痕はa₂のように溝状にならず、段になることから、凸型台の角があたったものと想定できる。側面と端面をヘラケズリするが、他は凹面の広端縁を軽く面取りするにすぎない。凸面の繩叩き目は狭端から広端まで通るようである。3cmあたり約10本。成形時に叩き板の離れをよくするため使用したいわゆる離れ砂が凸面にかなり付着する。布目は3cmあたり18本×20本。残長32.7cm、復原広端幅約28cm、厚さ1.7cm。

a₄(12)は破片で詳細が不明だが、厚さが約1.9cmとやや厚手で、凸面に離れ砂が付着。割って熨斗瓦に転用。繩叩き目は3cmあたり約12本。布目は24本×23本。凹面の側・端縁をヘラケズリし、側・端面もヘラケズリし、側・端面もヘラケズリする。

凸型台のT字突起 なお、第1類a種に属する平瓦で、凹面にT字状の突起(太さ8mm、高さ3mm)のあるものが1点混る(17)。この突起の上に布目痕があることから、凸型台に刻まれていたことがわかるが、用途は不明。繩叩き目は3cmあたり8本。布目は3cmあたり経糸・緯糸とも20本前後。厚さ1.4cm。

dは凹面の全体を横方向にナデ調整するもの。d₁・d₂・d₄・d₅のパラエティーがある。d₁・d₂・d₄は一枚作り、d₅もその可能性が強い。

d₁は破片で詳細が不明だが、先述したa₁と同様に、凹面に布目が及ぶ資料で、凹面を横方向にナデ調整する。凹面のナデは部分的なもの(C種)かもしれない。厚さ約1.9cm。

d₂は凹面の側縁にそって布端が残るもの。割って熨斗瓦に転用。繩叩き目は3cmあたり約10本。凹面の側・端縁をヘラケズリするようである。遺存状態のよい破片をみると、凹面には一部布目と糸切り痕及び凹型台上で施した無文叩き痕が残る。また、凸面の狭端中央は軽く横方向にヘラケズリする。割って熨斗瓦に転用。

d₄(13~15)は凹面の四辺と側・端面を丁寧にヘラケズリするため布端は不明だが、凸面の繩叩き目は狭端側と、広端側との2方向から施すという特徴がある。凹面には部分的に布目と糸切り痕、凸面には指圧痕と糸切り痕が残る。凸面の繩叩き目はつぶれているものが多く、凹面の調整に凹型台の使用されたことが窺われる。繩叩き目は3cmあたり約10本もしくは12本が主。凸面に離れ砂が付着するもの(14・15)と、離れ砂を使用せず、凹面の側縁をほとんど調整しないもの(13)がある。15は全長31.5cm、厚さ2.0cm。14は割って熨斗瓦に転用したもの。

全長約厚さ約 1.9cm。13 は全長 33.2cm, 復原広端幅 25.9cm。狭端幅 23.6cm, 厚さ 2.1cm。なお, 32cm, d_4 には凸面の繩叩き目が 3cm あたり約 8 本と粗いものもある。全長 34.7cm, 復原幅 25.5cm, 厚さ 2.0cm。

d_5 (16) は凹面の調整が d_4 に似るが, 凸面の繩叩き目は狭端から広端まで通る。小型品で, 小型平瓦 全長 29.9cm, 復原広端幅 24.9cm, 復原狭端幅 20.5cm, 厚さ約 1.8cm。

第 3 類は凸面の側・端縁を比較的幅広くヘラケズリするもので, 凹面の調整によって a・d 第 3 類 両種に区分できる。

a は凹面が不調整のもので, $a_2 \cdot a_4$ のバラエティーがある。 a_2 は凹面の側・端縁に布端痕が残る一枚作り。凹面の側・端縁も軽くヘラケズリする。凹面には布目と糸切り痕が残る。布目は 3cm あたり 34 本 × 32 本ときわめて細かい。繩叩き目は 3cm あたり約 11 本。割って熨斗瓦に転用したものもある。厚さ 1.6~1.8cm。 a_4 (18) は破片で詳細が不明だが, 凹面の側・端縁もヘラケズリする。凹面の布目は 3cm あたり 22 本 × 24 本。繩叩き目は 3cm あたり約 9 本。

d は凹面をほぼ全体的にナデ調整するもの。 $d_3 \cdot d_4$ のバラエティーがある。 d_3 (19) は凹面の側縁にそって布をかぶせた凸型台の縁のあたりが残る一枚作りのもの。割って熨斗瓦に転用。凹面の側・端縁をヘラケズリする。布目は 3cm あたり 30 本 × 26 本。繩叩き目は 3cm あたり約 11 本。全長 38.6cm, 厚さ約 1.7cm。 d_4 (20) は凹面の側・端縁をやや深めにヘラケズリするため布端が不明である。凸面の端縁はヘラケズリするものと, 不調整のものとがある。凹面には部分的にごく細かな布目と糸切り痕が残る。繩叩き目は 3cm あたり約 7 本。厚さは約 2.0cm。なお, このタイプの平瓦には, 凹面の側縁近くに 1 ヶ所だけ縦方向に段のつくものがある (21)。凸型台を拡幅もしくは補修したのであろうか。布目は 3cm あたり約 25 本 × 26 本。繩叩き目は 3cm あたり約 14 本。広端幅 26.4cm, 厚さ約 2.4cm。

凹・凸両面に縦位の繩叩き目を施した平瓦が御在所地区北方で 1 点出土した。厚さは約 2.4 cm と部厚いが,¹⁾ 宮内ではこの種の完形品が出土している。凹凸面とも不調整。凹面の繩叩きは凹型台で再度叩きしめたものであろうが, 一枚作りか否かは不明。

横位繩叩き平瓦には凹凸面とも不調整のものと, 凹面のみを横方向にナデ調整するものとがある。前者は凹面の側縁にわずかに布端らしいものが残る。一枚作りであろう。割って熨斗瓦に転用。布目は 3cm あたり 21 本 × 25 本前後。繩叩き目は 3cm あたり約 8 本。後者は繩叩き目がやや粗く 3cm あたり約 6 本。

平行叩き目平瓦 (22) は凹凸面ともに不調整のようで, 凹面の側縁を面取りする。叩き板は細長いもので, 4mm ほどの間隔をとって幅 2~3mm のキザミ目を斜めに平行させる。叩き板のあたりは平瓦の側辺にほぼ平行する。凹面には糸切り痕と布目が残る。一枚作りであろう。厚さ 1.9cm。

格子叩き目平瓦 (23) は凹凸面とも不調整で, 多くは凹面の側・端縁に面取りを施す。叩き板は幅 5.5cm の細長いもので, 8mm ほどの間隔で太さ 2~3mm の斜格子のキザミ目を入れる。斜格子には間隔が 4~6mm と細かいものもある。叩きは平瓦の側辺に対して平行もしくはやや斜めに施す。凹面に布目と糸切り痕が残る。宮内出土品には側面に布目の及ぶものがあり,²⁾

1) 第一次大極殿地域（第41次調査）出土。全長 35.7cm, 広端幅 26.5cm, 厚さ約 3.0cm。

2) 東大溝（第172 次調査）出土。

一枚作りと推定できる。厚さは 1.6~2.7cm と幅があるが、2.5cm 前後のものが多い。部厚いものは軒平瓦 6688 の平瓦部である可能性もある。ただし、平瓦の完形品でも厚さが 2.7cm のものもある。

隅 平 瓦 焼成前に隅を切り欠いた平瓦の破片が計 9 点出土した。凸面はいずれも不調整で縦位の繩叩き目が残る。大きくは 3 種に区分できる。1 種は凹面に模骨痕が残るもの (24)。凹面はほぼ全体的に横方向のナデを施すが、部分的に布目・糸切り痕が残る。凸面は不調整。繩叩き目は 3cm あたり 12~13 本。布目は 3cm あたり 経糸・緯糸とも約 28 本。模骨幅は 1.5~2.6cm。厚さ 1.9~2.4cm。平瓦の第 1 類 d 種にあたる。5 点あり、4 点は狭端を上にして凹面の右上を大きく切り落し、1 点は逆に左上を大きく切り落す。瓦の隅の角度は 64°~67°。胎土には若干の砂粒を含むが、焼成は比較的堅緻で青灰ないしは灰色を呈する。4 点は東棟 S B 7600 の北雨落溝とその周辺から、他の 1 点は井戸 S E 7900 より出土。他の 1 種は凹面を丁寧にナデ調整するため模骨痕の有無が不明。2 点あり、ともに凹面の右隅を小さく切り欠く。繩叩き目は 3cm あたり約 14 本のものと、8 本のものとがある。前者は S B 4790 B の柱掘形から、後者は 6 A A Q 区の B E 05 付近から出土。残る 1 種も凹面をナデ調整するが、部分的に残る布目からみて模骨痕はない可能性が強い。繩叩き目は 3cm あたり 12 本。厚さ約 1.7cm。2 点あり、1 点は大きく切り落す。S B 7601 の柱抜取穴出土。他は逆に左上を大きく切り落す。6 A A Q 区出土。隅の角度は前者が約 65° に、後者が約 62° に復原できる。

iii 刻印瓦 (PL. 88, Fig. 38)

丸・平瓦に刻印を押捺したものが 21 点出土した。内訳は「修」が 3 点、「理」が 4 点、「里」が 1 点、「司」が 4 点、「矢」が 3 点、「土」が 1 点、「大」が 1 点、「國万呂」が 1 点、「出雲」が 1 点、「古□」が 1 点、不明が 1 点である。¹⁾ なお、前述したように軒丸瓦 6308 B には「北」 d 種の刻印がある。

「修」 「修」は印面に文字を陽刻する。刻印「修」には a ~ g の 7 種があるが、今回は c · d と新種の h が各 1 点出土。いずれも丸瓦である。c (PL. 88-9, Fig. 38-1) は第 1 画が短かく屈折し、^{つり} 旁の上部が扁と接する。印面の輪郭線は縦が 2.9cm、完存例では幅は 2.95cm。刻印は丸瓦の広端側を下にして、凸面の玉縁近くの中央やや左寄りに押捺。丸瓦は凸面をナデ、凹面は不調整で布目が残る。側面はヘラケズリ。縦位繩叩き丸瓦の第 2 類にあたる。厚さ約 1.3cm。d (PL. 88-10, Fig. 38-2) は字体が c に類似するが、輪郭線がなく、印面も縦 2.2cm と小さい。刻印は丸瓦の広端側を下にして、凸面の玉縁近くの左端に押捺。丸瓦は凸面をナデ、凹面は不調整で布目が残る。玉縁凸面の側縁を面取りする。縦位繩叩き丸瓦の第 4 類にあたる。h (PL. 88-11, Fig. 38-3) は字体が細い点 a · b 種に似るが旁が異なる。印面の輪郭線は縦 2.85cm、横 2.8cm と大型である。刻印は丸瓦の玉縁側を下にして、凸面の玉縁近くの中央やや左寄りに押捺。丸瓦は凸面を縦方向にナデ、凹面は不調整で布目が残る。側面はヘラケズリし、内側に面取りを施す。縦位繩叩き丸瓦の第 4 類にあたる。厚さ約 1.76cm。

「理」 「理」は印面に文字を陰刻する。刻印「理」には a ~ j の 12 種があり、a · g · h · j が各 1 点出土。d は丸瓦、他は平瓦である。d は (PL. 88-12, Fig. 38-4) 旁が長く、扁とは下辺が不

1) 刻印瓦の分類は、奈良国立文化財研究所『基準資料 V』瓦編 3, 1977 による。

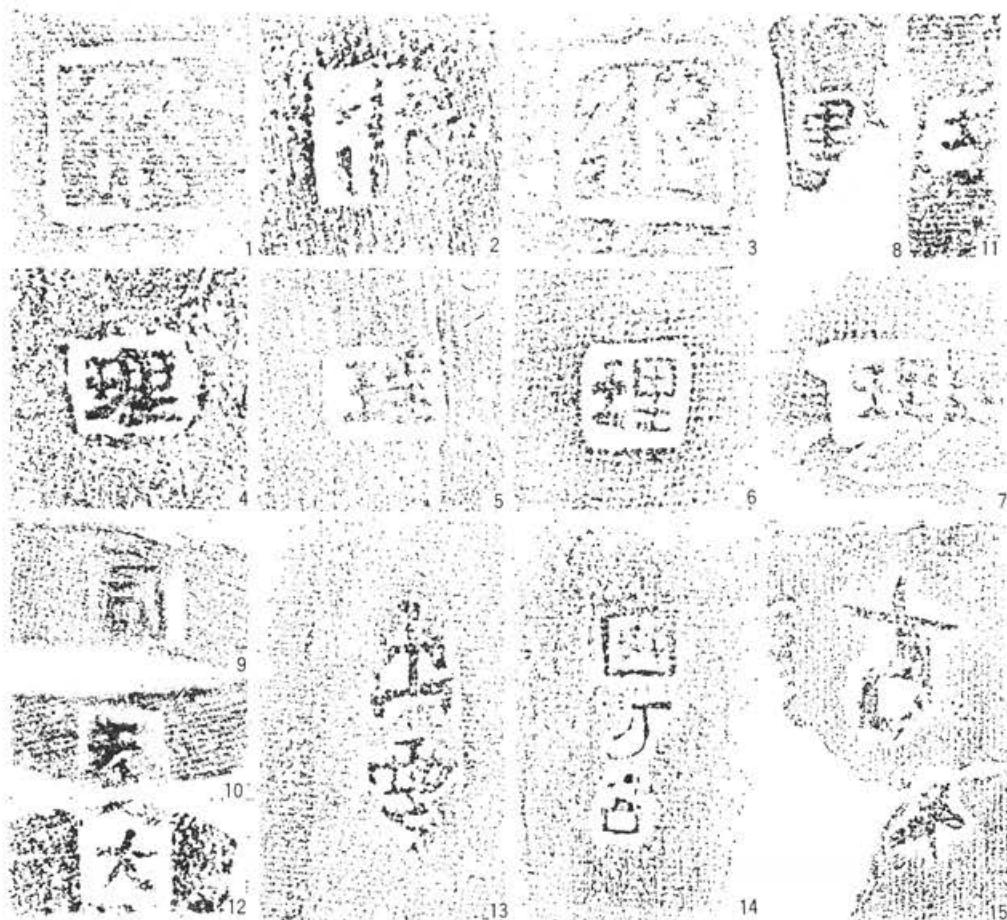


Fig. 38 刻印瓦拓影 (4:5)

揃いである。印面は縦 1.6cm、横 1.8cm。刻印は丸瓦の側面側を下にして、凸面の玉縁近くにやや斜めに押捺。丸瓦は凸面をナデるが方向が不明。凹面は不調整で布目が残る。側面はヘラケズリする。厚さ約 1.8cm。g (PL. 88-13, Fig. 38-5) は旁の上端が輪郭に接し、印面が縦 1.6cm、横 1.95cm。刻印は平瓦の広端側を下にして、凹面の狭端寄りの右側縁近くに押捺。平瓦の凸面は不調整で、縦位の繩叩き目が残る。3cmあたり 11 本。離れ砂が付着する。凹面の遺存状態がよくないが、刻印に布目が残ることから不調整と考えられ、側・端縁はヘラケズリする。次の h・j と同様に模骨痕のない平瓦の第 1 類 a₄ に相当。厚さ約 1.8cm。h (PL. 88-14, Fig. 38-9) は第 4 画が太い。印面は縦 1.8cm、横 1.85cm。刻印は平瓦の側面側を下にして、凹面の狭端寄りの隅近くに押捺。平瓦は凹凸面とも不調整で、凸面に縦位の細かい繩叩き目 (3cmあたり 12~13 本) と離れ砂、凹面に細かい布目 (3cmあたり 23 本×22 本) と凹型台上で叩きしめた無文叩き痕が残る。厚さ 1.9cm。模骨痕のない平瓦第 1 類 a₄ 種にあたる。j (PL. 88-15, Fig. 38-7) は文字が輪郭に対して右に傾き、印面が縦 1.7cm、横 1.9cm。刻印は平瓦の側面側を下にして、凹面の反対側の側面に押捺。平瓦のつくりは h と酷似するが、布目が 3cmあたり 17 本×22 本とやや粗い。厚さ約 1.8cm。

「里」は印面に文字を陰刻する。刻印「里」は a 1 種で、今回出土したものも a である。「理」「里」の旁であろう。a (PL. 88-16, Fig. 38-8) は第 7 画が太く湾曲し、輪郭が左上隅を除き隅丸である。印面は縦 1.25cm、横 1.25cm。刻印は平瓦の狭端面の中央に、側面側を下にして押捺。

平瓦は四面の狭端縁を幅1cmほど面取りするほかは不調整で、凸面に縦位の繩叩き目(3cmあたり13~14本)、凹面に布目(3cmあたり約17本×18本)が残る。また、凸面には少量の離れ砂が付着。厚さ約2.2cm。模骨痕のない平瓦第1類a₄種に相当するが、前述の「理」銘平瓦に比してやや厚手といえる。

〔司〕 「司」は印面に文字を陰刻する。刻印「司」にはa・bの2種があり、今回出土したものはすべてaにあたる。a(P.L. 88-17, Fig. 38-9)は第1画縦線の中央部がふくらみ、はねが小さい。また、第3画が第5画の下に出る。印面は縦1.4cm、横1.5cmとbより大。4点とも平瓦狭端面のほぼ中央部に押捺するが、2点は凸面側を上に、他の2点は凹面側を上にする。いずれも凹面の側・端縁をヘラケズリする他は凹凸面とも不調整のようで、凸面には縦位の繩叩き目と離れ砂が残る。模骨痕のない平瓦第1種にあたる。繩叩き目は3cmあたり7本と粗く、厚さ2.5cmと部厚い。この瓦は狭端面の一部に布目が残り、一枚作りの可能性を示す。他の3点は縦位の繩叩き目が3cmあたり14~15本と細かく、厚さ2.1cm前後である。いずれも胎土に少量の砂粒を含み、4点とも井戸S E7900付近で出土。

〔矢〕 「矢」は印面に文字を陰刻する。刻印「矢」にはa~eの3種があり、今回出土したものはすべてcにあたる。c(P.L. 88-18, Fig. 38-10)は印面が一辺1.35cmと最小で、第1画が第2画の下に出ず、第5画が分離する。3点とも平瓦狭端面のほぼ中央に凹面側を上にして押捺。平瓦は凹凸面とも不調整で、凸面には細かい縦位の繩叩き目(3cmあたり12本)と指圧痕が残り、凹面には布目と糸切り痕及び凹型台上で施した無文叩き痕が残る。また、凸面に離れ砂の付着するものもある。模骨痕のない平瓦の第1類a種にあたる。厚さ2.0~2.2cm。

〔土〕 「土」は印面に文字を陰刻する。刻印「土」はa1種のみで、今回出土したものもa。a(P.L. 88-19, Fig. 38-11)は第3画が太い。印面は縦1.2cm。平瓦の端面のほぼ中央に側面側を上にして押捺。平瓦は凹凸とも不調整で、縦位の繩叩き目(3cmあたり約9本)と布目が残る。厚さ約1.7cm。

初出の「大」 「大」は印面に文字を陰刻する。今回初出である(P.L. 88-20, Fig. 38-12)。印面は縦1.35cm、横1.4cm。刻印は丸瓦の広端面の中央に凸面側を上にして押捺。丸瓦は凸面を縦方向にナデ、凹面は広端寄りを幅2cmほど面取りする以外は不調整で、布目と糸切り痕が残る。側面はヘラケズリ。縦位繩叩き目丸瓦の第3類にあたる。厚さ約1.8cm。

「出雲」 「出雲」は細長い叩き板の上面に文字を陰刻し、これを平瓦凹面に叩きつけて押捺する(P.L. 88-21, Fig. 38-13)。押捺は平瓦の狭端側から行ない、文字は側縁近くのやや狭端寄りに残る。叩き板は文字のある面がやや蒲鉾状に盛り上る。幅2.6cm以上、長さ15.6cm以上。「出雲」は1種のみであり、同じ文字瓦は恭仁宮(平瓦B類)や東大寺法華堂から出土している。平瓦凸面は縦位の繩叩き(3cmあたり12~13本)のうち、狭端から約11.5cmの範囲を横方向にナデ、凹面は横方向にナデ調整し、狭端縁をやや幅広くヘラケズリする。模骨痕のある平瓦の第2類cもしくはd種にあたる。刻印の押捺は調整後である。熨斗瓦に転用。厚さ約2.9cm。

「國万呂」 「國万呂」は細長い叩き板の上面に文字を陰刻し、これを平瓦の凹面に叩きつけて押捺する(P.L. 88-22, Fig. 38-14)。押捺は平瓦の狭端側から行ない、文字は凹面のほぼ中央、広端近くに残る。叩き板は文字のある面がやや蒲鉾状に盛り上る。幅約3.4cm、長さ8.3cm以上。「國万呂」は1種のみで、下の2字が左に片寄る。平瓦部凸面の広端寄りは不調整で、細かい

縦位の繩叩き (3cmあたり約13本) が残るが、凹面は丁寧に横方向にナデ調整する。刻印の押捺は調整後。厚さ約1.9cm。この文字瓦は恭仁宮では出土していないが、調整方法などからみて、「出雲」とともに恭仁宮の造営に伴なって製作された瓦と推測される。

「古□」も細長い叩き板の上面に文字を陰刻し、これを平瓦の凹面に叩きつけて押捺する (PL. 88-23, Fig. 38-15)。押捺は平瓦の狭端側から行ない、文字は凹面の中央近くの広端寄りに残る。叩き板は文字のある面がやや蒲鉾状に盛り上る。幅約3.7cm、長さ10.6cm以上。「古□」は今回初出である。本例では古の第1画と第4画との間に大きな傷が生じている。平瓦凸面の広端寄りは不調整で縦位の繩叩き目 (3cmあたり11本) が残るが、凹面は横方向にナデ調整する。刻印の押捺は調整後。厚さ約2.2cm。叩き板に字体の異なる「古」を刻んだ文字瓦は恭仁宮・東大寺法華堂で出土しており、調整手法などから「古□」も恭仁宮の造営に伴う瓦と考えられる。

初出の「古□」

D 道具瓦と壇 (PL. 87・88)

道具瓦には鬼瓦・隅木蓋瓦・面戸瓦・熨斗瓦がある。

鬼瓦は計12点が出土した。いずれも平城宮式鬼瓦であり、内訳はI式Aが6点、III式Aが2点、新型式のVII式が1点、型式不明が3点である。¹⁾

I式はいわゆる鬼の全身をあらわす。鬼は顔を正面に向けて舌を出し、蹲踞する。腹部は半球形にあらわし、下頸には巻毛の鬚を配し、体にそって断面鋸歯状の巻毛をめぐらす。釘孔は腹部と眉間に穿つ。外縁は傾斜縁。大型のAと、小型のB1・B2の3種がある。A (PL. 87-1) は胸・腕の筋肉や関節を写実的にあらわし、体部の巻末は内側に幅広の傾斜面をつけるのが特徴。中央で上下に二分する大きな範傷のあるものが1点ある。復原高約39.5cm、復原幅約44.6cm、厚さ約6.1cm。I式Aのうち4点は東棲SB7600の北雨落溝とすぐ東の回廊暗渠付近から、他の2点は屏SA248の柱抜取穴及び6AAP区のKU08付近から出土。

III式は鬼面をあらわす。上下の歯牙をむきだすが、舌の表現を欠き、頭部に上から巻き込む巻毛、頸の左右に下から巻き込む大振りな巻毛を配するのが特徴。外縁は傾斜縁。平城宮では大型のAのみが出土しているが、奈良県菅原遺跡では小型のBが出土。²⁾ A (PL. 87-2) は全体に文様の彫りが深く、鼻梁に瘤をつくるのが特徴。額下と額上に一辺約1cmの方孔を穿つ。高さ約37.5cm、幅約32.2cm、厚さ約8.8cm。完形品は築地回廊の暗渠から破片1点は6AAP区のCP22付近から出土。

VII式 (PL. 87-3) は鬼面文鬼瓦の右上部の破片で詳細が明らかでないが、頭部に弧状の太い髪を表現する。この下の縦の凸線は額・眉から派生する髪であろう。鼻梁付近に円形の釘孔がある。外縁は傾斜縁のようである。6AAP区のMB25付近出土。

新型式の鬼瓦

隅木蓋瓦 (PL. 87-4) は破片が9点出土した。うち8点は東棲SB7600の北雨落溝とその周辺から、残る1点だけは正殿を囲む屏SA248とSA251の出隅の柱掘形から出土。中央部の厚さは2.6cm、2.9cm、3.1cmの3種があり、色調からみても少なくとも4個体になる。い

1) 鬼瓦の分類は、毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊、33~66、1980による。

2) 菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室『菅原遺跡』奈良大学平城京発掘調査報告書第1集、1982。

ずれも下面の前端と側縁の三方に額縁状の頸をつける型式で、後端は茅負にあたる部分を三角形に割り込んだいわゆる割形がある。頸は厚さ 0.8~1.0cm, 側縁幅約 6.0cm, 前端幅約 7.3cm で、下面中央には幅約 1.3cm, 深さ 0.3~0.4cm の水切り溝をつける。水切り溝は T 字状に連結し、水を前端に導くように工夫している。上面はほぼ平坦であるが、最も厚手の 1 点だけは側縁に向かってなだらかな傾斜をつける。S B7600 北雨落溝出土。割形の角度は約 85° で、上面にはいずれも幅 1.4~1.6cm, 厚さ 0.4cm の水切りの凸帯がつく。長さ 38.1cm, 幅 35.4cm (内幅約 24.0cm), 割形の深さ 17.7cm になる。

面戸瓦 面戸瓦は42点出土した。11点は丸瓦を焼成後に打ち欠いてつくったいわゆる割面戸であるが、他の32点はいずれも丸瓦製作後、生乾きの段階で面戸瓦に作りかえている。形態の判明するものはいずれも蟹面戸であり、登り面戸(鰐面戸)と確認できるものはない。蟹面戸は丸瓦の両角を大きく抉り込んで舌部を造り出す凸字状の I 式と、体部から舌部までなだらかなカーブをえがく半円状の II 式に大別できる。I 式は長大であり、丸瓦 1 本から面戸瓦 1 点を製作し、II 式は丸瓦 1 本から面戸瓦 2 点を製作したものと考えられる。棟積みに際しては、I 式は面戸の両端が丸瓦の上に乗るのに対して、II 式は丸瓦の頂部に及ばないことになる。

蟹面戸 I 式 今回出土した蟹面戸で I 式と推定できる破片は 4 点あり、調整の差異などから 3 種に区分できる。1 種には厚さ約 2.2cm の舌部の破片で、内縁に幅広く面取りを施す。部厚い瓦であり、藤原宮からの搬入品と考えられる。6 A A Q 区の B E 05 付近出土。他の 2 点も内縁にのみ面取りを施すが、面取りの幅が狭く舌部の下辺が直線的である点が異なる (P L. 88-1)。凹面は不調整で極めて細かな布目が、また、凸面には縦位の繩叩き目が一部に残る。S D 4740 出土。残る 1 点は舌部から体部にかけてのやや薄手の破片で、内・外縁に面取りを施す。6 A A Q 区 B G 05 付近出土。

蟹面戸 II 式 蟹面戸 II 式は調整の差異などから A・B 両種に区分できる。A (P L. 88-4) は内縁に浅い面取りを施し、縁を厚く残すもの。完形品もしくはそれに近いものが 2 点ある。とともに玉縁丸瓦の狭端部を利用したもので 1 点は凸面の段部を削る。縦位繩叩き丸瓦第 2 類と第 3 類とがあるが、前者は面戸瓦につくりかえるときに側面を削った可能性もある。完形品は全長 15.5cm, 幅 13.7cm, 厚さ 1.5cm。他に狭端部を利用した体部の破片が 4 点、体部から舌部の破片が 3 点ある。いずれも凹面は不調整で布目が残り、凸面はナデ仕上げするが、わずかに縦位の繩叩き目の残るものもある。S C 247 の西雨落溝から 1 点、S A 4630 の柱掘形及び柱穴などから 5 点出土。B (P L. 88-2・3) は内縁にのみ幅広い面取りを施して縁を極めて薄く仕上げるもの。体部と舌部の比較的大きな破片が各 1 点あり、他に体部と舌部の小片が各 3 点ある。全長 18.8cm。厚さは 1.3~1.7cm。凹凸面ともナデ仕上げするものが多いが、凹面に布目の残るもののが 2 点ある。東棟 S B 7600 の北雨落溝とその周辺から 5 点、S C 156 の西雨落溝から 2 点、S A 7888 の柱抜取穴から 1 点出土。

小型面戸 なお、小型丸瓦の狭端部を利用した面戸瓦と推定されるものが 1 点ある。6 A A P 区の L M 13 付近出土。厚さが 1cm 前後の舌部近くの破片 3 点もこの類であろう。S A 7888 の柱抜取穴とその周辺から出土。残余の面戸は舌部の破片が 7 点あるが形態は不明。いずれも内縁に浅い面取りを施す。

割面戸 丸瓦を焼成後に打ち欠いて面戸に転用したものは 11 点出土している。形態上は蟹面戸と推定

される。いずれも縦位繩叩きで、うち4点は丸瓦の第1類、1点は第2類を使用。他の6点は類別不明（PL. 88—5）。

熨斗瓦は平瓦を焼成前に半截もしくは切目を入れたした切熨斗瓦が5点あるが、他に平瓦を焼成後に縦に割って2分した熨斗瓦が隅数で1110点、555個体分ある。切熨斗瓦は3種に区分できる。1種（PL. 88—6）は狭端寄りの破片で、凹面と凸面を横方向にナデ調整し、半截した側面に破面を残す。凹面には布目と模骨痕がわずかに残る。模骨痕のある平瓦の第2類cかd種にあたろう。残存長15.6cm、幅10.8cm、厚さ2.8cm。SD7872出土。1種は（PL. 88—7）凹凸面とも不調整で、凸面には縦位の繩叩き目（3cmあたり11本）と離れ砂、凹面には布目（3cmあたり21本×25本）と側・端縁に布端が残る。凹面の端縁と側・端面はヘラケズリする。一枚作りの平瓦を半截したもので、模骨痕のない平瓦の第1類a₂種にあたる。残存長19.3cm、幅15.7cm、厚さ1.6cm。6AAPBC03付近出土。残りの1種（PL. 88—8）は凹凸面とも不調整で、凸面に縦位の繩叩き目（3cmあたり9本）、凹面に細かい布目（3cmあたり約32本×約28本）と糸切り痕を残す。模骨痕はない。半截した側面はヘラケズリする。模骨痕のない平瓦の第1類a₄種にあたる。残存長18.9cm、幅13.9cm、厚さ1.5cm。6AAP区LN09付近出土。また、繩叩き目が3cmあたり約11本、布目が3cmあたり約18本×約22本のものが2点ある。1点は残存長15.3cm、幅14.9cm、厚さ約2.3cm。6AAP区BD04付近出土。他の1点は残存長11.9cm、幅11.2cm、厚さ1.7cm。6AAP区ME23付近出土。

割って熨斗瓦に転用したと考えられるものは、前述したように隅数計算で1110点、約550個体分ある。多くを占めるのは模骨痕のある縦位繩叩き目平瓦の第2類c・d種であり、SD7872からまとまって出土した。平瓦の記述と重複するので、ここでは完形品を中心に概略を記す。完形もしくは完形に近いものは20点ある。このうち模骨痕のあるものは13点である。いずれも凸面の繩叩き目が縦位であり、第1類b種が1点（PL. 84—2）、同d種が1点、第2類c種1点（PL. 85—6）、同d種が8点（PL. 84—8）である。破片では第2類a・c種も少量だがある。模骨痕のないもので完形に近いものは7点ある。いずれも凸面の繩叩き目は縦位であり、第1類d₂種が1点、同d₄種が3点（PL. 85—14）、第3類a₂種が1点、同d₃種が1点（PL. 86—19）、同d₄種が1点である。破片では縦位繩叩き目の第1類a₁種、a₂種（PL. 85—10）、a₃種、a₄種（PL. 85—12）、d₅種も少量だがある。

埠は文字埠が1点、無文埠が隅数で810点、約101個体分出土した。

文字埠（PL. 87—5）は長方形の埠で、一面を平坦、他面を断面U字状につくる。調整は各面とも縦方向のヘラケズリ。側面には「匱」（備）と範書きする。上は欠損し、文字があったか否か不明。同じ形態の文字埠は内裏周辺の官衙や推定第二次大極殿地区（第132次調査）で出土している。残存長19.1cm、幅11.55cm、厚さ6.7cm。内裏内郭内東隅部で出土。¹⁾

無文埠はいずれも長方形で、型枠状のものに粘土塊を詰め込んで作り、外面を荒いナデもししくはケズリで仕上げる。完形品が29点あり、長さあるいは幅の判明するものが他に15点ある。完形品のうち28点は似た寸法で、長さは29.0～29.9cm、幅は14.6～16.4cm、厚さ7.6～8.4cmである（PL. 87—7）。この他には、長さ29.8cm、幅17.5cm、厚さ7.8cmとやや幅広のもの（PL. 87—8）、幅は不明だが、長さ31.3cm、厚さ7.6cmのやや長手のもの、厚さが4.9cmと

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VII』1976, p. 74.

熨斗瓦

薄いものが各 1 点ある。壇はほとんどが 6 AAQ 区から出土した。分布は 6 AAQ 区のほぼ全域に広がるが、Ⅳ期に廃絶する SD4872 の南半部、Ⅶ期に造営される SB4704 の柱掘形では完形品を含めて、幾分まとまった量が出土。内裏で壇がどのように使用されたのか必ずしも明らかではないが、Ⅱ期の壇 SA7865・7887 の門部分には蹴放の地覆に壇が用いられている。あるいは溝の側石などに使用されたものもあったのかもしれない。

E 平安時代以降の軒瓦 (Fig. 39)

平安時代以降の軒丸瓦が 3 点、軒平瓦が 4 点出土した。内訳は、寺銘軒丸瓦が 2 点、巴文軒丸瓦が 1 点、宝相華唐草文軒平瓦が 1 点、菊花唐草文軒平瓦が 1 点、その他の均整唐草文軒平瓦が 2 点である。

i 軒 丸 瓦

寺銘軒丸瓦 寺銘軒丸瓦は外区に比較的大粒の珠文を密にめぐらす。そのうちの 1 点(2)は上から右回りに「興福寺」と入れ、中心に菊花状の刻印を押す。興福寺に同範品があり、鎌倉時代中期頃に比定されている¹⁾。他の 1 点(1)は中央に縦に「超昇寺」^{寺カ}(超昇寺)、右と左に「本」「屋」と入る。年代は鎌倉時代後半もしくは室町時代に入ろう。成形方法はともに接合式である。

巴文軒丸瓦 巴文軒丸瓦は小片のため詳細が不明だが、巴頭は比較的大きく、尾の巻きが長い。珠文はない。酷似したものが興福寺にあり、大きさは鎌倉時代に比定されているが、ごく初期のものであろう。成形方法は接合式である。

ii 軒 平 瓦

宝相華唐草文軒平 (4) は右端部の破片で、興福寺に類似品がある。それによると中心に大きく開いた 4 弁の花弁をおき、左右に茎を 2 回反転させてそれぞれに横向きの花弁を配する。平安時代末頃に比定されている³⁾。内・外区を分ける界線ではなく、外縁は 1 段で、幅が広い。顎は幅の広い曲線顎で、横方向にナデて仕上げる。平瓦部凹面は瓦当近くを横方向にヘラケズリし、以下は布目と斜行する糸切り痕が残る。

菊花唐草文 菊花唐草文軒平瓦(5)は小片で、中心に丸味のある 5 弁の菊花形を飾る。左右には唐草が反転するのである。内区と外区を分ける界線は下方にあるが上方はない。また、顎は割顎

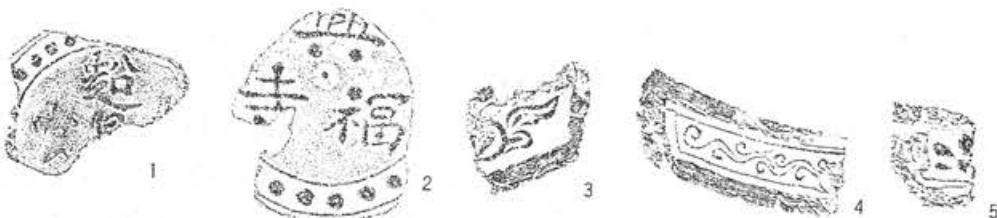


Fig. 39 中・近世の軒瓦拓影 (1:4)

1) 奈良国立文化財研究所『興福寺食堂址の調

別表 1。

査』奈良国立文化財研究所学報第 7 冊, 1959, pp. 18・19, PL. 29—87。

3) 『興福寺食堂址の調査』1959, p. 18, PL. 28—70。

2) 『興福寺食堂址の調査』1959, PL. 30—96,

で幅が極端に狭い。これらの点から、時代は室町時代末になろう。調整は頸部及び平瓦部凹面の瓦当近くを横方向にナデて仕上げる。なお、瓦当面には離れ砂が付着する。

その他の軒平瓦のうち1点(4)は、中心飾りが今一つ明瞭でないが、6回反転の均整唐草文軒平瓦である。唐草は主葉のみで支葉がない。復原瓦当幅約22.5cmと小型。内区と外・脇区は界線で画すが、珠文はめぐらさない。外縁は1段。頸は割頸であるが、幅が広く堅固なつくりである。これらの点からみて年代は鎌倉時代末もしくは室町時代初頃になろう。調整は平瓦部凸面を縦方向にナデたのち、頸部を横方向にナデる。凹面は瓦当近くを横方向にヘラケズリするが、以下は不調整で細かい布目が残る。なお、平瓦部凸面の頸近くには調整に用いた凹型台のあたりが残る。7は宝珠唐草文もしくは菊花唐草文軒平瓦と考えられる右端部の小片である。内・外区を分ける界線はなく外縁は1段で、右上に菊花形の刻印を押捺する。頸は幅の狭い割頸。年代は室町時代後半になろう。

iii 超昇寺について

今回出土した「超昇寺」銘軒丸瓦は、平城宮内裏地区の北方約300mのあたり比定される超昇寺¹⁾の所用瓦であり、土砂等の運搬とともに移動したものと推測される。

超昇寺は平城天皇の第3皇子である眞如法親王(高岳親王)の発願といい、正史には『三代実録』貞觀2年(860)10月条に「大和國平城京中水田五十五町四反二百八十八歩施捨²⁾不退、超昇両寺」³⁾とあるのが初見である。永延年間(987—988)には興福寺住僧の清海上人による法華三昧堂の建立もあるが、治承四年(1180)には平重衡の東大寺焼打ちに際して本寺も焼亡する。治承六年には中御門家忠によって再建されたが、『大乘院寺社雜事記』の記事によると、長禄3年(1459)4月に本堂・塔坊が焼失したこと、また、少なくともこの時期までに興福寺の門下に入っていたことなどがわかる。その後も寺運は続いたようであるが、天正6年(1578)に井戸若狭守の兵火に罹って頽廃した。なお、平城宮内裏地区の西北方には、徳川5代將軍綱吉のときに隆光僧正が建立したという超昇寺が明治十年頃まで存在していた。⁴⁾

「超昇寺本堂」銘軒丸瓦は、年代が鎌倉時代後半もしくは室町時代と考えられ、少なくともこの時期に超昇寺本堂の造営もしくは大規模な修造が行なわれたことを示す。超昇寺旧地からはかって「建長二年超昇寺庚戌四月」銘軒平瓦が出土しているが、今回出土した「超昇寺本堂」銘軒丸瓦は書体が新しく、建長2(1250)年以後に位置づけうる。超昇寺本堂は前述したように長禄3年(1459)に塔坊とともに焼亡しており、「超昇寺本堂」銘軒丸瓦はこの焼亡後の造営に用いられたのかもしれない。

他の軒瓦も本来超昇寺で用いされていた可能性が強い。そのうち平安時代末の宝相華文軒平瓦、鎌倉時代の巴文軒丸瓦及び「興福寺」銘軒丸瓦は興福寺と同範もしくは酷似したものである。超昇寺と興福寺との関係は古く永延年間(987~988)に遡り、少なくとも長禄3年(1459)までは継続していたものとみられ、上記の軒瓦の存在はこの間ににおける両寺の密接なつながりを裏付けるものといえよう。

1) 溝辺文和「超昇寺考」「奈良県觀光」第48号,
1960, 「超昇寺再考」「奈良文化論叢」1967(ともに『平城宮跡照映』1973所収)

2) 『建久御巡禮記』

3) 『諸寺縁起集』

4) 溝辺文和「超昇寺再考」「奈良文化論叢」1967, p. 865.

5) 4) 論文 pp. 869・870。

2 土 器

今回の報告は、内裏の約2分の1（面積17700m²）の調査成果をもとに行なうわけであるが、面積が広大な割には土器の出土量は極めて少ない。出土土器には土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・縁釉陶器・灰釉陶器があり、他に土馬・硯等の土製品、内裏建設に伴って破壊された市庭古墳と神明野古墳に帰属する埴輪類がある。

土器は内裏内に配された溝・暗渠・建物の柱穴・井戸・土壙から出土しているが、いずれも小量で破片が多く、時期的なまとまりや一括性に欠ける。土器は各時期にわたるが、量的に多いのは、宮廄絶時に溝に廃棄された奈良時代末期の土器と平城上皇の遷都以後に使われた平安時代前期の土器である。それ以前の土器は、内裏内が常に清掃されていたために、きわめて微量で、内裏の改作時にたまたま柱穴や土壙等に残されたものである。ここでは比較的量が多く、奈良時代末葉の土器形式を代表する溝出土土器を先ず述べ、次に内裏改作時期を反映する建物、土壙出土土器の順で報告する。土器の説明に際しては、『平城宮発掘報告書VII』・『同XI』に従って記述する。

A 内裏内溝出土の土器

i S D 7870出土土器 (P.L. 102—1~44)

Ⅲ期の改作に伴って作られた溝で、その後の改作に伴い若干流路を変更するが、V期まで存続する。内裏東北方、S B8000の直ぐ南にある東西溝で、東築地回廊の部分は暗渠となり東大溝S D2700に注ぐ。西は東西棟S B4783の手前で南に折れ、御在所の東垣S A7876の東側の雨落溝を兼ねる。土器の出土量は少なく、完形もしくはそれに近いものは極めて少ない。時期的には平城宮土器Ⅱ～Vまでのものが含まれる。

土 师 器 土師器の器種には、杯A・杯B蓋・杯C・皿A・皿C・椀A・椀C・高杯等がある。I群土器の杯Aには、a₀手法で調整し、内面に二段暗文（螺旋暗文+斜放射暗文）を持つ杯AI(1・3)，a₀手法で調整し、暗文がない杯AI(2)，a₀手法で調整する杯AIII(15)がある。15は内面の器表が剥落し、暗文の有無は不明であり、灯火器として使用。1・3・15は平城宮土器IIIに、2はIVに属す。

II群土器の杯AIには、C₀手法によるもの(4)，C₁手法によるもの(5)があり、前者は平城宮土器IVに、後者はVに属す。

杯BI蓋(18)は、頂部を四方向に、縁部は5回に分け横方向のヘラミガキ調整を施す。平城宮土器IV～VでII群土器。

皿AI(6～8)・皿AII(12)は、いづれもII群土器で、6はb₀手法で調整し、内面に二段暗文を持つ。7・8・12はC₀手法で調整。6は平城宮土器III、他はVに属す。皿C(13・14)は、口縁部のみをヨコナデ調整し、以下の部位は不調整。I群土器に近い胎土組成を示す。

椀AにはC₀手法で、口径12.5cm、器高4cm前後の椀AI(10・16)，口径11cm前後、器高3.5cm程度の椀AII(17)があり、平城宮土器Vに属すII群土器。椀には、この他、長岡京か

ら普遍的に出土し、「椀C」と呼ばれているe手法の椀A I (9)がありI群土器に近い組成を持つ。平城宮土器Vに属す。

高杯(19)は、杯部径が30cmを超える大型品で、脚部を欠損するが、高い脚柱部が付く型式で、平城宮土器Vに属すII群土器。杯部外面をヘラケズリの後、横方向のヘラミガキを施す。

須恵器の器種には、杯A・杯B・杯B蓋・皿B・皿B蓋・皿C・壺E・鉢D等がある。杯A 須恵器には、口径11cm、器高3.2cmの杯A III (29)、口径13.4cm、器高4cm程度の杯A II (30)があり、いずれも底部外面不調整。生駒産か。杯Bは法量により、杯B I (31~34)、杯B III (40・41)・杯B IV (35~39)の3種に分かれる。杯B I のうち33・34は底部ロクロケズリ調整。31・32は底部不調整。いずれもI群土器で平城宮土器IV~V。杯B III (40・41)は、底部不調整で平城宮土器IV~V。杯B IV は、いずれも口径10.5cm未満、器高4cm程度の小型品で、平城宮土器Vに属す。底部外面不調整のもの(35・36・38)・ロクロナデ調整によるもの(39)、ナデ調整によるもの(37)がある。生駒産か。杯B I 蓋には、頂部が高く、縁部がわずかに屈曲するもの(24)、扁平で平坦な頂部に屈曲する縁部が付くもの(25)がある。前者は平城宮土器III~IVのI群土器、後者はVに属す。生駒産か。杯B II 蓋には、A形態の縁部を持つもの(20・21)、B形態の縁部を持つもの(22)がある。いずれも頂部外面はロクロナデ調整。前者はI群土器、後者は産地不明。杯B III 蓋(23)は頂部外面ロクロナデ調整。生駒産か。皿B I (27)は、底部外面ロクロケズリ調整。皿B II 蓋(26)は、頂部ロクロケズリ調整。いずれもII群土器で平城宮土器IV~V。皿C I (28)は、底部外面をナデ調整するI群土器。鉢D (44)は、平底で外傾気味に立ち上がり、上部が内湾する体部に直立する口縁部が付く。粘土紐巻き上げ、ロクロ調整法で作られ、底部外面不調整。焼きが甘く灰白色を呈する。I群土器か。壺E (42・43)は、体部が外傾し、狭い肩に小さな口縁部が付く。底部外面ヘラ切りのまま不調整で、平城宮土器Vに属す。

ii S D 7872出土土器 (P L. 103—61~80)

III期の改作に伴って設けられた溝でIV期まで存続する。S D 7870の東寄り部分からS B 7874 Bに向かって斜行し、同建物の西北妻柱付近まで東西に流れ、更にS A 7876の雨落溝に向って斜行する。土器の全体量は少なく、しかも細片が多数を占め、図示可能なものは、すべて図版に掲げた。時期的には平城宮土器III~Vまでのものを含み、S D 7870やS K 7099出土品と接合するものが多い。

土師器の器種には、杯A、杯C、鉢X、甕等の破片がある。杯A I (78)・杯C (79)は、a₀手 土 師 器 法で調整するI群土器。平城宮土器V。鉢E (80)はb₀手法で調整する。産地不明。

須恵器の器種には、杯B・杯B蓋・壺X・甕C等がある。杯B I (66)は底部不調整のI群土器。杯B II (67・68)は口縁部の外傾度が低い形態でIII群土器に属す。67は底部ロクロナデ調整。いずれも平城宮土器III~IVの特徴を持つ。杯B III (75)・杯B IV (70・71)は底部不調整のI群土器で平城宮土器V。杯B IV (69)は他に較べ法量がやや大きく、高台も底部内側寄りに取りつき、古い形態をとどめる。I群土器で平城宮土器IIIに属す。71は灯火器として使用する。

杯B I 蓋(61~65)、いずれも頂部外面ロクロケズリ調整、62はI群、63・64はII群、61はIII群土器に属す。65は産地不明であるが法量、形態の上で平城宮土器IIIに属す。杯B III 蓋(74)、杯B IV 蓋(73)は、頂部外面ロクロナデ調整、杯B IV 蓋(72)はロクロケズリの後ロクロナデ調整。

73・74は平城宮土器Vに、72はIII～IVに属す。72・74はI群土器、73は産地不明で、内面には朱を磨った痕跡をとどめる。

甕C(76)は平底の広口形態で粘土紐巻き上げロクロ成形による。I群土器で平城宮土器IIIに属す。壺X(77)は、平底と球形の体部に直立する口縁部がつく。口縁部内面下端に突帯をめぐらせ蓋受けとした珍しい形態で、体部上半部に2条1組の沈線が3段にめぐる。外面は暗灰青色ないし褐色を帯びる灰青色に発色し、断面は暗紫色を呈す。肉眼観察の上ではII群に近い胎土組織を持つが、形態的には、壺A系列とみるより、朝鮮半島の短頸壺の系列を引くものと考えられよう。¹⁾ 体部下半から底部にかけての外面はロクロケズリ調整で、体部は更にロクロナデを施す。前述したSD7870やI期に属す掘立柱建物SB7864の掘形からも接合する破片が出土している。従って所属時期については、8世紀初頃もしくはそれ以前の可能性が高い。器形から推して、本来蔵骨器として埋納されていたものが造営工事により破壊され、破片となり四散した可能性も考えられよう。

iii SD4752出土土器 (PL. 103—45～49)

V期に属す溝。御在所東北方、SB4770Aの南にある東西溝でSD7870に取りつく。土器の出土量はきわめて少なく、器形判別可能なものは図示したものがすべてである。土師器杯AI(48)はII群土器でC₃手法で調整する。杯BI(45)はC₁手法、皿AII(47)はC₀手法で調整するII群土器。皿C(46)はe手法で調整するI群土器。須恵器壺G(49)は、体部上半部を欠損するが、水挽き成形の長頸壺で、底部外面不調整で糸切り痕が残る。いずれも平城宮土器Vに属す。

iv SD4743・SD4747出土土器 (PL. 103—50～54・55)

IV期の御在所正殿SB4704の北にある互いに連結する同時期の南北溝と東西溝で小量の土器類が出土している。南北溝SD4743からは、土師器杯AIII(50)、黒色土器の皿B(51)、須恵器施釉陶器模倣土器杯BI蓋(52)・杯BIII蓋(54)が出土している。杯AIII(50)はC₀手法のII群土器。皿B(51)は施釉陶器を写した器形で、口縁部内面ヨコ方向へラミガキ調整。小片で暗文の有無は不明。須恵器杯BI蓋(52)、BIII蓋(53)は頂部外面不調整、杯BIV(54)は底部ロクロナデ調整。いずれも産地不明で平城宮土器VIに属す。東西溝SD4747からは、土師器の杯BI(55)が出土した。II群土器で径高指数が高く、器壁も厚く、C₁手法で調整する。平城宮土器VIに属す。

v SD4745出土土器 (PL. 103—56・57)

内裏I期の東西棟SB4775の南を流れる東西溝で、須恵器杯AII・杯BI蓋等が出土した。杯AI(57)は底部から口縁部下端部をロクロケズリするII群土器で、口縁部内外面に火燐痕をとどめる。杯BI蓋(56)は頂部外面ロクロケズリで調整するI群土器。いずれも平城宮土器IIに属す。

vi SD4730出土土器 (PL. 103—58～60)

御在所のほぼ中央にある東西溝でI期以降、V期まで存続する。土師器の皿AI(58)、須恵

1) 藤沢一夫氏から資料の提供と貴重な御教示をえた。

器壺M(60), 灰釉陶器椀(59)等の破片が出土している。皿AI(58)はC₀手法で調整するII群土器。壺M(60)は、口縁部まで一気に水挽き成形したもので、糸で切り放したまま調整しない。体部外面には、焼成前に施されたヘラ描き沈線文がある。灰釉椀(59)は断面方形を呈する低短な高台を付す。釉は刷毛塗りにより、見込み部分は無釉。底部外面ロクロケズリ調整。尾張猿投窯産。皿AIは平城宮土器IVに、他は9世紀前半代に比定できる。

vii SD 4810出土土器 (P.L. 105—145~162)

内裏III期、中央北辺の東西棟建物S B064の南庇付近を流れる東西溝でIV期まで存続する。

土師器の器種には杯A・杯C・皿A・椀A等がある。杯A(145)はa₀手法で調整するが、暗 土 師 器 文の有無不明。皿AI(146)もa₀手法で調整。両者ともにI群土器で平城宮土器III~IVに属す。もう一つの皿AI(147)は、C₀手法で調整するII群系統の土器で、平城宮土器Vに属す。混入品か。椀AI(148)、平底と内湾する口縁部からなる大型品でa₁手法で調整するI群土器。平城宮土器IIIに属す。他に平城宮土器Vに属す杯AIの破片も出土している。

須恵器の器種には、杯A・杯B・杯B蓋・皿B・盤A等がある。杯AI-2(149)、杯AI(159)は I群土器で底部外面不調整。149の外面には火禪痕をとどめる。杯BI(158)・杯BIII(156)は底部外面ロクロナデ調整のI群土器で平城宮土器IV~Vに属す。杯BII(157)底部外面ロクロケズリの後、ロクロナデ調整を施すI群土器で平城宮土器IIIに属す。杯BI蓋(154・155)はA形態の口縁部形態で、頂部外面はロクロケズリの後、ロクロナデ調整。I群土器で平城宮土器III~Vに属す。杯BII蓋(153)は平坦な頂部と屈曲のない縁部からなり、頂部外面ロクロケズリの後、ロクロナデ調整。灰色の胎で高温で焼成され、頂部外面には全面に自然釉が降着する。産地不明。杯BIII蓋(150~152)のうち、150・151は頂部ロクロナデ調整、152はロクロケズリ調整。いずれもI群土器で平城宮土器III~Vに属す。皿BIには、口縁部が外反気味に外傾するもの(160)と、やや内湾気味に立ち上がるものの(161)がある。いずれも焼きが甘く灰白色に発色するが、I群に属す。平城宮土器III~V。盤A(162)は、平底と大きく外傾する口縁部からなる。口縁端部は外傾する面をなす。底部周縁部をロクロ回転を利用しないヘラケズリで調整する。I群土器で平城宮土器Vに属す。

viii 東面築地回廊 S C 156西側雨落溝出土土器 (P.L. 104—81~123)

S C 156の西側雨落溝からは、平城宮土器IV~VIIに属す土器類が出土したが、VIIに属すものが大半を占め、平城上皇期にもこの溝が使用されていたことを物語る。

土師器の器種には杯A・杯B・皿A・壺B・甕A等があり、杯AI(81)・杯BI(92)・壺B(98)が平城宮土器IV~Vであり、他はVIIに属す。

杯AI(81)は、C₀手法で調整するII群土器。杯BI(92)は、口径が大きい割に底部が狭く、口縁部の外傾度はさほど高くない形式で、口縁部はヘラケズリの後、6回に分けてヘラミガキ調整を施す。I群土器。壺B(98)は、人面を描くために作られた壺と形態・製作技法が一致する。粘土紐を巻き上げ、上方にのばしながら鉢形の器形を作り、強いヨコナデで外反する口縁部を作り出す。体部には調整を加えず、粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。

以下に述べる平城宮土器VIIに属す土師器の1群は、次のような点で先に報告したVIIの基準資

平城宮土器 **VII** 料 S E311B よりも古い様相を持ち¹⁾、先に報告した第一次大極殿地区の S B8224 柱掘形出土土器等と同一形式とみられる。第一に S E311B のそれに較べ、杯・皿類の底部は平坦で広く、口縁部の外傾度も小さく、内湾気味に立ち上がり、奈良時代の形態をとどめている点。第二に、杯・皿類においては、ヨコナデによる口縁部のくぼみをヘラで削ってなめらかな縁部を作り出す点。第三に e 手法によるものがまったくない点を根拠とする。

3段ナデ調整 杯 A I (82)、杯 A II (83~86)、杯 A III (88~90) は C_o 手法で調整する II 群土器。杯 A III (87) は口縁部を低位から上位に順に 3 回にわたりヨコナデを加える f 手法による調整(3段ナデ調整)による。底部は不調整であるが木の葉痕をとどめない。C_o 手法のそれに較べ、砂粒が少なく I 群系統に属す。

皿 A I (93~97) は口径 15.8~16.8cm、器高 2.0~2.5cm で、II 群土器で C_o 手法によるもの (93~95) と I 群で f 手法によるもの (96~97) の両種がある。

叩き成形の甕 甕 A (120) は外反する短い口縁部と球形の体部からなる。外面には平行叩き目が、内面には刻み目等の文様はないが、当板痕跡と見られる半円形のくぼみが残る。長胴甕 (122・123) も同じく粘土紐巻き上げ後、叩きで成形するもので、外面には木埋木目痕をとどめないが、叩きの痕跡と見られる重複する小さな平坦面が、また内面には半円~円形に形状のくぼみ(当具痕跡)をとどめる。河原石など角のない石(卵石)を当具として使用したのであろう。

須恵器 須恵器の器種には、杯 A・杯 B・杯 B 盖・皿 B・皿 C・壺 M・甕 等がある。確実に奈良時代(平城宮土器 V)に属するものは、杯 A III (100)、杯 B I (114) 皿 C I (118) の 3 点のみで、他は、先に報告した平城上皇時代の塵芥処理穴 S K238 出土のそれと一致する。³⁾ 杯 A III (100) は、底部ロクロケズリ調整。産地不明。杯 B I (114) は、底部外面不調整の I 群土器。皿 C I (118) 底部外面不調整で焼きが甘く灰白色を呈す。産地不明。

平城宮土器 VII に属する 1 群は、I ~ IV 群のいずれにも属さず、いくつかの群に分かれるが、資料の量は少なく、それらの群別は今後の課題としたい。杯 A II (99~101)、杯 A III (107)、杯 B IV (104~106) は底部不調整。杯 B II 盖 (109・110) は、いずれも扁平で縁部が屈曲し、ボタン状のつまみを持つ。两者ともに頂部外面ロクロナデ調整。他の杯 B II 盖 (111) は比較的器高が高く、頂部が丸みを有し、ゆるやかに縁部に至る形態で、頂部外面ロクロケズリの後ロクロナデ調整。杯 B III 盖 (112・113) も扁平で縁部が屈曲する形態で、112 は頂部外面ロクロナデ調整。113 はロクロケズリの後、ロクロナデ調整。皿 B (115) は、口縁部が内湾気味に外方に大きく開き、端部近辺が外反する浅い杯部に比較的高い直立する高台を付す形態で、皿部内外面に横方向のヘラミガキを施す。皿 C I (116・117) は底部不調整。皿 C II (102) は底部ロクロケズリ調整。甕 X (121) は粘土紐巻き上げ、ロクロ調整手法による成形で、全体をロクロナデ調整を施す。肩の一部外面にはヘラケズリの痕跡をとどめる。壺 M (119) は、底部糸切りのまま不調整。

ix 南面回廊 S C 640 北側雨落溝・東棲 S B 7600 雨落溝出土土器 (Fig. 40—252~276)

S C 640 の北側雨落溝と東棲 7600 の雨落溝は一連のもので一括して扱う。出土土器は平城宮土器 IV ~ VII までのものを含み、その多くは平城宮土器 VII の古殿階に属す。

1) 奈文研『発掘報告』IV』1966 PL. 38

2) 奈文研『発掘報告』XI』1982 PL. 133

3) 奈文研『発掘報告』V』1966 PL. 40

土師器の器種には、杯A・皿A・椀A・椀C・高杯等がある。奈良時代（平城宮土器V）に属するものには、以下の器種がある。皿A I (256), 皿A II (254) 椭A II (260) は C₀ 手法のⅡ群土器。杯C (252), 皿A I (253) は b₀ 手法のⅠ群土器。椀C (262) は e 手法で調整する。灯火器。

土師器・黒色土器

平城宮土器VIに属するものには、杯A III (257~259)・皿A I (255) は C₀ 手法で調整するⅡ群系の土器。杯A III (261) は3段ヨコナデ調整 (f手法) による产地不明の土器。黒色土器も平城宮土器VIに属し、杯A・皿B・甕A等がある。杯A (264) は、C₁ 手法で調整し、口縁部内面にヨコ方向のヘラミガキを密に施し、草花文の暗文をあしらう。皿B (265) は施釉陶器の皿の写しで、断面三角形の高台を付す平底と端部が外反する浅い皿部からなる。C₁ 手法で調整し、

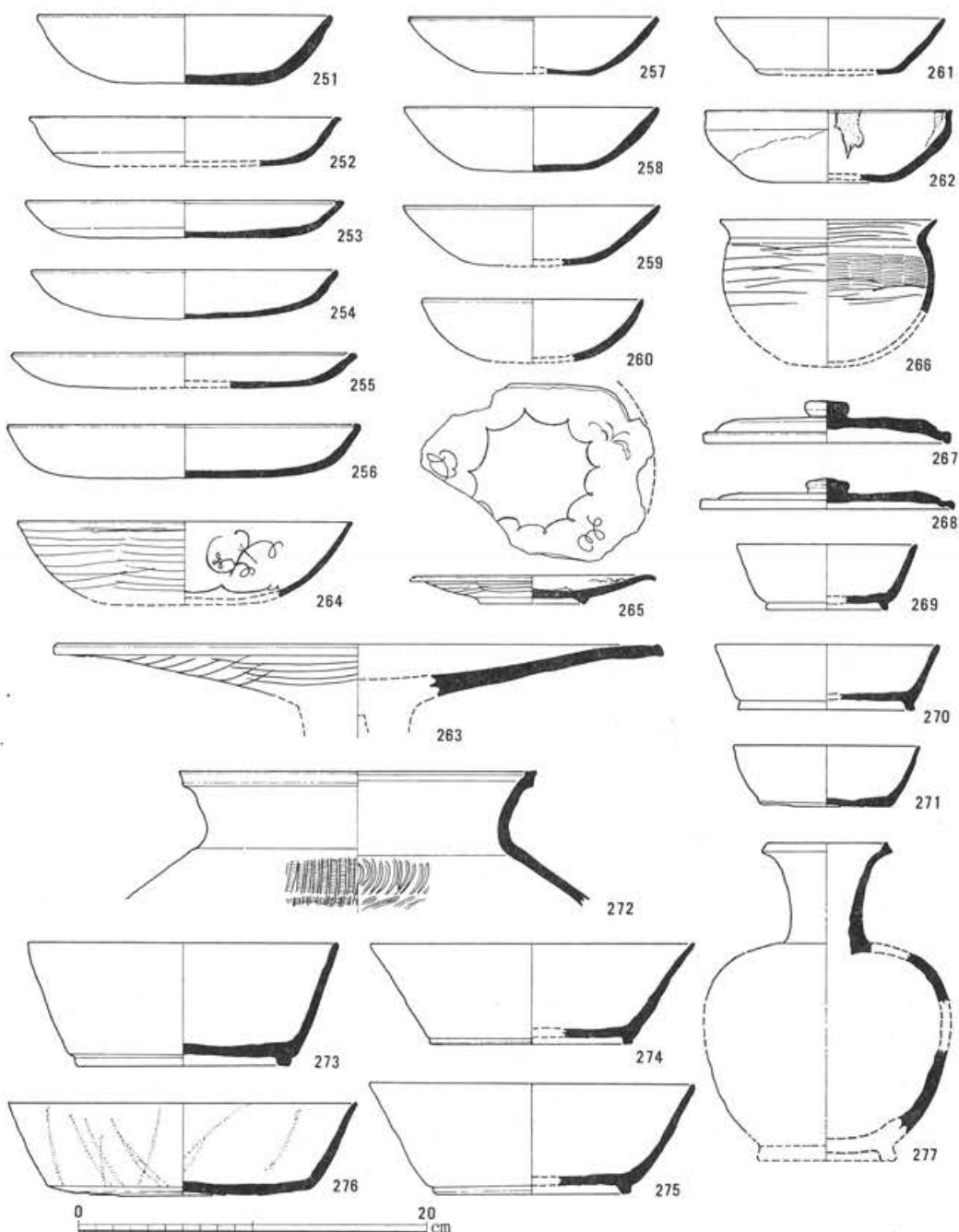


Fig. 40 内裏内溝出土土器 (S C 640・S B 7600雨落溝)

内面ヘラミガキの後、口縁部内面の四箇所に草花文ないし螺旋文を、底部との境付近に連弧文をあしらう。甕A(266)は、球形の体部に外反する口縁部が付く小型品で、体部外面及び、内面全面にわたってヘラミガキを施す。

須恵器 須恵器には杯B・杯B蓋・甕等があるが、奈良時代に属するものは、杯AI(276)、杯BIV(269)のみで、他は平城宮土器Ⅶに属す。杯AI(276)は、底部不調整で口縁部内外面に火襷痕をとどめるI群土器。平城宮土器Ⅲ～Ⅳ。杯AV(271)は底部不調整。杯BI(273～275)は、いずれも底部周縁部に低短な方形の高台を付す形態で、274は底部クロナデ調整で他は不調整。杯BIII(270)も杯BIと同様な高台を付し、底部外面不調整。杯BIV(269)は、断面略三角形を呈する高台を付す。底部不調整のI群土器で平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属す。甕B(272)、口縁端部が上部に立ち上がる形態で端部はほぼ水平面をなす。美濃産。

x 井戸S E7900排水溝S D2350出土土器 (P.L. 105—133～144)

S D2350は井戸S E7900の四周の水を集め内裏外に排水する暗渠でⅡ期からⅤ期まで存続する。出土量は少なく、時期的にも宮廃絶以降のものに限られる。

土師器の器種には、杯C・皿AI・椀AII・高杯・盤B等がある。杯C(134)はa₀手法のI群土器。皿AI(135)はC₀手法のII群土器。椀AI(133)はC₃手法のI群土器。盤B(144)は口径35.8cm、器高9.2cmの大型品でC₁手法で調整するII群土器。

須恵器の器種には杯A・杯B・杯B蓋・皿B等がある。杯AI(139)は底部外面不調整のI群土器。杯BII(140)は底部外面ロクロナデ調整で、杯BIII(142)は底部ナデ調整。いずれも产地不明。杯BIII蓋(136)は頂部外面ロクロケズリの後、ロクロナデ調整。杯BII蓋(137・138)は頂部ロクロナデ調整。皿BI蓋(143)頂部ロクロナデ調整。产地不明。

B 土壙・井戸出土土器

i 土壙S K7909出土土器 (P.L. 106—163～207)

内裏V期の御在所東に位置する掘立柱建物S B7874の西北にある不整形な大土壙で、V期造営時の塵芥処理用の穴とみられる。土器の出土量は少なく、いずれも破片であり、S D7870・S D7872出土土器と接合するものもある。

土師器 土師器の器種には、杯AI(4点)、杯BI(1点)、杯X(1点)、皿AI(3点)、皿AII(1点)、椀AI(4点)、椀AII(3点)、高杯(1点)、甕AI(1点)、甕AII(2点)がある。杯AI(163～166)のうち、163・164はA形態の口縁部でa₀手法で調整するI群土器。165・166はB形態の口縁部でC₃手法で調整する。杯X(167)は口径9.2cm、器高2.7cmの小型品でb₃手法で調整するI群土器。皿AI(169・170)、皿AII(171)はB形態の口縁部でC₀手法で調整するII群土器。皿AI(168)は、A形態の口縁部でa₀手法で調整。I群土器。杯BI(172)は口径21.0cm、器高6.9cm。丸みのある底部に逆三角形状の低短な高台を付し、口縁部は内湾気味に外方に開く。C₁手法で調整するII群土器。高杯(181)は、大型の浅い杯部と高い脚柱部と「ハ」の字形に開く裾部からなる。杯部と脚部の取り付けはb手法による。杯部及び裾部外面にはヘラミガキを施す。II群土器。椀AI(173～176)のうち、173は平城宮土器IVに属し、C₃手法で調整するII群

土器。他は平城宮土器Vに属す椀A IでC₃手法で調整するII群土器。椀A II(178~180)のうち179は口縁部上端部のみをヨコナデした後、e手法で調整する。他はC₃手法で調整するII群土器。甕には口径16.0~16.6cmの中型品(182・183)と口径25.5cmの大型品(184)の2種類がある。両種とも口縁端部のつまみだしはにぶく、ハケ目調整も粗雑である。

須恵器

須恵器の器種には、杯A III(1点)、杯B I(1点)、杯B II(1点)、杯B III(1点)、杯B I蓋(4点)、杯B II蓋(1点)、杯B III蓋(4点)、皿B I(1点)、皿C(1点)、壺E(2点)、壺K(1点)、壺L(1点)、壺蓋(5点)、甕C等がある。杯A IV(194)、杯B I(198)は底部不調整のI群土器。杯B III(196)は、底部不調整で、灰色~灰青色を呈し、磁器質に焼き締まる。畿外産。杯B IV(195)は口縁部が内湾し椀形に近い形態をとる。底部はロクロケズリで調整し、杯B III蓋(192)と相似た胎土組成を持ち、全面に灰が降着する。畿外産产地不明。杯B I蓋(185~188)は、いずれもA形態の縁部で頂部外面はロクロナデで調整する。器高が高く、縁端部が外方にふんばるもの(185)と比較的高く縁部の屈曲が大きいもの(186~188)に分かれる。186以外はI群土器。杯B III蓋(189)はA形態の縁部で頂部外面はロクロナデで調整するI群土器。杯B IV(190~193)には傘形の頂部で縁部がわずかに届出するもの(190~192)と平坦な頂部で縁部との境が明瞭でないもの(193)がある。頂部外面はいずれもロクロケズリ調整で、190・191は灰白色の砂っぽい胎土で灰白色に焼き上がり、頂部外面に明るい緑色の自然釉が降着する。美濃産。192は縁部の挽き出しがにぶく厚く、暗灰青色を呈す。产地不明。193は他に較べ器高が低く口径も小さいI群土器。皿B I(197)は底部ロクロケズリ調整。皿C(199)は底部不調整で焼きが甘く暗灰褐色を呈し、内外面に火襷痕をとどめる。I群土器。壺Eは底部が狭く、体部の外傾度が高い形態で、肩にするどい稜をもち、口縁端部の挽き出しがにぶく厚いもの(206)、他に肩の稜が不明瞭で口縁部を薄く挽き出すもの(205)がある。後者はI群土器。前者は、底部は不調整であるが、体部はロクロケズリで調整する。削りはひっくり返さず正位の状態で行っている。产地不明。壺蓋のうち200と201は壺Aの蓋で、200は平坦な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなり、身にかぶせたまま焼成するため、口縁端部内側には薄い突起を作り出し、融着しても横から叩いて取りはずせる工夫が見られる。I群土器。201は内湾気味の傾斜で縁部にいたり、短い縁部が付く。外面全面に暗灰緑色の自然釉が降着し、内面は縁部周辺部が暗灰褐色に発色し、高火度の酸火炎で焼成されたことが分かる。猿投産。他の蓋は(202~204)いずれも小型壺とセットをなすもので、やや斜傾する頂部と断面逆三角形状の短い縁部からなる。頂部はすべてロクロケズリで調整、暗灰緑色の自然釉が降着する。壺L(207)は、肩部まで挽き上げたのち、粘土紐を巻き上げ、ロクロで調整した別の頸部を円板状の粘土に取り付け一体にした後に、円板に穴を穿ち、それを肩部に貼付ける三段構成によって作られている。底部は欠損するが体部はロクロケズリで調整。外面に自然釉が降着する。美濃産か。

ii 井戸 S E 7900出土土器 (PL. 105-124~132, Fig. 41)

内裏の東を限る堀のほぼ中央内側にある内裏内唯一の井戸で、内裏Ⅱ期~Ⅶ期まで存続する。よく清掃が行き届き、土器の量は極めて少なく、すべて内裏廃絶後の土器である。井戸底からは、土師器杯A III(125)、黒色土器A類の杯A(132)の破片が出土したにすぎず、他は井戸の埋土から出土した。尚、井戸が埋まった後も凹みとして残ったらしく、その凹みの埋土から、12

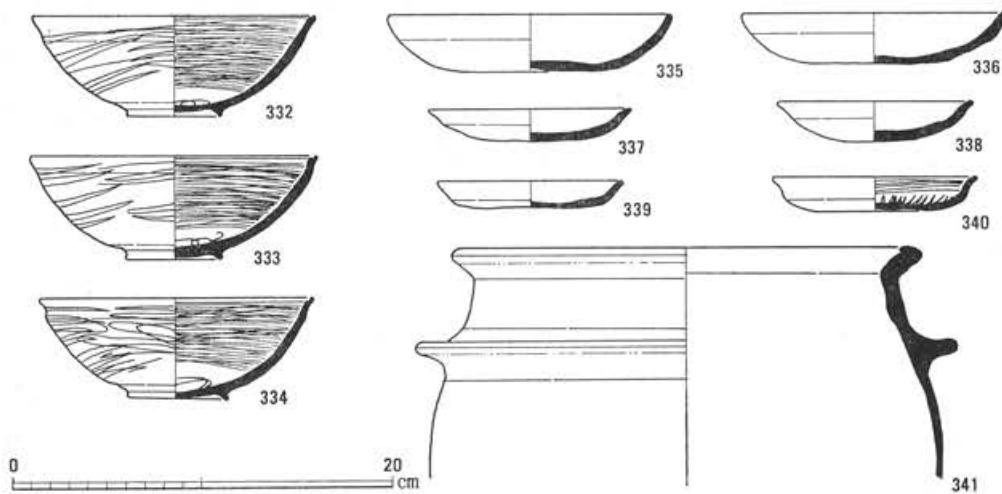


Fig. 41 S E7900 埋土上層出土土器

世紀前半の瓦器椀(332~334)・小皿(340), 土師器の皿(335~338)・土釜(341)などが出土している(Fig. 41)。

井戸出土土器のうち, 杯AⅢ(125)・椀A(130)・皿AⅡ(128)は宮廃絶直後の時期に, 他の1群は平城京左京一条三坊の三坊大路東側溝 S D 650 上層の土器群と共に持つ特徴を持ち, 9世紀後半に位置付けられる。杯AⅢ(125)は三段ナデのf手法で調整する。口縁部内面にもヨコナデによる凹凸が残り, コテの使用痕跡は認められない。I・II群のいずれにも属さない。椀A(130)は長岡京から出土する椀Cと分類されている1群と形態技法が一致する。すなわち, 口縁部上端のみをヨコナデし, 以下の部位は調整しないe手法による。口縁部外面を4回に分け, 底部外面は一方向にヘラミガキを施す。皿AⅡ(128) a₀手法で調整するが, 底部に木葉痕を認めない。外面には粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。I群土器か。

以下に述べる9世紀後半に属す一群は, いずれも器壁が薄く, 胎土に雲母を多量含み, II群系統に属す。杯AⅢ(124)は完形品で, e手法で調整する。内面には, 凹凸をヘラ状のもので削った痕跡(ハケ目痕)をとどめる。杯B(129)は口径16.6cm, 器高3.5cmの中型品で口径の割に器高が低い。C₀手法で調整し, 底部内面にはハケ目痕をとどめる。皿AⅠには口縁端部が内側に大きく肥厚するもの(127), 小さくつまみあげたもの(126)の両種がある。いずれもC₀手法で調整するが, 後者は口縁部のヨコナデの屈曲部を削り残す。皿C(131)はe手法で調整する小皿で灯火器として使用する。黒色土器A類の杯A(132)は, 互いに接合しない口縁部と底部の小片であり, 口縁部内面・底部内面に暗文を施す。

C 建物出土土器 (Fig. 42—278~281)

i I期建物出土土器 (SB7864)

I期御在所正殿東北にある東西棟SB7864の入側柱列東第5の掘形から, 土師器杯BⅠ(278), 須恵器杯AⅡ(280), 杯BⅣ蓋(279)が, 南側柱列第5の掘形から須恵器杯BⅡ(281)が出土した。¹⁾

1) 東端の柱穴から数えて5番目の柱穴という意味である。以下も同様に略記する。なお, 「柱穴」とする表記は, 掘形・抜取穴の判定がつかないものを指す。

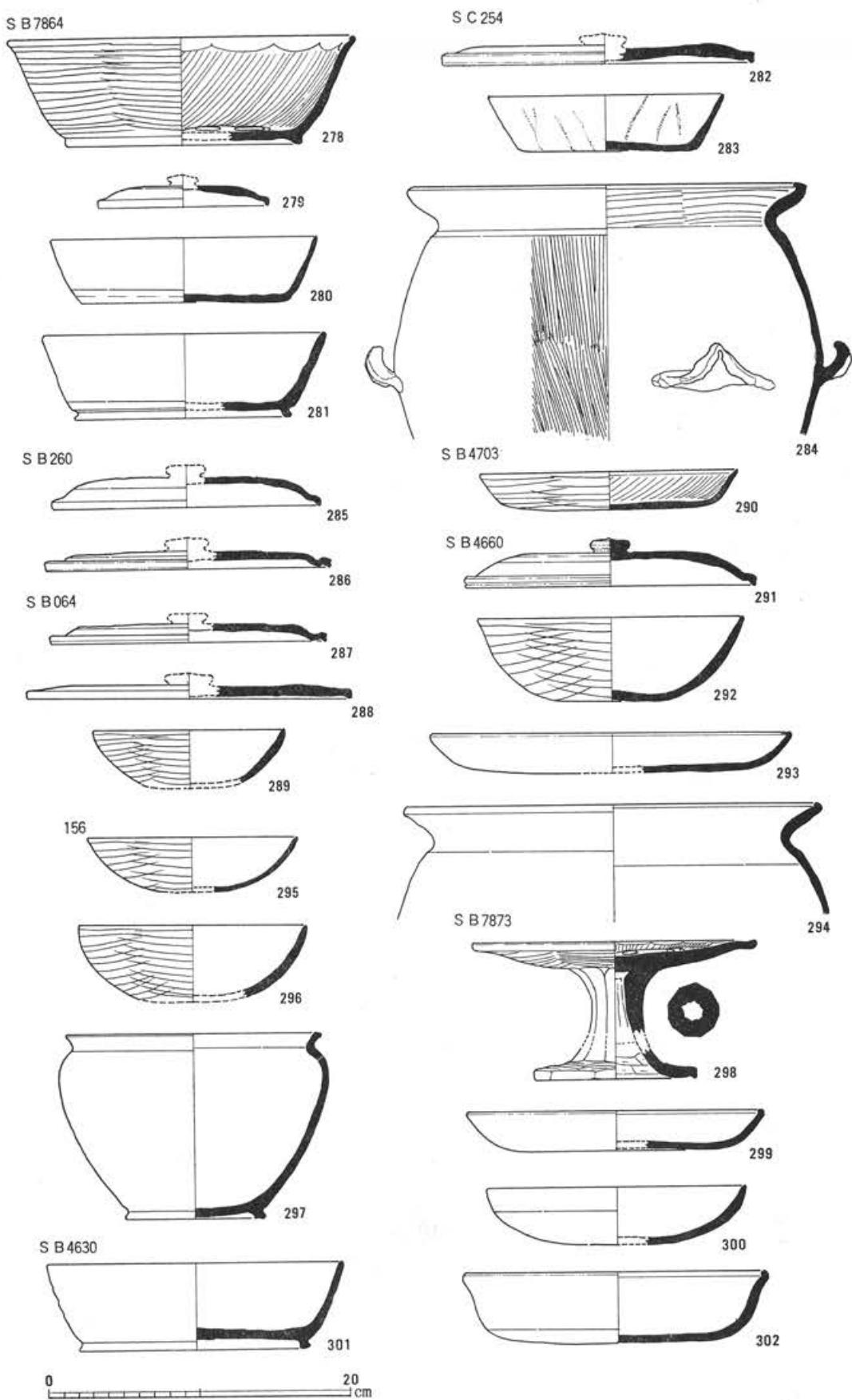


Fig. 42 建物出土土器 1

I期の造営時期を考える上で重要な資料となる。いずれも平城宮土器Ⅱに属す。

土師器の杯B I (278) は b₁ 手法で調整し、底部内面に螺旋暗文・口縁部に斜放射暗文と連弧暗文を施す。I群土器。須恵器の杯A II (280) は、底部及び口縁部をロクロケズリ調整するⅡ群土器。高温で焼成され、火彫れを生ずる。

ii Ⅱ期建物出土土器 (S C 254・S B 260・S B 4703・S B 4660) (Fig. 43—282~294)

S C 254 出土土器

内裏正殿を囲う北回廊 S C 254 の北側柱列東第 4 の柱穴から須恵器杯B I 蓋 (282)，中央柱列東 3 の柱穴から土師器甕B (284)，同東第 6 の柱穴から須恵器杯A II (283) が出土した。出土位置に付いては確証はないが、掘形の可能性が高い。時期的には、いずれも平城宮土器Ⅲに属す。須恵器杯A II (283) は、完形品で底部外面不調整のI群土器で内外面に火彫痕が残る。杯B I 蓋 (282) は、平坦な頂部とわずかに屈曲する縁部からなり、頂部外面はロクロケズリ調整。I群土器。土師器甕B (284) は、体部に平面形が三角形を呈する把手を持つ。

S B 260・4703 出土土器

内裏御在所地区の東脇殿 S B 260 の南妻柱列中央の柱抜取穴から須恵器杯 B II 蓋 (285・286) の破片が出土し、Ⅱ期建物の廃絶時期を呈す。両者ともにI群土器で頂部外面ロクロナデ調整。285は平城宮土器Ⅲに、286は平城宮土器Ⅳ～Vに属す。御在所地区の正殿 S B 4703 の南側柱列西第 1 の掘形から、土師器杯C II (290) が出土した。b₁ 手法で調整し、内面に螺旋暗文と斜方射暗文を施す。I群土器で平城宮土器Ⅲの古段階に属す。

S B 4660 出土土器

御在所地区の西脇殿 S B 4660 東庇列北第 1 の掘形から土師器椀A I (292)，須恵器の杯B II 蓋 (291) が、西側柱列北第 2 の柱抜取穴から土師器皿A I (293)，甕A (294) が出土した。椀A I (292) は a₃ 手法で調整するI群土器。須恵器杯B II 蓋 (291) は A 形態の縁部を持ち、頂部外面ヘラケズリ調整するI群土器。いずれも平城宮土器Ⅲに属す。皿A I (293) は器面が荒れてい るため磨きの有無は確認できないが、c 手法で調整するⅡ群土器。甕A (294) は、口縁端部のつまみ上げが鈍く、わずかに突出する。いずれも平城宮土器Ⅳ～V。

以上Ⅱ期建物出土土器について述べたが、取り上げなかった別の建物出土遺物も含めまとめれば、掘形からは平城宮土器Ⅲが、抜取穴からはⅣ～Vが出土する傾向が指摘できよう。

iii Ⅲ期建物出土土器 (S B 4630・S B 064・S B 7600・S C 156) (Fig. 42~293~297, 301・302)

S A 4630 出土土器

御在所地区の正殿・後殿・前殿の東にある南北屏 S A 4630 の北第 3 の抜取穴から須恵器杯B I (301) が、北第10柱穴から土師器の杯A I (302) が出土している。土師器杯A I (302) は a₀ 手法で調整するI群土器。須恵器杯B I (301) は完形品で底部不調整。I群土器で底部外面、高台よりのに一字の墨書があるが判読できない。両者とも平城宮土器Ⅳの古段階に属す。

S B 064 出土土器

御在所北方の東西棟 S B 064 の北側入側柱列東第 3 の柱穴から、須恵器の杯B I 蓋 (288)・杯B II 蓋 (287) が、南庇列東第 4 柱穴から土師器椀のA II (289) が出土した。正確な出土地点は不明であるが、抜取穴から出土した可能性が高い。杯B I 蓋 (288) は頂部ロクロケズリ調整するI群土器。杯B II 蓋 (287) は頂部ロクロナデ調整するI群土器。椀A II (289) は a₃ 手法で調整するI群土器。いずれも平城宮土器Ⅳ～V。

S B 7600 出土土器

南面築地回廊東南隅に取付く東棟 S B 7600 の南庇列東第 4 の礎石抜取穴から、土師器杯A II (Fig. 40—251) 須恵器の壺L (Fig. 40—227) が出土した。壺Lは互いに接合しないが、口頸部と

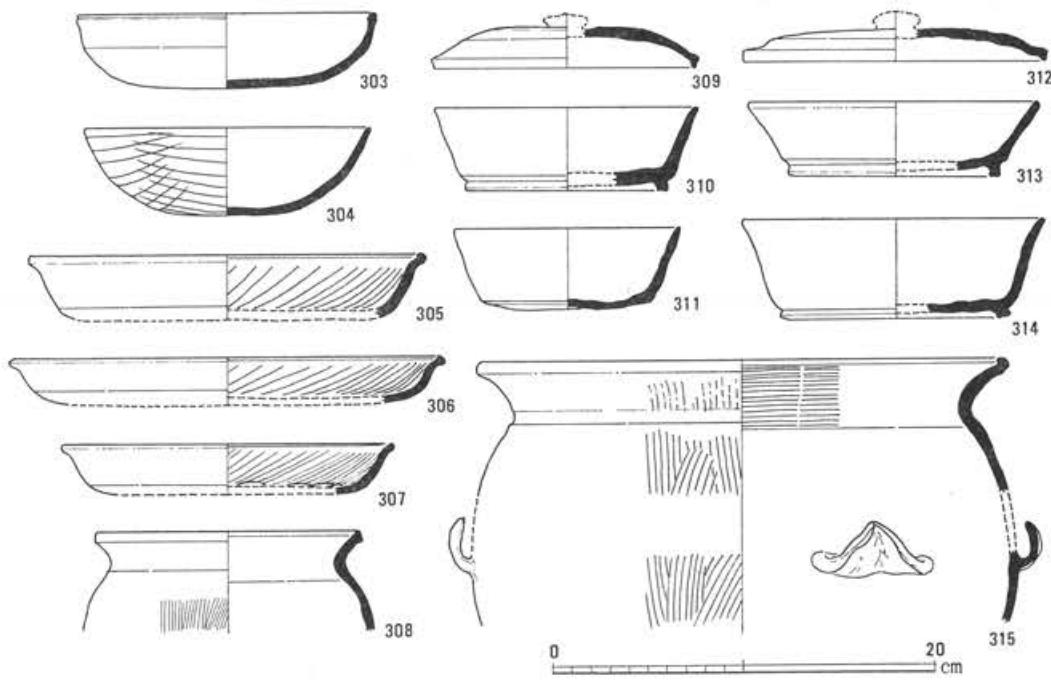


Fig. 43 建物出土土器 2

体部の破片で、高温で焼成され自然釉が降着する。杯A IIはC₀手法で調整するⅡ群土器。

東築地回廊S C 156の基壇構築土から、土師器椀A I(296)、須恵器壺蓋(P L. 105—141)が、礎石抜取穴から須恵器鉢D(297)、土師器椀A I(295)が出土した。椀A I(296)はC₃手法のⅠ群土器。壺蓋(P L. 105—141)は頂部外面ロクロケズリ調整のⅠ群土器。いずれも平城宮土器Ⅲに属す。鉢D(297)は、底部不調整。産地不明。椀A II(295)は、C₂手法のⅡ群土器。いずれも平城宮土器V～VIIに属す。

iv IV期建物出土土器 (S B7873・S B4800・S B4721・S B4704) (Fig. 42—298～300, Fig. 43
—303～315)

内裏東北隅にある南北棟S B7873の西側柱列南第3の柱痕跡から土師器皿A I(299)・高杯(298)が、同南第5の柱痕跡から土師器椀D(300)が出土した。皿A I(299)はC₀手法のⅡ群土器。平城宮土器V。高杯(298)は、口径18.4cm、復原高9.2cmを測る小型品で、杯部外面にヘラミガキ調整を施し、内面に螺旋・斜放射・連弧の三段暗文をあしらう。裾部内面及び裾部外側面にはヘラケズリ調整を施し、外面にはヘラケズリを施す。Ⅰ群土器で平城宮土器Ⅱ。椀D(300)は狭い平底と内湾する口縁部からなる形態でb₀手法で調整する。産地不明。

S B7873
出土土器

内裏西北方にある東西棟S B4800の南側柱列西第4の柱掘形から椀X(303)が出土した。椀Xは宮内から出土することは稀で、第一次大極地区S A3777の柱痕跡・S B7802の柱抜取穴等から出土しているに過ぎない。時期的には平城宮土器Ⅲ・Ⅳに伴う例が多い。

S B4800
出土土器

御在所地区西側にあるS B4721の柱掘形から、土師器杯A II(305)、椀A II(304)が出土した。两者ともにⅠ群土器で、杯A IIはa₀手法で調整し、内面に螺旋暗文と斜放射暗文をあしらう。椀A II(304)はa₂手法で調整。两者ともに平城宮土器Ⅲに属す。

S B4721
出土土器

御在所正殿S B4704の北側柱列東第一の掘形から土師器甕B(315)、須恵器杯A III(311)・杯
S B4704
出土土器

B III (310) が、南庇列東第 5 の掘形から杯 B III 蓋 (312) が、同抜取穴からは土師器皿 A I (306)・皿 A II (307)・甕 A (308)、須恵器杯 B II (314)・杯 B III (313) が出土した。また図示できないが、南側柱列西第 2 の抜取穴からは平城宮土器 V・VII 属す土師器が出土している。掘形出土品はいずれも平城宮土器 IV に属し、須恵器杯 A III (311)、杯 B III (310) は底部不調整。杯 B III 蓋 (312) はロクロナデ調整。

柱抜取穴出土品には各時期のものがある。土師器の皿 A I (306)・皿 A II (307) は a_0 手法で調整し、内面に螺旋と斜放射の二段暗文をあしらう。I 群土器で平城宮土器 III。甕 A (308) は口径 13.6cm の小型品で、口縁端部が上方にわずかに突出する。須恵器杯 B II (314) は底部不調整、杯 B III (313) は、底部ロクロケズリの後、ロクロナデ調整。いずれも I 群土器。杯 B II 蓋 (309) は A 形態の縁部で、頂部外面は、ロクロケズリの後、ロクロナデ調整。美濃産か。

V V・VI 期建物出土土器 (S A8044・S B063・S A4761・S B4610・S B8007・S A4760・S B7881・S A248) (Fig. 44—316~322, PL. 107—208~250)

S A8044 出土土器 御在所を東側塀の北端から更に北に延びる S A8044 の南第 3 の掘形から、須恵器の杯 B III (316)、同柱抜取穴から土師器の杯 C (317)・椀 A II (319)、南第 2 の柱抜取穴から、土師器の皿

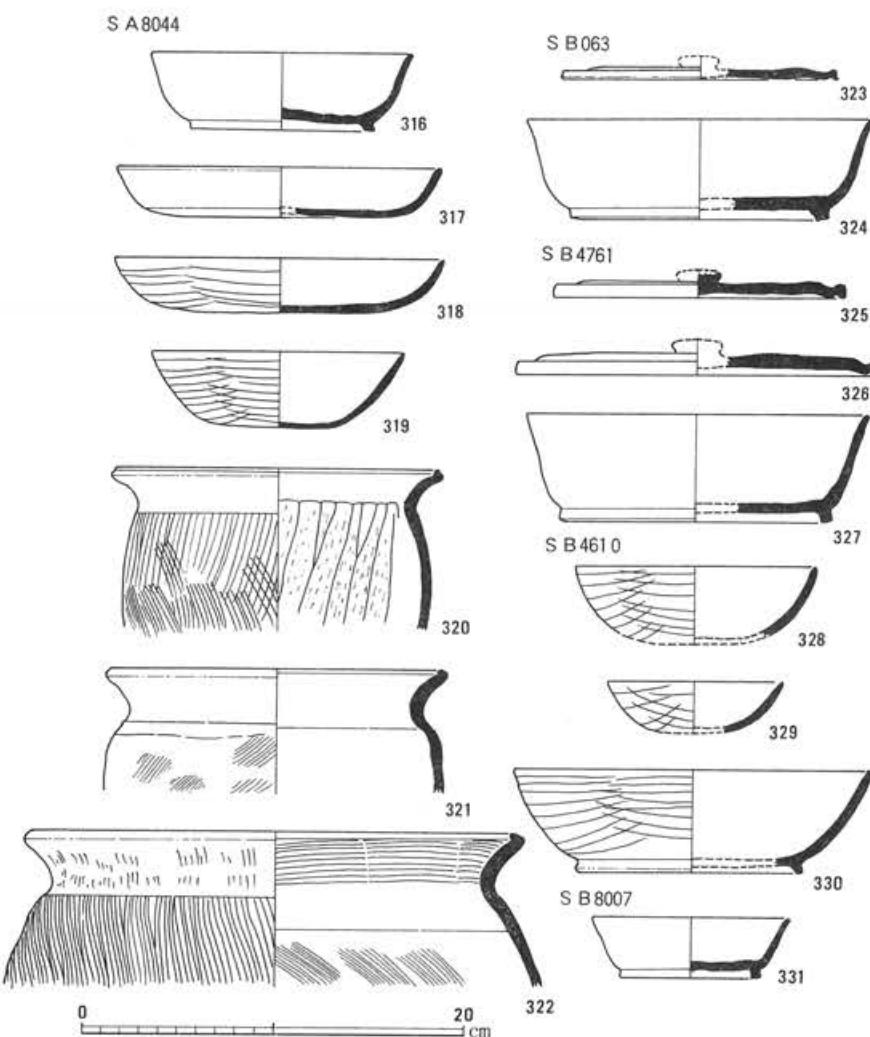


Fig. 44 建物出土土器 3

A II (318)・甕 (320~322) が出土した。須恵器杯B III (316) は底部不調整。生駒産か。土師器杯C (317) は a₀ 手法の I 群土器。III.A II (318) は C₃ 手法の II 群土器。椀A II (319) は C₃ 手法の II 群土器。甕A (320) は、体部内面を縦方向にヘラケズリ調整する。河内産。掘形及び抜取穴出土土器とともに平城宮土器 V に属す。

内裏北辺にある東西棟 S B063 の東妻柱列北第 2 の柱抜取穴から須恵器杯 B III 蓋 (323) が、南側柱列東第 3 柱穴から杯B I (324) が出土した。杯B III 蓋は頂部外面ロクロナデ調整、杯B I は底部不調整。両者とも産地不明で平城宮土器 V に属す。図示したもの以外に、南側柱列東第 3 の柱穴出土の杯B I 蓋があり、S B7881 の柱抜取穴出土のそれと同一個体である。

御在所の北の墀 S A4761 の東第14の掘形から杯B II 蓋 (325)、東第15の掘形から杯B I 蓋 (326) が、東第 6 の掘形から杯B I (327) が出土した。いずれも須恵器で、杯B II 蓋 (325)。杯B I 蓋 (326) はいずれも扁平で頂部外面ロクロナデ調整。杯B I (324) は底部外面ロクロケズリの後ロクロナデ調整を施す。前二者は平城宮土器 V に、後者は V に属す。産地不明。

VI 期の御在所前殿 S B4610 の北側柱列東第 3 の掘形から土師器の椀A I (328)、椀A II (329)、杯B II (15) が出土した。椀A I (13) は a₃ 手法の I 群土器、椀A II (14)、杯B II (330) はそれぞれ C₃ 手法、C₁ 手法で調整する II 群土器。いずれも平城宮土器 V に属す。

御在所の東北隅の囲いの外にある東西棟 S B8007 の柱穴から須恵器の杯B IV (331) が出土した。底部外面不調整で平城宮土器 V に属す。生駒産か。

御在所の西墀 S A4760 の北第 12・13・14 の各柱抜取穴から平城宮土器 VII に属す土器類が出土した。その大半を土師器が占め、須恵器も小量出土している。

土師器の杯A は法量の上で、口径 19.0cm、器高 3.9cm の杯A I (208)、口径 15.0~15.5cm、器高 3.5cm 前後の杯A II (209~211)、口径 13.5cm 前後、器高 3.5cm 前後の杯A III (212~215) の 3 種類に分化している。いずれも II 群系統の土器で C₀ 手法で調整する。

杯B には、口径 18~19cm、器高 5.3cm 程度の杯B II (225・226) と口径 17cm 前後、器高 4.9cm の杯B III (224) があり、いずれも II 群系統の土器で C₁ 手法で調整。

皿A には、口径 18.4~20.8cm、器高 2.4~2.9cm の皿A I (216~220) と口径 16.1~16.5cm、器高 3cm 未満の皿A II (221・222) があり、218・219 は I 群系統の土器で a₀ 手法で調整、他は II 群系統土器で C₀ 手法で調整する。

壺E (223) は口径 7.0cm、復原高 6.6cm 程度の小型品。体部外面はヘラケズリの後、横方向にヘラミガキを施す。II 群系統土器。

甕A (227) は口縁端部が上方にわずかに突出するのが特徴で、体部外面には粗い縦方向の刷目を残す。甕A (228) は粘土紐巻き上げ後、叩きによって体部を球形に成形したもので、体部外半上半部を横方向に、下半部を縦方向にハケ目を施す。

須恵器杯A (230) は底部が狭く、口縁部が比較的長い椀A に近い形態で、底部外面不調整。

杯B I 蓋 (229) は、縁部が大きく屈曲する形態で頂部外面ロクロナデ調整。

内裏東北にある東西棟 S B7881 の南側柱列東第 1、同東第 5、北側柱列東第 4 の各柱抜取穴から、平城宮土器 VII に属する土器類が出土した。前述の S B4710 の抜取穴出土品とともに平城宮土器 VII の古段階を代表する。

土師器の杯A I (232)、皿A I (233・234) は C₀ 手法で、杯B I 蓋 (236) は C₃ 手法で、椀A

S B063
出土土器

S A4761
出土土器

S B4610
出土土器

S B8007
出土土器

S A4760
出土土器

S B7881
出土土器

(237) は C₂ 手法で調整する。いずれも II 群系統の土器。椀 C (231) は e 手法で調整する I 群系統の土器。

黒色土器 A の杯 A I (235) は C₂ 手法で調整、器壁が荒れ内面の暗文の有無不明。外面には粘土巻き上げ痕跡をとどめる。甕 A (238) は外反する口縁部と球形の体部からなり、体部外面と内面全面にヨコ方向のヘラミガキを施す。

須恵器の杯 A III (239) は土師器の f 手法による杯 A III と形態・法量が一致する (PL. 104-87 参照)。底部外面不調整。杯 A III (240) は、239 より器高が低く、底部外面不調整。杯 B II (243) は底部端に断面方形の低短な高台を付し、口縁部が内湾気味に立ち上がる形態で底部不調整。杯 B I 蓋 (242) は頂部はロクロケズリの後、ロクロナデ調整。S B 063 の柱穴出土のものと同一個体。須恵器はいずれも産地不明。

S A 248 出土土器

正殿地区の東埠 S A 248 の南第 6 の柱抜取穴から、土師器の杯 A I (245・246)、杯 A II (244)、皿 A I (247・248)、杯 A I (250)、杯 B I 蓋 (249) が出土した。皿 A I (248) は I 群土器で a₀ 手法で調整する。他は II 群土器で、杯・皿は C₀ 手法で、杯 B I 蓋は C₁ 手法で、杯 B I 蓋は C₃ 手法で調整する。平城宮土器 VII の古段階に属す。

D 特殊土製品・墨書土器・埴輪 (PL. 7-323~328)

土馬

特殊土製品には、埴輪・陶硯・土馬がある。土馬は 6 A A Q 区の包含層、S C 156 の雨落溝上層 (805)、S C 640 の雨落溝からそれぞれ I 点、6 A A P 区の井戸 S E 7900 の井戸底のバラスより I 点 (802)、計 4 点出土した。いずれも小型の土馬で完形品はない。粘土板から四肢・頸部・尾部をつまみ出し折り返したものに、橢円形に近い粘土板を頸部に取り付け頭部を作る形式で奈良時代末期に属す。

硯

硯はいずれも須恵器で作られたもので、6 A A Q 区の S C 640 の雨落溝 (323)、6 A A Q 区の溝 S D 7863 (801)、井戸 S E 7900 西方の土壙 (802)、包含層 (802) から蹄脚硯片が S D 7872 から花弁硯 (804) が出土している。800 は硯部と脚台とを別作りにして接合する型式、蹄脚硯 A に属し、802 は、その型式に属す脚台片。801 は硯部から脚台まで 1 体につくり、脚台に三角形透をあげ、透の間に蹄脚飾りを貼付する型式、蹄脚硯 B に属す。803 もこの形式に属す。804 は、硯部外側面を花弁状にあしらう型式であるが、弁数については不明。八花硯と分類されたものに似るが、八花硯は、内面に硯部外面と同じ形の八花を一段高くして陸部を作り、海と区別するが、この例では海と陸の区別がない。

墨書土器

墨書土器は、前述の S A 4630 の柱技取穴出土品の他に 6 A A P-L 区にある小穴 2 基から、それぞれ 1 点づつ出土しているが、一つは、杯 B 蓋の頂部外面に、他は杯 B の底部外面に墨書したもの、いずれも判読不可能。

水鳥形埴輪

埴輪は、包含層・整地土にも混じるが、多くは神明野古墳前方部周溝中から出土した。多くは円筒埴輪片であるが、ここでは比較的残りのよい水鳥形埴輪 (805) を取り上げる。805 は台となる円筒部・頭・羽・尾を欠損するが、体部はほぼ完全に復原出来る。尾と羽をそりあげた形の水鳥で、ハケ目で調整する。後部には円孔をうがつ。

3 木製品・金属製品・石製品

今回報告する調査区から出土の木製品・金属製品・石製品は、調査面積のわりに出土点数が少なく、木製品24点、金属製品57点、石製品4点、ガラス製品1点を数えるにすぎない。金属製品には鉄製品52点と銅製品5点があり、鉄製品の大半を鉄釘(42点)が占める。銅製品には銅錢3点と銅帶具の丸柄と薄板小片が各1点、石製品には巡方1点と砥石3点がある。以下種類ごとに説明する。

A 木 製 品 (PL. 109・110—1~23・Fig. 45)

木製品の点数はごく少なく、17が市庭古墳周濠から、19がS E7900掘形から出土した以外は、すべてS E7900埋土からの出土である。木製品の名称は、奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』1984による。

斎串(1~3) 完形に近いものが3点と、頭部を欠くものが1点ある。いずれも針葉樹板目材で、表裏面とも割り板面をとどめる。1は両側面の左右対称位置を三角形に切り欠くC VI型式で、切込みが8対ある。片側の大半と他側の一部を欠損する。長さ32.3cm、幅2.3cm、厚さ2.8cm。2と3はC IV型式で、頭部の切込みは左右とも2回、基部を少し欠く。いずれも復原長23.2cm、幅2.8cm、厚さ2.0cm。

部材(4) 朱の痕跡がある板材で、左右の縁辺近くに3個一対の小孔があり、綴じ穴に樺がのこる。曲物容器の側板を再加工したもので、他の材と組み合せて用いられたものか。全形は不明。長さ14.0cm、幅6.9cm、厚さ0.6cm。

木錘(5~12) 2種類出土している。ひとつは、いわゆる「槌の子」である。丸木材を用いるもので、端部側面には樹皮をのこす。中央部は中心に向かって両方から円錐形状に削込む。完形品が4点と、端部を欠損するもの1点、中央部で折れたもの1点がある。5は中央部で折れており、端部径は4.4×4.0cm。6は長さ12.3cm、端部径3.9×3.4cmおよび4.5×3.7cm、中央部径2.6×2.5cm。7は長さ13.7cm、端部径3.8×3.4cmおよび3.9×3.4cm、中央部径2.6×2.3cm。8は長さ13.5cm、端部径4.9×4.0cmおよび4.5×3.8cm、中央部径2.9×2.9cm。9は長さ14.1cm、端部径4.8×4.3cmおよび4.0×3.6cm、中央部径2.9×2.4cm。10は一端を少し欠くもので長さ13.8cm、端部径4.6×3.8cmおよび3.6×3.3cm、中央部径3.0×2.9cm。6・7・10および8と9はそれぞれ同一材から制作したものと考えられる。

もう一種は、丸太材の両端を切断し、その約3分の1を割りとり、材のほぼ中程の丸木面から割面にかけて方孔を貫通させたもので、丸木面にはなお樹皮がのこっている。アカガシ亜属。2点出土しており、同一材から作りだしたものらしい。5は長さ15.4cm、幅6.7cm、厚さ3.0cm、6は長さ17.1cm、幅6.3cm、厚さ3.4cm。

櫛(13~16) 完形品1点と破片3点。完形品(13)は、肩部が角張るA I型式で、破片のうち端部を含む2点(14, 16)は、肩部に丸味をもつA II型式である。大きさをみると、13は幅11.6cm高さ3.7cm、14は残存幅6.8cm高さ3.6cm、15は残存幅5.0cm高さ4.3cm、16は残存幅7.1cm高さ4.4cmで、高さの差で2群に分けることができる。



Fig. 45 墨書のある曲物底板片 (1:1)

曲物容器 (17~24) 曲物容器は、側板と底板が遊離した状態で出土した。側板は、破損が著しく図示できるものはない。20はヒノキ材目の釘結合曲物底板で、側面に目釘穴が7つある。一部が欠ける。直径27.2cm、厚さ1.0cm。表面裏面とも削り、全面にシブを塗っているが、表裏とも傷が多数ある。17は樺皮結合曲物Aの底板である。綴じ穴が4対ある。21は釘結合曲物底板で残存率 $\frac{1}{2}$ 、直径は25.2cm。板目。19は残存率 $\frac{1}{2}$ 弱で直径は17.2cmに復原される。針葉樹柾目。表裏とも腐食が著しい。18は残存率 $\frac{1}{2}$ 、復原直径23.4cm。ヒノキ柾目。あたりが多い。22は蓋板で残存率 $\frac{1}{2}$ 、板目材。厚さ0.51cm。23は折敷の底板で、残存長27.2cm、厚さ0.79cm。残存率 $\frac{1}{2}$ 、下部の再側面を削っている。

Fig. 45—24 は、曲物底板片とも考えられるが、一方の端の削り方が雑であり、断定はできない。復原径は、7.1cm、厚さ0.43cm。表に「白物桶」と2回墨書し、その下に向きをかえて「奈尔波」「物□」と書く。上部には墨画らしきものが描かれるが、一部欠失しており何の絵かは不詳である。裏面には、「白物桶福德」ほかの墨書がある。

B 鉄 製 品 (PL. 111—1~17)

刀子 (1~3) 3は現存長23.9cmの大型の刀子。切先をわずかに欠損するが完形に近い。茎部に柄の木質が、茎元に幅0.45cmの銅板を巻いた鎧が残る。茎の長さは8.9cmで、茎先は尖がある。身の造りは鋤のため明瞭でないが、両面平造りとみられ、刃部の先端付近がわずかに研ぎ減る。身の長さは15cmあり、『延喜式』木工寮にみえる五寸刀子に相当しよう。正倉院に残る80口の刀子は大部分が刃長10cm以下の小型品で、最大のものでも刃長15.8cmである。『延喜式』彈圧台の項には「凡刀子刃長五寸以上。不得輒帶。但衛府者徳之。」とあり、本例が携帯を許された刀子の中では最も大型の部類に入ることがわかる。身元幅1.45cm、棟厚0.5cm。SC 156 西側溝出土。

1は身部を大きく欠失した平造り角棟の一般的な刀子。刃区、棟区はともに不明瞭。現存長14.8cm、棟厚0.48cm。SB7600 磁石抜取穴出土。2は身元の幅が3cmの大型刀子。銹化により全体が膨れ変形著しい。棟区・刃区を明瞭に造り出した両面平造り。棟厚は0.6cmと厚く、角棟の角がわずかに丸まる。

本例は身幅1寸の超大型刀子で、『延喜式』木工神祇五斎宮年料供物の項にみえる長1尺、広1寸の刀子に相当し、「長刀子」と呼ばれ、5寸以下の刀子と区別されたものであろう。6AAQ-AA11区の赤色バラスより出土。

紡錘具(5) 径4.6cm、厚さ0.25cmの完形に近い鉄製の紡錘。銹化が著しいが、中央を貫通する軸の一部が残る。軸は径0.45cmの丸棒で、紡錘はわずかに反りをもつ。SB4704 柱掘形より出土。

座金具(6) 復原径7.8cmの円形の座金具。厚さ0.3cmと薄手で、表面をやや甲高に造る。中央に一辺0.65cmの方孔があき、周縁は鏽整形により斜めに小さく面をとる。建物の扉金具とみられる。LO23区SD4753出土。

不明品(4) 振りを加えた茎と、緩やかな区部、方形の身部からなる鉄製品。先端に刃部を造り出すが、鎌か鑿か判断としない。現存長6.1cm、身部の長さ3.0cm、身部最大幅1.3cm。SC156西側溝出土。

釘(7~17) すべて鍛造の角釘で、折損のため全長を知りうるものは少ない。釘頭の残るもののが28点あり、その形状から以下のように分類できる。

11・13・14は方形の釘頭をもつ方頭釘。13は1.5cmの脚頂部に2.2×2.3cmの方頭がつく全長20.4cmの完形品。SE7900石敷上面出土。14は脚に対して頭部のつくりが小さいもの。SA248柱抜取穴出土。11は逆に大きめの頭部をもつもの。方頭釘は他に1点出土しているが、概して大型品が多い。15・16は釘頭を丸く整形した円頭釘。2点出土。笠形の大きな頭部をもつ通有の円頭釘とは異なり、ともに径1.8cm前後の小さめの頭部である。15はSE7900石敷上面出土。現存長11.6cm。8・12は脚上端をそのまま短く曲げた折り釘。2点出土。8は小型品で現存長5.9cm。12は脚断面が扁平な大型品。現存長15.5cm。この他に脚上端を叩きのばしてから巻きこむように折り曲げた巻頭釘が4点出土している。いずれも脚断面が長方形で、9・10にみるように長さ6~9cmの小型品である。床土直下から出土しており、時期の降るものであろう。また7のように特別に頭部をつくり出さない方錐形の角釘がSB4712柱穴掘形中、SB7600磁石抜取穴やSD4810から5点出土している。このうちSB4712出土品は3点が束ねた状態で銹化固着している。なお、特殊な釘として、頭部を杏仁形につくった大型の釘(17)がある。

C 銅 製 品 (PL. 111—19・20)

銅鎔(18) 朝服の腰帯を飾る帶金具。最大横幅2.61cm、縦幅1.8cmの完形の丸柄表金具で、帯幅0.9寸の烏油腰帯に伴うものである。甲高に作り、内面に3鉢を鋳出しが、いずれも鉢足を折損する。下辺に沿って横幅1.50cm 縦幅0.45cmのやや不整形な透孔があく。黒漆は内外全面に塗られており、特に内面に厚く残る。SE7900底面出土。

耳環(19) 断面円形の中実の銅製耳環。腐蝕が進む。長径2.9cm、短径2.7cm、断面径0.65cm。

6AAQAI20 区出土。

D 錢 貨 (PL. 112 · Fig. 46)

井戸 S E7900 から銅錢が 3 種 3 点出土した。いずれも遺存状態は良い。以下、型式の分類は『報告Ⅵ』(pp. 97—103) に従う。

和同開珎 (1) 「開」字の門構え上端が隸書風に開いた「新和同」。鑄上り良く、錢文は字画が細く鮮明。最も一般的な和同開珎 A で普通和同とよばれるものである。背面の外縁および内部の彫りが深く、文字面厚は 0.4mm と薄い。井戸底出土。

神功開寶 (2) 「神功」の二字を欠く半欠品。「開」字は隸開で、和同錢と同様に「开」を「井」につくる。「寶」の貝も小さいなど、最も例の多い「長刀」とよばれる神功開寶 E の特徴をつ。鑄出しあは浅く、錢文は不鮮明。外縁の厚さは 1.1mm と薄く、内郭孔は整打ち放しのままで不整形。井戸底出土。

隆平永寶 (3) 大型の隆平永寶。外縁と内郭の幅が広く、文字も太字であるが、「大様」の中では小字に属する。「永」「寶」がともに小さく、「平」の縦画も短いなど「平永」とよばれる隆平永寶 B。外径 2.64cm、重量 3.50g。S E7900 井戸枠内灰褐色粗砂層出土。

E 石 製 品 (PL. 111—20~23)

石鎧 (20) 白色地に黒色の斑文をもつ黒雲母花崗岩製の巡方。全体に風化が進み、光沢面を失うとともに、四周の側面の面取りも崩壊する。裏面の四隅近くに 2 孔 1 対の潜り穴が長辺に平行して穿れる。うち一箇所は潜り穴の損傷に伴い、1 孔を利用した直交方向に新たな潜り穴を設けている。現存寸法は横幅 3.43cm、縦幅 3.24cm、厚さ 0.5cm。6 AA Q—B E07 区暗褐色土出土。

砥石 (21~23) 3 点出土。21 は灰色地に径 0.2cm 大の黒色粒子に含む閃緑岩製の砥石。方柱状の定形化した砥石であるが、通有のものよりもかなり大型品である。長軸方向の四面を使用しており、中央部が大きくすり減ってくびれ、折損に至る。折損後も表裏二面を使用。表裏面は短軸方向に大きく凹状に研ぎ減る。小口から端部にかけての未使用面には採石時の敲打による整形痕が残る。小口部幅 9.3cm、厚さ 8.1cm、現存長 21.9cm。S C156 西雨落溝出土。22 は厚さ 3.7cm 前後の扁平な砂岩製の不定型砥石。折損により本来の形状は不明であるが、上下二面と側面の一部が使用により磨滅する。最大長 24.6cm。S B7600 碕石抜取出土。23 は明灰褐色地に 0.1cm 大の黒色粒子を密に分布する凝灰岩製の砥石。両端を欠損した砥石を玉などの研磨に再利用したもの。表裏面および両側面には当初の平滑な研磨面が残るが、新たに幅 0.9cm 前後、深さ 0.2~0.6cm の平行する溝状の窪みを表面に 5 条、裏面に 3 条設けている。幅 8.2~8.7cm、長さ 7.3cm、厚さ 3.2cm 前後。S C156 柱穴出土。

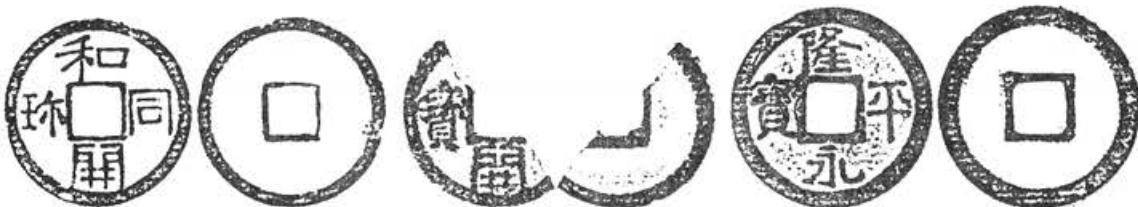


Fig. 46 井戸 S E7900出戸銭貨拓影